

紀南郷土学会研究録

(資料集①)

紀南郷土学会研究録

(資料集①)

南紀郷土学会 刊 研究録 一覽表

一、紀州の板碑について	1	一三、日高地方における 社会興奮と相互扶助
二、道成寺鐘小話		一四、はらいど観音縁起
三、日高郡における地盤 隆起に関する一考察		一五、日高地方における 宗教分布とその変遷
四、善明寺焼		一六、大陸と日高の正月風景 ― 相似性畧表 ―
五、天壽丸の漂流		一七、為房卿日記と中右記、御幸記
六、父母状の由来		一八、道成寺関係文献展観目録
七、日高地方文化史綱目		一九、日高地方夏の田畯祭事について
八、日高地方に存する雑信仰形式		二〇、天明の造酒屋定
九、躑躅		二一、地名惑問
一〇、神祇令		二二、けほん踊歌詞
一一、切目王子記		二三、置手形のこと
一二、瀧本文書		

二四、土生村検地帳 寫……………

二五、橘類加工考 及び全補遺……………

二六、南紀水害時の
氣象現象について……………

二七、紀州棟札の研究……………

二八、日高和歌史要……………

二九、農家夏の行事補遺……………

三〇、西牟婁郡すさみ町における

南京人左廷玉の墓について……………

三一、魚名ゴリの研究……………

三二、紀州海産貝類について……………

三三、日本の祭礼……………

おことわり

廿八年の水害のため記録散佚して、
順序不同、脱落もあります。

既発表諸賢の御寛恕を願う次第です。

(昭和^{一九五五年}三十九年八月現在)

日高地方文化史綱目

井上 豊太郎

序 説

文化

文化というの詞はわかったようであらう内容の広汎な詞であるが、わが國では文化ともちいた年号がありました。また明治の初期には文明開化という詞が流行した。これが要約すれば文化となる。新憲法施行後、「文化國家」の讀が唱導されたが、「文化」の意義は一向明瞭にされていない。文化のことを論ずれば際限がなからうし、またこれだけで一の大仕事であるが、ここでは通俗の意味で、「文化とは人類が生存生活の手段として自然環境にはたらかけてゆく努力の結果のあらわれ」をさすものとしておこう。

文化史歴史はすべて人類民族のあとを調査し、累積し、解説して系統たつる仕事であり、ひろい意味の文化史がその全部であり、過去を尋ねて現在を知り、将来を察する温故知新の事業である。従来の史学は権力争奪史、政治史に偏傾しすぎてきたので、これからの歴史は民族發展史、民族消長史、民主民俗史的方向を指向し、われわれの日常生活から遊離しない歴史、すなわち社会文化史でなければならぬ。

われわれは現在、以後の史学の使命をこの方向にもとめたい。

地方文化史

文化は環境に対応して發展してきているゆえに、各地方にはそのなにか自然の状況によつて制限せられたる地域内にあつて、特殊の形態様相をそなえている。ここに地方文化史が独立に存立する数多の特色ある地方文化史が集合し、その比較研究が帰納して正確な一國一民族の文化史が編制され、われわれの現在におしえ、将来の指標とすることかできるのである。

地方文化研究の意義ゆえに、地方くゝの文化研究はその地方の人々に思慕の感情を満足さすのみの因事ではなく、学問の一翼をもつて負荷してたつことになるのである。

和歌の縣（紀州）のごとき地域にあつても、自然山水の状況が人情、風俗、言語、性格にまで独異の存在をしめして、紀の川筋野上谷、加茂谷、有田郡、日高郡、田辺附近、新宮、熊野と各自文化發達の課程において、特殊の様相をそなえている。日高地方文化史といった題目が、他に独立した内容をもつ存在をしめしうると信ずる。

日高文化史綱目

これはかつて御坊町青年学校主催の成人講座で話をしたことがらであるが、ここではこの話を組立てた資料の種あかしをして、諸賢の研究の参考に供しようと思うのである。

本文

丹生津姫の命の真妻山天降紀州は、神代の時代に随分はやくひらけた國である。先住民族の跡も中に見出されてをる。人類学の教える所に従えば、わが日本の民族は二の系統を持つている。

一は朝鮮から山陰、北陸へと日本海側のコースをたどって渡来した出雲民族であり、一つは台湾方面から九州、四國を経て紀伊國にいたった生蕃系の大和民族と稱せらるる系統の民族である。

この二系の民族は神代の時代に交渉がふかく、その場所はお出雲と紀州である。出雲に日の岬があり、みほが関があり、紀伊に日高の日の岬があり、三尾があ。三尾はみほの音便でみをとったものと思われる。加太の淡島神社の祭神の一人少名彦名の命は、出雲から丸木舟で加太に來航とおもわれ、熊野の諸手船は出雲の美保神社に同型のものが保存されている。

すさのをの命は出雲に父母をとめてゐるか、紀州ではいたる處でまつられている。有田郡千田の須佐神社が根元とおもわれるが、現在は伊太岐曾の神も熊野の神も主神は、すさのをの命となつてゐる。

□見けんでは熊野の主神は、いざなぎ、いざなみの二神で、これかむすびの神（ふすびの神は音読でそんなものとおもわれる）。この親神のゆえに祭祀の所を本宮―新宮と宮の字をつけ、本宮と云いならはしたものとおもわれる。

もとの熊野今三重縣南牟婁郡有井村木の本の手前に花の窟があり、毎年春花をそなえて祭をする。こゝがいざなみの命をはふりし跡といつたえてゐる。元來紀州の山が西に向い、東を背にしてたつてゐる形で、西來の文化のゆきのとまのとなつてあり、その背中あわせの伊勢が東向えの出発点となつてゐるとゆわれる。

このにしからのゆきのとまりの熊野の領する所、その子神筋にあたる丹生津姫の命が、その西方大和十津河辺から、高野天野野上奥から、有田、日高までを領地として支配することになったものとして、話の符節の合ないことではないのである。

伝説でも丹生津姫が鳶にのつて、眞妻の山にあまくだつたのだとある。眞妻山は眞妻村崎ノ原松原、丹生村大瀧川猪内川（川中村）にまたがつて存在する山であり、山嶺に觀音堂があつたものであり、眺望は日高一円から海におよび、田辺灣を遠望しうる景勝の地位。「紀伊続風土記」によれば、この山麓一体に眞妻神社を奉祀していたことが明らかであり、眞妻村三社のほか、切目川梗川、丹生村、川中村等にはそれく眞妻大

明神を祀っていた。いづれも丹生津姫である。

この眞妻という詞がすでにおもしろい。吾妻、上妻、中妻、下妻（茨城）、三妻などという妻と云う字を使っている所もあるが、「まづま」の用詞がこの丹生津姫の天降りと何か関係はないのかとも一考させれるのである。

丹生津姫の命は人民に農耕を教えたともいわれ、農林の技をひろめられた一人と思われるのであるが、——この神の眞妻山天降が事実とすれば、これによって日高の地方え農耕、山林についての文化を拓来したものと考えられることである。

この伝説を歌ったのが加納諸平の眞妻山の歌（長歌）である。

ここに丹生告門という一文がある。一千年も以前の古文書だとして、「紀伊続風土記」編纂のころ天保時代には嚴存してをったのである。現在はどうなっているか、この「のりと」の文は、全文本居内遠の丹生告門考證に採録されてをり、明治になって水戸の栗田寛博士の「栗里雜著」のなかにも同博士の考證が掲載されている。この告門文にもある「江川の丹生に忌拔されし」いう所は、江川に眞妻という小字名あり、もと神社があつた現在丹生中学校の上の山の尾のところ。

神代の文化の研究については紀州は資料が多い。

なを一言しておくことは、丹生津姫の命が鳶にのつて天降つたので、鳶を全神のお使いしめにしていると、いうこと、この神使徒に鳥獸を使う例をいえば、伊勢神宮雞、熊野鳥、稻荷きつね、淡島ひきがえる、八幡鳩、弁財天（佛）蛇など。これは佛教からきたものかおもしろい。民俗的研究題目といえる。

参考資料

- 一、平田篤胤 神代系圖（丹生津姫の命・木之花咲耶姫という外）
- 二、本居内遠 丹生告門考証（本居全集）
- 三、栗田寛 全 （栗里雜著）
- 四、紀伊続風土記
- 五、井上豊太郎 眞妻神社由緒（單行本）
- 六、丹生広良 丹生神の研究（紀州文化研究誌編入）

神功皇后凱旋

神功皇后がしらぎに外征して勝ち凱旋したが、帰京の途次に鹿児島坂の玉忍能王の兄弟の反乱

にあい、一たん難をさけて紀伊にきたり。日高の小竹(しの)の宮で群議をこらし、この反乱を平らけたと云うことが「日本書紀」九にでてゐる。この小竹の宮はどこかというところが、古来考證する学者の研究題目となつてあり、元^{二六八八・一七〇四}禄の学者柏原益軒は、それはそれは衣奈八幡宮であるといい、仁井田好古らは那賀の志野(長田村)であるといつてゐる。私は今これらの考證論をしようとは思はない。書記にはあきらかに日高の小竹の宮としてあるのだから、日高の小竹の宮としておいてよいと思ふのである。もつとも神功皇后伝説としても王子(応神天皇)の「えな」をうづめたから衣奈の名があり、親子対面の処だから逢母(三尾)という名がのこつてゐるんだという。牽強附会をおもはしめる伝説もある。書記の記事には、その時「晝くらき」と夜のごとし」とあり、日蝕をおもはしめる記載があり、之はあづないの罪だとある。日高々等学校西館西の一本松「小竹の祝塚」はすなわちその故事を語る記念物であるとされている。小竹とかいて「しの」とよませる所は日高にかぎる用字のようであり「しの」は篠で、地主神大貴己命(おおあなむちのみこと)をまつたんだという。

おおあなむちは那智の神なども同じで地神であり、「だいこくさん」と一緒にされがちで、大國主の命ともごっちゃにされている。大黒天は佛天の一で伝教大師が比叡山にまつるをはじめとするといわれている所である。私の着目する所は、神功皇后が新羅外征から帰られて、外地の文物を移入され、ここに一の文化進展の期を劃されたのではあるまいか。もしそうだとするとその文化の洗礼を受けた、そもその始がわが日高ではなかったかいう点である。

「日本書紀」の記事が出たから参考までに申上げておくことは、御承知でもあろうが、はが國の上代のことは「日本書紀」と「古事記」、それから「古語拾遺」などの記載によるほかはない。「古事記」については、本居宣長が「古事記伝」四十八巻を書いて、ほとんど完璧の解をなしてをる。「古事記」は読みにくい本である。「日本書紀」は漢文体で宣長などは排斥したが、解り易く出来ていて読み易い。「古語拾遺」は小冊子で史書とは云えない。ここに「舊事記」または「舊事本記」という青物がある。

これは貝原益軒なども私事^{私和}始といふ、自著に引用している程であるが、偽書だといわれている。伊勢の屋代弘賢という学者の偽書考によると、この書は伊勢神宮の奥の院の虚空蔵の別當と、伊勢の御師某等の偽物で、それらの人が処罰されたことがあるといふのである。

佛典で地藏經は偽經であるといわれてをり、儒教畠で忠經が□融いう知事か北海道長官位の人の書で、□人の語録にあらずとされている。ことごとく書を信ずれば、書なきにしかずで、古典研究者の心すべき点である。

参考資料

日本書紀卷九

神功皇后の章

拙著

小竹八幡神社社史(未刊)

紀伊続風土記

(仁井田好古等)

八幡神社本記

(貝原益軒)

(この書、島(御坊町島)、鈴木啓市氏方に所蔵している)

役の小角の龍神温泉発見

この小角のことは「日本書紀」に記事があり、今から千二百十何年昔、

舒明天皇^(六百三十四年)の六年に生まれ、大宝元年^(七〇一年)に六十八才箕面山中で死んだとなっておる。役行者といわれて、大峯山、箕面山、そのほかの日光山、相模大山など、当時人跡未踏の深山を跋涉した、アルピニストの大先達といえる。小角ゆわれる所頭に、小角をもった畸形人だったことが察せられ、大峯山圖絵にかかれていた前鬼後鬼の青鬼赤鬼ともに、南方渡来の人だったのではあるまいかと云われる。人類学的に研究して面白いであろう。この役の小角が龍神温泉を発見したんだと、応永^(一三九四―一四二八年)年間高野山の僧堯圓阿闍梨のかいた龍神温泉縁起に記されている。この辺から関西一体にかけて、なを行われている峯入(山上まいり)の行事は、何時頃から始まったものか、たしかな記録はないが、その行をする山伏の本山が二つあった。一つは京都の聖護院で本山派といふ、一つは三寶院で當山派という。

またこの大峯山参詣のコースによって、順の峯入迄の峯入と分けられ、本山派は順、當山派は逆のコースをとるを例とした。熊野の本宮、新宮那智から大雲取、小雲取から十津川沿いに、大和大峯山にいたる道順をとるのを、順の峯入とも。先ず吉野から大峯山にのぼり、熊野にくだりまいるのを逆の峯入といわれた。山伏修験道の名でよばれるこの大峯山もうでは、現在まで女人禁制で、以前は俗人であっても山上まいり七日前から女をしりぞけ、水垢離をとって精進潔斎したものである。修験道の行法は神えも佛も心經をあげ、護摩をたく。天昌の廻峯行とおなじであるが、そのよむ心經のはしりながし、よむ例でいそがしくて、ついてゆけぬ程である。山伏の服装は頭にと金をいたゞき、腰になわのヒュッケに代わるよき、尻にしき皮、くじゃくの羽を腰にさし、法螺貝ふいて行く。法螺は山獸おどし、孔雀は毒けしの役目をする。腰なわは火なわの代用し、またロープの代用にも使うのである。

役行者の行は加太友ヶ島から葛城山脈をつとて大峯山に行くのを西の行場と云い、海草郡阪和線六十谷の墓の谷は、行者の母の墓があるそうでという。行者は孝行者であつたという。粉河の行者堂、河内の観心寺などに遺跡がある。加太友ヶ島には般若窟深蛇池など七ヶ所の遺跡がある。また熊野本宮から一旦新宮に下り、那智に詣でて大峯山に入るのを東の行場と云い、小笹奥廻りは大台ヶ原に至る。これを奥がけという。

現在は西のコースが忘れられ、熊野まいりが忘れられ、三宝院たえ、聖護院が個別に峯入をやり、また友ヶ島名などに参詣する。一般は洞川から登り、三里くだり七里で吉野山え下る一日の行路となつた。

昔は峯入の帰参の人に、道に寝てまたげてもらえ。お。こりが落ち夏の疫病にかゝらぬと、神聖祝され「陀羅尼助」今も高野山にて売る腹薬をみやげにしたものである。これはとりとまらずの木のせいを煮てのばしたものだ。この役の行者えの信仰は、わが郷土の人に山嶽信仰を与え、山のぼりの仕方を教えている。龍神温泉の発見といい、一種の民俗文化に影響をあたえていることはあきらかである。

参考資料

大峯山入圖絵 (刊本)

堯圓阿闍梨 龍神温泉縁起(写本)松本功氏方所藏

岩谷白嶺 役行者(刊本)

井上豊太郎 天誅組紀州落顛末(單行本)龍神温泉縁起採録

道成寺創建

道成寺が寺伝のように文武天皇の勅願寺であるとすると、その頃に建立されたことになり、の片田舎で勅願寺が建立されたということは、みのがせないことで、その地方文化に与えた影響は多大であつたとみるのが至当である。しかしこの寺伝には文書の根拠がなく、文武天皇の皇妃にのぼつたというについての伝説も、髪の毛を雀がくわえていつて、奈良の御殿まで持つて行つたと云うことも、今日の常識では奇蹟的な説話であつて信憑しがたく、宮子姫の名も近年の附会である。このことはすでに屋代弘賢が「道成寺考」でくわしく説明しているところである。たゞし文明年間の楼門建立の勸進帳があり天授の年号の瓦が残存しており、また正平年間の鐘録が残つておる所をみれば、南北朝以前の建立と一応推定される。また本尊の彫刻が弘仁佛だと云うことも一考に値するであろう。

寺の構圖が昔のままだとするならば、本堂前に池をおいているを石壇階段のなだらかな白酖などからも、

一応奈良町時代を忍ばせるものがあるといえる。私のここに申上げたいのは縁起絵巻にもられている思想が法相宗の考方に近いものがあるということである。或いは華嚴宗にちかいものだという方が適切かもしれない。法相宗はわが國最初の佛教で、現在なお興福寺、薬師寺など奈良の佛寺にこの宗派が現存しているのである。道成寺伝がその建立の歴史の古いことをほくらんがために、法相宗であったというのかも知れない。その根拠は文献にない。法相宗は所依の經典としては論珈や唯識などの緒論をもちいるわけであるが、この縁起にするされた女人濟度の思考は法華經の思想からヒントを得たものと思はれるし、また畜生道に落ちた二人（安珍、清姫）が寫經の功德によって（天台宗の考方）、一人は忉利天^{とうりてん}、一人は兜率^{とくそつ}の天人に生れかわったと云う、考方は華嚴經からヒントを得たものと思われる。天人界は大道の一つで、輪廻^{りんね}のなかにあり佛菩薩ではない。大体この考方は法然の浄土思想流行以前のものであり、文凡四聖ともいゝ、地獄餓鬼畜生修羅人間天上（六凡）聳聞縁覚菩薩佛（如来）四聖で、安珍や清姫が生れかわるのに、ようやく一階上の天人界であるとする考えは相当古い考方故に、この点からすれば道成寺がたとい小観音堂でも、ずっと茲に建立されたものではないかとともおもわれる。

現在の建物の様式は徳川時代のものであるというべきであろう。建物を解体したときに材料を一つ一つ点検したら、或いはそこに古い時代の建物の痕跡が見出されるかどうか、これは少しつき進んで研究すべきであるが、資料は先ず無いと云ってしかるべしであろう。

参考資料

屋代弘賢

道成考（ふるい博文館発行の温故叢書に収録されている）

北畠芸州

熊野遊記 冊（單行本で出ている。芸州は有田郡田栖川村栖原出身、江戸の書肆須原

屋茂兵衛のことである。中山伝信録刊本がある。）

琉球のことを書いた唐本屋 屋代弘賢道成考引用書

高野辰之

道成寺芸術の展開

（高野博士は娘道成寺の音曲劇を主として、道成寺のことに説及している（單行本がある）。）

道成寺縁起絵巻写真 二卷

道成寺縁起絵巻を写真にとり、版にして巻物として発行したもの（塩路写真館発行）

道成寺大観

道成寺が発行したもの。

道成寺の研究は私も心がけているが、なかなか容易にまとまらないでいる。

法燈國師由良普山

法統國師が宋から帰朝して由良西方寺（今の興國寺）に普山したことから、有田、日高、熊野地方の文化に至大な影響をあたえたものといえる。

第一に禪宗の思想をつたえた。現在有田、日高、熊野方面に残存する禪宗のながれは、直接に法燈國師の流れをくむものであり、天台、真言の二宗派が全盛で、この辺は弘法大師の高野山開創で真言宗が大方だったものが、その半分は禪宗にかはったのは、法燈國師の影響である。國師は帰朝の時に尺八をよくする三名をつれかえり、ここに晋化宗（虚無僧）の一派をうんだ。下総一ヶ月や京都の明暗寺を本山とする虚無僧の一派は法燈國師にはじまるのである。

伝教大師や弘法大師をはじめ入唐入宋の僧侶は、帰朝の場合いづれも彼地の問度文物を輸入して、わが國の文化をたかめている。京都の市街は伝教大師が都市計画を立てたのが、現在に残っているわけで、すなわち大師が九条の袋婆に形どり、町の筋を一条から九条に区劃したものである。こうした基盤目の正しい町筋はほとんど何処にも例がない。弘法大師が池塘を修し薬品と公共施設を招来したことはもうすもないし、入不道の一派はながくわが國の書道を支配した。これも弘法大師のながれること説明するまでもない。

荣西禪師が茶種を輸入したなどもあまりにも有名である。法燈國師も金山寺（徑山寺）とかいて、きんざんじと□で、徑は呉音できん）味噌を将来し、また醤油の製法を伝来した。湯浅が金山寺味噌造が上手であり、醤油製造も日本一上手で、その元祖地とされる。これが千葉の銚子野田方面に伝播されていたとみられている。また天狗薬を将来した。これは血ノ道の婦人薬である。かように利用し、厚生福祉をもたらしたと伝えられているが、依拠すべき文献はない。

法燈國師のことは他日説明する機会ありと思うから簡畧にしておくが、我が國の禪宗は三派ある。一は道元禪師の曹洞宗で、越前永平寺、鶴見総持寺の二流。一は宇治の黄檗宗。一は京都妙心寺を本山とする臨済宗で、しめて二十四流の分かれがありとされている。

法燈國師のながれも臨済の派に属するものであり、法燈國師は親孝行な名聞利欲を好まぬ禪師らしい禪師であり、南朝の後醍醐天皇の尊信があつかったという。

参考資料

紀伊続風土記

紀伊国名所圖繪

法燈國師法語

法燈國師行実年譜

右二つは驚峯余光に収録されている

高野山文書

森彦太郎著

驚峯余光(虚譯傳記國字解(写本))

井上豊太郎

紀伊郷土文献拾遺

宗祇法師と湯川氏

連歌の宗匠宗祇法師は日本文学史上有名な人である。この宗祇は有田郡藤並村の人であつて、東常縁に古今集の伝授をうけたこと、また菟久波集や湯山三吟など数多の遺編をのこしている。この宗祇法師の文名が天聴に達して、花の下の子匠、号をたまわることになったが、氏素性の確かでない賤の民人であるから参内が出来ないので、ここに丸山の城主民部小輔湯川政春の一族として参内、花の下の宗匠号がありがたく頂戴したということが、湯川一族、湯川又上門覚書に示されている。丸山の城主湯川氏は甲斐源氏の流れをひく豪族で、豊臣秀吉の南征で滅亡しているが、五七代丸山城主たりようである。前記の覚書によると、宗祇と政春の間に連歌の酬いがある。

あらぬ名をかるや山彦ほととぎす

宗祇

ただ卯の花の峰の白雪

政春

名か声かほととぎすとはほととぎす

宗祇

このことは当時有名な連歌師の一文字が、日高にもその余光をなげていたことを物語っている。

参考資料

群書類従

(埒 保己一編)

湯川戦記

(写本でつたわる)

有田教育会編「先賢伝記」(宗祇法師)

単行本

真宗興隆

法然の他力宗門が燎原の火勢で流行し、親鸞上人の真宗が盛行をみるにいたつて、日本の宗教界は様相を一変し、極楽浄土往生の思想が確立し、従来の山嶽佛教が市井の民衆のふところに入ってきた。この佛教の発展が日本の文化を進展せしめたことは云うまでもない。この関係を如実に実証しているのが日高の

状況である。現在から四百八十年位以前の文明年間に、本願寺八世法主蓮如上人の紀伊巡錫か記録となつて、御坊町の如きは全町あげて真宗門徒となり、淨国寺の改宗、天性寺の建立ともなり、後に本願寺別院の出来る素因ともなつたことを思えば、その文化に及ぼした影響は大なるものがある。

御坊町の町名のおこり、またこの小さい田舎町に例のない本願寺別院の存在することなど、それ自身ですでに大きな話題といえるのである。御坊の小竹八幡宮に戲瓢踊となづける念仏踊のあることなども、参考とすべきである。

参考資料

紀伊国名所圖繪 後編
本願寺別院旧記

戯曲入相櫻

道成寺縁起にのこる安珍清姫のことが有名になつたのは、現在から百八十余年前にあたつて、非恵の物語を竹本筑後の椽が竹本座で浄瑠理として語つて人氣を博して以来のことであり、また芳沢あやめが娘道成寺の所作事を演劇したとことと相まつて人々に□□するにいたつたものである。

この種の浄瑠理、人形芝居が当時の人心を刺激したことがおびたゞしく、これはまさに徳川時代における文化の華であり、いたる所にアマチュアの義太夫節語が出来、当時の市井人で浄瑠理の筋を知らない人が恥ずかしがったほどなどのこであつたといつてよい。ゆえにこの浄瑠理はわが郷土文化の一ポイントをなしているといつて差支えないのである。

参考資料

浄瑠理古本 道成寺入相花王
全 道成寺現在蛇鱗
芳沢あやめ あやめ草

本居学の普及

もとおりのりながの國学が大成し、紀藩に召されるに及んで、わが紀州は本居学の没札を受けて明治維新におよんだ。宣長が紀藩に召され、養子の大平をその身代として出仕せしめたのは、享和元年(一八〇一年)大平四十六才の時、その天保四年(一八三三年)七十八才で死去するまで、前後二十二年の間紀國学であり、管内の神官在着等をはじめ、有識階級はみな一度はその門をくくつたものである。

本居の國学については、世の学者たちによって相当解明されているから、省畧して「ここにはその門人録から日高の人の氏名を掲記することにとどめる」が、本居学の普及が当時の文化を刺激し、人心を支配した力は大い。

島友齊 顯麿、渋谷平八郎 邦彦、山内太郎 兵衛 繁樹、鈴木善太夫 光長、塩路貢有 嗣、玉置速直 躬

小竹備前守 昌睦、田端善兵衛 主道、岩崎長之助 広海、瀬戸彦右衛門 善隣、塩路筑前、

塩崎和田輔 正綱、塩路秀庵 廣嗣

参考文献

本居宣長 紀伊の□□み(刊本)

本居大平 藤垣内門人録 全

平田鉄應 毀譽桐半書 全

夏目甕麿 吉野の若菜 全

その他随分沢山の人々たちの著書がある。

徳本行者の行跡

徳本行者は志賀村久志の生まれ。百九十年ばかり前の安永七年(一七七八年)に生まれ、文政元年(一八一八年)に死んでいる。年二十六で出家、再来念佛行者として足跡、紀州、大阪近郊、関東、信州に及んでいる。徳本行者については他日解説の機あるべきゆえに省畧するが、この行者の奇蹟には時元奇異の思いをなし、頭が上がらなかったという。日高はその出身地だけに影響が大きく、今なお古老の間に語りつがれている。徳本行者は一之不知の輩でもとより学問はない。由にそうした方面には何も残らないけれども、当時の人心測定のパロメーターになる庶民文化に大きな影響をなしたことは見のがせないことである。

参考資料

梅田行誠上人 徳本行者伝 三冊

井上豊太郎 徳本上人伝 未刊

などを言葉の末勸誠圖書行状社和漢など刊本がある

天壽丸漂流記事

これは別の機会に説明したいし、知っている人もあろうが、私どもはこれらの記事おして、当時の交通運輸商業の状況をしることが出来る。余程発達した当時の運輸商業の状況のは、好研究題目であ

りまた天壽丸漂流人の帰還は、当時外国の新知識を招来したことも云える。

瀬戸車翠 天壽丸漂流記事（写本）

住田法学士 海事資料叢書 一刊本

井上豊太郎 紀伊法制徑海資料小叢 刊本

森彦太郎 日高近世資料 刊本

新井田好古 紀伊続風土記（異船記写本あり）

日高地方に存する雑信仰形式

井上 豊太郎

序 説

日高地方に現存現行の民間信仰の種々様について、若干の考察を試みたいと思つて本稿を起草してみたが、まとまりのわるいものとなつた。

前提として解決すべき問題の解決がつかないからである。すなわち正しい信仰とはどんなものであり、正しくない信仰とはどんなものであるか、すなわち所謂迷信とは何かということの解決がついていないから、いきおいこの解決の不徹底にならざるを得ないのである。私ここに提出しようとする雑信仰形式の多くは、一般に迷信と云われているところのものであるが、私にとつてはそう一口にこれらのものを迷信なりとして方つけてしまうことは良心がゆるさない。もし共產主義者流の考えによれば、信仰はみな迷信であり、宗教は阿片にひつしい麻醉剤であらうと云うであらうが、有神論をとるかぎり、靈魂の不滅と考慮するかぎり、東洋傳來の雑信仰形式の全部が迷信なりと即断することは許されない。これらの雑信仰形式は、神道、佛教、道教などの思想から派出し、その地方環境に融合してできあがつているものがあるからである。科学性がないから、それは迷信であるという説明は、信仰は科学を超越した所に存在する感情の光であり、科学は予言せやることを軽視したたる説明で、通り一ぺんの話であり、迷信の解説として十分でないと云わねばならない。

現在非常な努力で傳統的なものが破壊されつつある。東洋的なものが打ちひしがれ、打破されてゆきつつある。神道的なもの、佛教的なもの、道教的なもの、儒教的なもの、東洋的日本的なもの。しかし民俗の底流は依然として懷古的であり、蓄積を温存しようとしている。雑信仰形式なども、所謂新宗教がさえも、いくつかをくわへてはこびこりつつある、さかんな信仰感情である。

われわれは、先づこれらの傳統の雑信仰の存在をさぐり、これを解明してその様相を明らかにする必要がある。しかるにこのことたるわ、脚にまかせて各所を巡廻し、土地土地の故老にたづねて収録するのほかに方法がないが、それが容易なことでない。とりあえず當座のことがらを一渡り解説して諸賢の研究をまつことにする。

参考書

森彦太郎著 南紀土俗資料

柳田國男監修 日本民俗学辞典

沖野岩三郎 迷信の話

雜賀貞次郎著 南紀の俚俗

平山成信著 曆と迷信

第一 神道思想よりきた雑信

日本の神道といっても、範圍が広くて一まとめににくいが、神という靈的存在を前提とする神は、眼に見えない存在であるが、何処かに存在する。それが人間の精神に感応し、て、色々暗示を与えてくれるらし、予言もしてくれる。そしてその神の暗示を聞きうることに、予言を聞きうることに、守護を受けることは鎮魂といった手段、祈祷という方法によって、人間の精神が神意に感応することによって、得られるわけである。神の守護は万能で、悪事災難をのがれ、病氣を治す等その顕著な場合であり、病氣の場合病氣を直接に治すほか医師を方向によって、またその他の方法によって間接に指示を受ける場合もある。反対に神の怒に触れると祟をうけることにもなる。日本の神は八百萬神で唯一神でなく、多数存在である。ただ産土の神は何神であろうとその氏子の人間を普遍的に守護することになっている。日本の神は多数存在であり、社と稱する場所に留駐し、その職分が分業的であり、おのおの分業である。この分業的に多数存在することが、さまたまの雜信仰を生むことになるのである。守護の場合がそれぞれことなる。金比羅さんが航海をつかさどる神であり、戎さんは漁や福德をつかさどる神であるごとく、病氣の場合、頭痛の神、腹痛の神、腰痛の神、痘瘡の神、齒痛の神などとなるのである。

千津川の齒痛の神様 徳本上人行場の横の方に巖穴があり、沢山の金の鳥居が上げられている。これが齒痛を直してくれる。

瀧の腹痛の神様 俗に栗祖さまという。腹巻の布切を奉納して腹痛をなをしてもらう。

脇の谷のほろし神 切目川村の脇の谷のかみ、眞妻村松原の境にほろし神がある。ほろしを治す。ほろしは今の「じんま疹」のことである。

軍道の腰神 眞妻村大字崎ノ原字軍道に腰神がある篠竹で馬を作つて奉納して、腰痛を治してもらう。戎大國の神などは何処でもまつるが、神社として存するのは戎さんである。戎は少名彦の命(十日戎と称して

正月十日初戎などには福笹などうれる。授福の縁起をかつぐ。大國は大國主の命、福の神は采女の命とされる。前二者は出雲系、采女命は大和系、采女の命は猿田彦の命と夫婦になったという。猿田彦は天狗の形をしており、采女は鼻低で、これが夫婦になったなど俗説と思われる。

お稲荷さんは伊勢外宮の神と同じと云われ、得体の知れない神であるが、これに色々名を付けて奉る。稲荷さげ（飯綱（いづな）つかい）と云う方法がある。予言暗示を、それを拜む神女（巫女）のくちからきく。人の生死失物走人など萬端ト言する。狐狗狸さんなどいうものも、同じ行き方である。昔行われた託宣と云う方法の踏襲である。

第二 佛教思想から雑信

佛教そのものも時代をおうて変遷している。ことに我日本に佛教渡来して以来、日本佛教が完成されたが、日本佛教における淨土宗以前の各宗形態の中に存在した、讃佛形式の残存しているものが、民間の雑信として残っている元來佛教のある部門を除き、靈魂不滅で六道に輪廻して苦辛する。それを色々の行事の功德で解脱せしむる。餓鬼道におちたものに食物を施して、その苦を緩和する施餓鬼という考え方もある。さような苦患に落ちないにあらじめ予防救済の手段として、地藏菩薩や觀音菩薩をおがんで、その利益をこうむる爲におがむ。藥師如來は病氣を治す功德をもっているから、病氣のことは、おやく師さんに頼む類。佛にすがってその功德によって、現世の生活上に利益をえたい希望が拜佛となる。佛も多数の分立で、おのの職分差があり、それに応じて立願の筋が異なる。眞言宗の考方、日蓮宗の考方など、所謂山嶽佛教の考方が雑信として残っているものが多数である。

十二藥師

名称どおり病氣を治す功德をもつ佛で、藥玉を作つてまつる。

厄除觀世音

人の年齢によつて厄年というものを認める考えは、道教の考方と思われるが、その防災を觀世音に結びつけたもので所在にある。旧二月初午の日を祭日とする。（和佐開山は厄除厄除守護の佛とされ、毎年正月十二日賽者が多い。）

お首地藏

野島のお首さんは、前住民族の埋没品か上古の埴輪であるお首地藏にして、首から上の病氣を直す佛とまつられているのは面白い。

とげぬき地藏

荊木のとげぬき地藏さんは、足や手にささった刺を抜けるようにしてくれる。山上参の人に帰途、また越へて貰えばおこりがおち、流行病、傳染病にかからない。

弁天さん 巳成金をさずけてくれる。女の夫もり佛。

北辰妙見さん これは日蓮宗的である。

真言宗や日蓮宗の考方からでていると思われるものに、虫封じ、星祭加持祈禱などがある。何れも大体病災駆除が目的である。

虫封 小児の肝虫を封じる

星祭 悪い星廻りの年の人の幸福を祈り、災厄を予防する

加持 お加持は病人の患所をなでさすりつゝ快方を祈る經文を咒誦する。

祈禱 一定期間、一定方式によつて祈りをささげて佛の守護の現前を期待する。

念佛佛と云うことがあり、守護に適した一体を崇拜して、その守護の現前を期待する。

死霊、生霊など他の人間の怨恨増悪の感情が、己の身上にとりついて害をなし、そのために苦患するという考えも、人の靈魂の不滅を信ずるところから、割出されてくるころのものである。

虫送 農家の行事である虫送は、火力で害虫を焼き殺す手段の一を殺生を、佛教の考えにてらし、

その生類の霊を弔する行事である。これが多く「庚申こうしん」さんとむすびついている。庚申は神道では猿田彦の神もするが、元来は道教の道祖神（宋の神）、佛教で青面金剛童子となっている。

佛の中でも最も現世利益の佛として広く拜まれるのが觀世音で、峯、谷々に奉られており、不動さん、地藏さん、大日如来、藥師如来諸天の中では、弁財天、毘沙門天などであり、妙見さんは女に拜まれる。

弘法大師に対する信仰はなをも存在する。弘法大師が今に生きていて、祈につれ、また祈りふれて現前すると考え、また大師は癩病を治してくれると信ぜられ、この業病にかゝった人で、家を捨て四國巡礼にでる人がある。

第三 道教思想からきた雑信

道教と云えば老子の教えと□断したが、老子の道德經はその一面でこの他に仙人の道と云うものが道德の本態である。道觀はその仙人の道の説教所であり修養道場である。仙人の道は草根木皮によつて長壽を保ち、健康を保ち、病患を遠隔し、心丹をねり、心眼を開き、自在自由を得ようという願行で、このために山中にあつて、日月星辰を考え、天地陰陽阿叫出息入息の玄理を探究して、人生とは何ぞやを解決すること

を念とする道で、はなはだ人間離れのした考方で、一貫しているわけで、この神秘的な考えの具体化したものが、陰陽道五行説などで、今日迷信なりといわれる。大半のことがらはこの仙人の道行から生まれた年中行事で、我が國では少なくとも千年の慣行を持つところのものである。この雑信形式のうち曆法に関する部分は別として、ここに我國に移入されたもの二、三をあげてみる。

社日 社日は春と秋二度あり、農家では休日として休業する風習が残っている。これは中華一般の風習として、社稷の神をまつることに真似たものである。社は國土の神、祭稷は穀神。春社は春分の後、直近の戊つちのえの日、秋社は立秋の後、第五の戊の日をもつて、その祭日とするならわしである。

このほか山の神（木の神）、水神（龍神）、火の神（ふいご神）、かまどの神（荒神）などを祭る。風の神の祭りはないようである。

お日待、月見 お日待は拜日教の遺風で、一在所の隣人あつまつて日をおがむ。月見は月祭であるが、月見と化してしまった。

五節句 多分に日本流になったが、日時が一月一日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日というふうな、同じ数字の重なる日をえらび、かつ奇数をとっているところに中華伝統の風尚を見出さう。

三元 上元（一月十五日）、中元（七月十五日）、下元（十一月十五日）のうち、中元の贈答が依存している盆という佛本と結びついている。

道祖神（さいの神） 門出、旅行の時、旅中の無事を祈るために、采の神をまつり、旅中にもこれを祀った。この風習は自然消滅の形となった。旅の觀念が変わったからである。

庚申（こうしん）、かのえさる（金猿）を庚申さんとして拜むことは、中華の風尚で見ざる・言わざる・聞かざるの三猿が悪事に目をふさぎをる圖などは、後人の附会であろが、干支と言うことはまったく中華の民俗であるから。

庚申待 庚申の夜できた子は盗癖ありとの説があつて、庚申の夜は男女のこうごうをつつしむべしとされてきたものである。

陰陽の二つが結びついて宇宙人生の運行があるという風に、すべてを陰と陽とに分別して考え、そこを土台としてもものを判断していくと云うところが根本で、陰陽五行説などが生まれてくる。

天(陽)、地(陰)。父(陽)、母(陰)。男(陽)、女(陰)。山(陽)、水(陰)。かように区別する。我々の生活に必用の日、月、火、水、木、金、土、かようなもののうち、日月はたゞ光と熱とを与えられるだけ、また、風雨なども人工ではどうにもならないから除外、自由にし得る火、水、木、金、土、この五物をとって、これを土台にして五行説が生れている。この考方はもと東西軌を一にしていたと云うよりは同一源流で、それが西洋では週日の名目に残る程度に希薄になったが、東洋では神秘きわまりない様々の説が生まれるに至ったのである。陰陽五行説と結びついて、雑信の幾つかの形式をなしているのが数字である。一から九にいたる数字、または六十、十二といった数字であり、一年、十二月といった知識などと相表裏してをるものといえる。

一白―九紫 大安―佛滅 十干―十二支 六曜星 九曜星など、いづれも陰陽五行説と数字が結びついて出来上がったもので、これらが暦日などと結びついて、現在行われているものと、既にすたったものがある。五行説を人の生まれ年に配当して、火性、水性、木性、金性、土性とする人は、この五つの何れかの性に属する。

それをさらに細分して、一性六種この合計三十別となる。

火性	霹靂	山頭	爐中	天上	覆燈	山下
水性	井泉	澗下	大海	大溪	大河	長流
木性	松柏	平地	桑柘	栢榴	大森	楊柳
金性	白蠟	劍鋒	劍釧	海中	金箔	砂中
土性	屋上	城頭	路傍	砂中	大馱	壁上

なを土台にして六分別をつくり、合計三十種別としたものか判然しないが、十支、十二支の半分五―六に分別したものと思われる。

人の性を九分別する一白、二黒、三碧、四緑、五黄、六白、七赤、八白、九紫は火、水、木、金、土の五物に、白、黒、碧、緑、黄、赤、紫の七色が結びついたもので、詳しく云えば

火(九紫) 水(二白) 木(三碧と四緑) 金(六白と七赤) 土(二黒と五黄と八白)

この五性と色との結びつきは、便宜的なものであろう。

男女間または人と人との間の合性とか、相克とかいうことは、この五物の関係から出発する。火と木とは

合、木と土とは合、火と水とは剋、木と金とは剋といった風に判断するわけである。

易者などの判断は、このうち一白九紫といった一―九の数字の関係を重視するものであり、このごろの姓名判断などは、この一乃至九の数字の組合わせによつて、一定の結論を出しているものである。

昔の姓名はこの五性によつて、それぞれそれに因みある文字を撰定し、これを父字母字にわけ、その父字一字と母字一字とを組合二字名をつくる。それを半切と云う方法で音談共通の一字を得て、それを花文字にして花押(書判)をつくつたものである。

我々がなぜに火、水、木、金、土の五性の何れかに属しなければならないか、またどう云う時を発端として、ある年が火の年であり、ある年が水の年であるかについて根拠はない。たゞ伝統の力である。

十干と十二支 この設定、この組合わせは、年次にも、日時にも、時刻にも、方角にも応用されてきて、我々の現在にも結びついている。

十干は兄弟をつけた火、水、木、金、土である。

甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸

木 きのえ(甲) きのと(乙)

火 ひのえ(丙) いのと(丁)

土 つちのえ(戊) つちのと(己)

金 かのえ(庚) かのと(辛)

水 みずのえ(壬) みずのと(癸)

十二支 子、五黄、卯、辰、己、午、未、申、酉、戌、亥。

ね、うし、とら、う、たつ、み、うま、ひつじ、さる、とり、いぬ、い。

この十干と十二支とを組合して、百二十種別となる。

甲子、五、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、以下癸にいたる。たゞし甲乙は本性より一として、六十年をもつて一巡の形として組合せ、六十年を一巡として人壽と歩調を合せる仕組にしている。六十年目を本掛かえりとする。

この十干十二支の組合せは、これを年のほか、日に配当する。また時刻に配当する。日数は一年にしても三百六十五日もあるから、順次に配当しやすい。刻は十二時であるから配当は十二支のみでいく。

九つ(正午)十二時を午の時とし、二時間おきに一刻とし、眞夜廿四時をかぎり、一、二、三、四、五、六、七、八、九とし、十二時にいたる。

九つ(十二時) 八つ(十四時) 七つ(十六時) 六つ(暮六つ、十八時) 五つ(二十時)

四つ(二十二時) 三つ(二十四時(夜半)) 九つ(十二時) 八つ(十時) 七つ(八時)

六つ(晩六つ(六時)) 五つ(四時) 四つ(二時) 二つ(〇時)

となる。丑三つ時とは、子より丑にうつる、真夜中の二時から三時の間となる。

この十干十二支を方角に配当するときは、北を子として十二分する。北東南西の四方をさらに三分し、その三分の中を艮(うしとら)、巽(たつみ)、坤(ひつじさる)、乾(いぬい)、とする。この方位を基としているくはじまっている。子供が「おやつ」と称してお菓子を貰うなどは、この風習の名残である。

恵方とか金神とかいう事は現在でも正月に恵方参りと云うことがある。これらは即ち中華の俗流の移植である。

「ラマ」教などの所産ではないかと察せらるる神に、歳徳、大歳、大將軍、太陰、威刑、歳破、歳殺、黄幡、豹尾、金神、などの諸神がある。歳徳が善神、金神が悪神、その他それぞれ威力をもつ神で、年々住居が代わる。一定の周度をもって周回するとされている。大本教の艮の金神説など、この従来の諸説に出発しておるのである。

方位について鬼門がつねに問題になる。これは東西南北、艮巽坤乾の八方位をたて、北を休門、艮を生門(鬼門)、東を養門、選を杜門、南を景門、坤を死門、西を驚門、乾を天門(関門)などと名付けているところから、この艮の方位に金神を結びつけ、艮は北東で陽気の発する所とし、金気は強烈で金銭が人間を苦しめる所から、この午寅の金神がクローズアップされて、我々の面前に登場することになる。

丑寅の方位、即ち鬼門に不浄をおくことは祟りを生ずる。また鬼門の方から直線の方位反対側を、裏鬼門と云って警戒を要する方位とする。その他色々ある。科学的に見て合理的なものもある。

墓相用印相色々説がある。方位説の応用みたいな話である。

第五 曆上雑信

曆と雑信の結びつきは来歴古くなかなか根強い。太陽曆は実用に不便がある。太陰曆の月と潮の干満の關係は、まず永久のもの故、海辺の人は太陰曆を便利とする。また一年を二十四節に細分した節中の区分も、なかなか便利ですたらない。

寒の入とか、節分とか、八十八夜、入梅、半夏生、二百十日、土用、彼岸などは、現在なを公然と行われ

ている。

二十四節

立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑、立秋
処暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、小寒、大寒

右の中、立春、夏至、冬至、小寒など、現在我々に親しみがある。また八十八夜は、立春後八十八日目、二百十日は立春後二百十日目の当日をさすのである。

土用は四季に該当日があり、土神の日で土をいじるを忌。清明十小暑、寒露、小寒の日から十三日より数え各々十八日間という。小暑後の土用(夏)のみ土用のうちなど我々の念頭に残っている。

三伏目 小暑の後、始めての庚(かのえ)の日を初伏、中の庚の日を中伏、後の庚の日を末伏。夏の火気と秋の金気の相克が人生に過言を与える。故にこれを要慎するために、かような日を設定したものか。暦日に「つち」「十方暮」「八專」「天一天上」などがあり、三隣亡の日などがある。

八專 壬(みずのえ)子(ね)の日に始まり、癸(みづのと)巳(み)の日に終わる。十二日間のうち四日間を間日とし、差引八日間をさす。婚礼人をかかえるにあしく、また物を始むるに悪しとされている。

天一天上 天一神天上にある間の日、癸(みづのと)巳(み)の日に天上にのぼり、戊(つちのえ)申(さる)の日まで天上における十六日間造作破屋など忌とされている。

つち 上の神土中にあり、土をおかすを忌。

春 甲申の日から癸巳の日まで十日間

夏 庚子の日から丁未まで八日間

秋 甲寅の日から癸亥の日まで十日間

冬 庚午の日から十五の日まで八日間

十方暮 甲申の日から癸巳にいたる相克不和の日で和合相談等に凶

三隣亡(さんりんぼう)日 家作など忌、火難をもって三隣亡となづくところ。

正月亥の日、二月寅の日、三月午の日、四月亥の日、五月寅の日、六月午の日、七月亥の日、八月寅の日、九月午の日、十月亥の日、十一月寅の日、十二月午の日

暦日についてはこのほかに、二十八宿説、十二建説、六曜星日などがある。

二十八宿 星辰の運行についての方式。これを日に配当したもの。

室、壁、奎、婁、昂、畢、嘴、参、井、鬼、柳、星、張、翼、軫、角、亢、民、房、心

尾、箕、斗、午、女、虚、危
たつ、のぞく、みつ、たいら、さたん、とろ、やぶる、あやふ、なる、おさん、ひらく、

とづ

六曜 大安、赤口、先勝、友引、先負、佛滅

友引の日に葬式を忌。大安の日に祝事をする。また佛滅の日をきらう。

六曜配当の順

先勝 一月一日

七月一日

友引 二月一日

八月一日

先負 三月一日

九月一日

佛滅 四月一日

十月一日

大安 五月一日

十一月一日

赤口 六月一日

十二月一日

以上のように始の日を配当、先勝、友引、先負、佛滅、大安、赤口の順にくり合わしてゆく。六の数ゆえ、大体くり合いがつく勘定ですが、月に大小平などあり十分でないことになるが、月末できりすてれば可。

第六 ト占等の雑信

託宜 おがみやさんの口告

ト占 易者の筮法判断、いろいろある。

手相 観相 手相、面相、判断ほくろ判断など。

墨色判断 字をかかして判断する。

おみくぢ 百番、五十番、六十四卦など。

辻占 おみくじと同じ。

年占 年中の天候、農作の豊凶などを正月に一定方式で判断する。川上の愛徳山神社の鎗判断など年占の一つ。

姓名判断 一乃至九までの数の性質をさだめ、その組合わせによって運勢を判断する。

これらは宿命を恐れ、偶然を信じ、宿命による疾患を予防し転禍爲福の手段とされている。禁厭(まじない)色々ある。虫虫封など。

悪夢をみて心労し、鳥鳴きの悪いのを聞いて、死を豫定するなどのことがあるし、祟を信じ、狐つきを信ずることなどあり。奇蹟を盲信する附和雷同性がある。

正月二日和佐開山に参るなど、どう云う意味かと云えば、厄落しの爲という。厄年の信仰が存している証拠である。

男女共通の厄年はなく、男は二十五、四十二、六十一など。女は十九、三十三、五十二など、大厄年とされているが、前厄、後厄などとも云う。

参考書

平田篤胤著 「干支考」

天文司郎・阿部博士・吉備工員清明朝臣撰

「三國相伝陰陽輶轄箒簋内伝、金烏玉免集」 畧して簠簋(ほき)

武田万載著 「選日便覧永年鑑」

法橋寺島良安 「和漢三才圖絵」

山田照胤著 「神道宝鑑」

神白朝興撰 「社日拜」

中野弥三郎 「観音籤法」

高橋安次郎 「六十四卦のおみくじ」

戸川淳風 「観相学」

加田格堂 「撰名秘法」

高島嘉右衛門

「易断」

多田秀洞

「名乗即鑒」

呉鉄郷撰

「清嘉録」

佐田介石閱

「佛曆一班」

樋口彌門編

「種まき鑑」

伊藤一郎編

「年占の種々相（祭礼と民俗）」三輯

躑躅

片山 隆三

舌代

本稿は躑躅を植物学的に記述する物ではないが、或程度それにふれねばならなかった。分類とか異同とかそれ自体が過去の分類学に属するからである。又多くの異形異色のある場合に、植物遺傳学にも触れなければならぬが、さりとて深く入ってゆくことは本旨にちがうし、古名異名習俗詩歌を収録した関係上、古代文化にもふれなければならなかったが、文化史或いは考古学の領域のみに深く究明するつもりのものでないので、書誌学的な検討等を差控えて、只私のかって瞩目したツツジにつき薄れ勝ちな記憶や手元にある文献を覚束なく羅列した。

従つて系統的な報文でもない雑駁な記述は恥るけれども、一通り必要と思われる点を粗と網羅したつもりである。只時間と費用の点に妨げられて、写真とか科学的な分析とか、力学的な調査、顕微鏡的検索を専門題目に譲つて、ふれぬことにした。

記述の構想は拙著「漢汜勝之の農業文化」に模し、一層通俗的にしたから、物足りない点は重々察するけれども、資料が余り多くないので止むを得なかったが、之を土台にして現在の遺傳学や写真術、印刷術を駆使すれば、三好学氏の櫻、山田孝雄氏の櫻花、杉岡玄達先生の櫻品、染井伊兵衛翁の花壇綱目、久留米躑躅志以上に完成しうる基礎工事の一片の石塊にはなるとおもう。それは読者の責任の領域である。

一、植物分類学的ツツジ

ツツジは石南花科 *Ericaceae* に属する。漢字は躑躅、山躑躅、石巖、羊躑躅、玉支、史光、莞草、卑共、卑山竹、衛輿、杜鵑、川鵑花、山石榴、山客、謝豹花、山礬、躑躅花、梔花 等々に記され、和文では躑躅の漢字ツツジと訓読したのは佐々木信弘。

乍自をツツジと訓読したのは井上通泰。管之、管士、也之保 等は千蔭前の万葉学者はツツジと発音した。源順は豆々之と充てた。

この夥しき名前は、植物学は更にやまつつじ。ムラサキヤシホツツジ。げんかいツツジ等四十一種、まだそれよりもっと多いかも知れぬが、それぞれの記載をしている。

農業上の変種に至つては、やまつつじの変種として、やゑやまつつじ以下八種、きりしまツツジの変種十

五種、もちツゝジの変種八種、サツキの変種三種等として、無量数百種に上る。従つて今日の盛況では、田中先生の「柑橘の分類」の如く、又稻、麥、栗の如く、一科の学問としても、決して狭いどころか誠に広い諸方面に関連を持っているのである。

此等の分類が植物形態学的な丈で満足すべきものでなく、埒又細胞遺傳学的な研究によつて、モット優秀な気品あり芬香高き美花を育成するに至ると、日本の特産花を育成することも難事でないかと思われる。

二、人生との關係

ツゝジが人生に如何なる理由に基いて關係を持つに至つたかは証明に困難であるけれど、陶隱居著「神農本草經」西紀五二〇―五四年には、羊誤て之を食ふ、ツゝジして死し、故に以て之に名くとあるから、ツツジという動詞が名詞化する迄に、相当永い間使用されたと推断できる。

茲に曰う、梁の陶弘景の敦煌発見の神農本草經に録載されているのは、今その印影本を持たないので明らかでないが、源順はその和名抄に於いて陶隱居本草註を引用して、「羊躑躅（擲直）の二首。和名イハツゝジ（に云うモチツゝジ）羊誤つて之を食う。躑躅して死す。故に以て之を名く。」としているから、誤りはないと稽へられるけれども、殆どこれと同時に時代の著作である「齊氏要術養羊」の記文に録されていないところを見ると、農業生活の上に未だ注目を引くに至らなかつたと考えても誤りではない。

併し時代はずっと下がるのであるが、李時珍の本草綱目では無毒と説を立てゝをるので、第六世紀時代においても齊氏要術の著書、買思魁は陶隱居に対立した識見をもっていたかも知れない。えらの菜物的な論考は別の項に譲る。

三、日本國民との關係

わが国に於ける躑躅の漢字を充てゝいるものゝ史冊に見える初は、深江輔仁の「勅撰草本和名」であつて、西暦九一八年で、之によると陶景註に云うとしてゐるから、漢法医学の浸透によつてゝあつて、ツゝジが本来の和名であつたようである。

「万葉集」に読まれたツゝジは、卷二石乍自イハツゝジ或はイソツゝジ。卷三には白管之。和銅四年西暦七一年。卷六丹管土む。之は雅澄はサツキに充てゝいる。

天平四年壬申七三二年。卷一〇に白管自と記されていて、千蔭と武田祐吉博士はシラツゝジと訓じた。卷

一五に也之保能伊呂爾。とあるをヤシホツツジの畧称であるとして、ベニドウタンツツジであると解するのは、雅澄で、画も伴っているのであるが、強いてツツジとせずともよい。

この外に茵花とした字句が巻二に収められているが、雅澄は之をクロフネツツジだとして「万葉集解」に述べて、通称ミヤマシキミの説を反映しているが、ミヤマシキミは高山植物であつて、天平時代ではそういう物の検索をしたとは思われないので、ツツジと考えてもよいとするが、結局確実なもの四点、議論の余地のあるもの二点で、何れも思慕を表現した詞藻である。

之によつて上代説にその色彩、その形容の美的感覚は国民生活に交錯していた。併しこの思想は唐の影響を受けずに日本で育つたものと思う。唐の張籍に

五漢溪頭躑躅紅 嵩隣寺裡講時鐘

春山處々行應好 一月看花至幾峰

と同時代の詞藻に相通ずるものを見ない。影響はうけなかったと見るのが正しからう。然し私は今、杜工部の詠物詩や、佩文齊の詠物詩選、汜大成の詩集、植物典を見ないので、此点の研究は後日に期待するものである。

四 工学的

ツツジが至つて灌木的であるため、その利用の面に於いて人類の注意を曳くに到つたのは中古の後期である。年代は明らかにし難いが、拙著「日本木炭史」に引用した。一条帝頃であつたか白炭の発明期に、ツツジの播根と室町期の枝炭の発現が古い。前者は「天木集」に収録されている。支形では宋に於て「黄山谷詩集序」によれば、染色材として用いている。今、拙訳すると次の如くである。

江南の野中一種あり。小白花にして、高さ数尺、春開いて桎て香ばし。野人之を梔花と謂う。王荊公、其名を陋とし予に名を請う。名付けて山礬と曰う。野人梔葉を採り、以て柴に染む。礬を用いずして色を成す。故に名く。

とあつて、山礬と言う異名の由来も明であるし、媒染材、茲には明礬であろうを用いずして、色に用いたことも明で、染色文化史上の遺跡で、そのふるきを知ることが出来る。

造園技術

室町期に入つて日本の造園技術は著しく発達を遂げた。夢窓国師の如き名手が出たからであるが、今この

証據をあげることは困難であるけれども、北村琴掇の「作庭傳」によると、多くの石の根締に用いられた図絵を残しているし、傳に誦される現存庭園に使用されている。

之に刺激されたか徳川期に入ってから、西暦一六九三年^{（元禄六年）}に「地錦抄」染井伊兵衛、全七年「花譜」貝原特進、全一七二三年^{（享保八年）}「広益地錦抄」の増補があり、従って好愛する物も多く、「百家説林続編」近薪翁記に曰うように、「躑躅の花を愛で、さまざまの奇花のいでしきは、寛文の頃よりはじめ、延宝の頃盛んにありしなり」と。

又「燕石十首」。奴師勞之に

「染井の植木屋伊兵エがもとに、享保の頃拜領せいという、躑躅の大きなるが三本あり、面向無三唐松という木なり」云々

というまでに上下に流行した事実の遺跡を止めている。

かゝる次第であつたから、江戸では回向院の五月人形や、名古屋七ツ寺の五月人形、久留米のツツジが最も著門するに至つた。之は一種の商業広告であつたけれども、ツツジを大衆に浸透せした力も大であつた。

薬物

先に述べた陶弘景の羊躑躅而死という毒物についての警戒は、久しく続いたのは、「千金翼方」^{（天武天皇二年）}西暦六八二年に死んだ唐の名医で、且つ公徳の国手で長寿の人、「孫思邈」の名著であるが、何分古いので轉寫の中に屢々粗本も現はれた。

李時診の如き本草学者ですら、万暦六年^{（天正六年）}一五七八年に撰した現存万暦本、「本草綱目」にては其花味酸無毒とした。

之は千金翼方の善本を見なかったか、或は吾國の「塵添璫囊鈔」（著作年代不詳）の著者と等しく、羊躑躅について十分明解していなかったか、或は古名の亡滅していたかによるものであらう。

「凶荒図録」（不詳、媳く小田切春江著とする）には大毒として、羊躑躅（キツツジ）、石巖（キリシマ）をあげ、毒品として山躑躅（ヤマツツジ）、茵芋（ミヤマシキミ）をあげている。

林道春著多識篇には、寛永頃^{（一六二四・四四年）}の著作と織田完之曰うには、羊躑躅モチツツジ、異名、羊不食草、拾遺山躑躅、今案にツツジ、羊不喫草としている。

この毒素は Andon medotoxine を成分とするもので、根を通風、リウマチスに内服され、利尿の効果もあるので、民間薬として淋病にも用いられ、淋病症状のあるリウマチス症状に最も効果ありとされる。

インツヅジについては成分はまだ研究されていないが、緑油三%位が溜出し、コケモムの成分に類するものが、民間利尿剤として用いられ、サンタールオイルの代用品である。

コケモムの油の成分は Arbutin と没食子酸である。従つて收斂の効があり、防腐性があるので尿道化膿に専ら利用される。

されば今尚羊躑躅を山羊縮羊に対する特殊毒物としてしている畜産学者もいる。農林省村上技官はその著

特異性中毒

自然の山野生草を食むときは、有毒植物を識別する能力を持っているが、舎飼の場合に生草を長らく與えぬものに急に與えるか、又は早春放牧した場合には時として中毒を起こす。

ツヅジは石南花科で全科のアセビ、ネジキと共に、山羊、緬羊、馬に疝痛、下痢、嘔吐の食中毒をおこさしめ、往々倒れることがある。

之らの毒は花、葉、皮の部分で、木質部にも毒物があるうが、葉、花、皮程ではない——とされている。

私の経験では二回舎飼羊を急に山野に繋飼した場合にも急死した実例を見た。そこにはモチツヅジが繁茂していた。

工芸的利用

木は灌木であるためその利用は極めてせまい。傳に吉野の如意輪堂にツヅジの柱という、径一尺五、七寸のものをきくが、まゝに見たことがあるが信じがたい。

検討はしないので確言を避けるが、類似材ヒメシヤラ、ナツツバキではなからうか。それにしても大きすぎる。

唐木と称する床廻り材では、之等類似材はツヅジで通用するし、商習慣で成立する取引である。

雅致があるので日鮮支もよく杖に用いるが、形状不揃いであるので、工業的利用価値に乏しい。この点を巧みに用いたのは別府の竹細工で、花籠、スミトリ等の筐にその使用をみるが、手工の域から脱しきれない。

全科の石南は魔除けとして、杣、小杣の用いる定木検尺に好んで用いる習俗はあるが、ツヅジは加わらない。

秀色異花

先に述べたように、(一六二四、四四年)寛文年間に至つて貴賤が共に量愛の度を高めたので、色彩の掬すべきものや、態度

の優婉艷麗なものが続々と育成さるゝに至った。

之を今日の遺傳学や進化論にても、十分に説明することの出来ない程の高度の栽培技術を、工夫考案するに至った。

勿論この前期には桜について染井伊兵衛は、染井吉野の如き優秀なる園芸品種を作り出したし、自らも「花壇綱目」の如き専門大著を選定したし、本草物産学者として貝原一門は「花譜」の如きを出し、宮崎安貞は我国農学の大系を整美し、松井伊賀守忠晴が百椿圖を撰述したりしたから、文化の絢爛眼を奪うものがあったからでもあったが、椿は接木術の応用、成功から更に挿木術、之による枝変り、ツマリ細胞変色体の倍数性の異変を巧みに捉えて、多くの無花果不稔実花を育成した。

之は樹勢が極めて発根し易いからにもよるが、遺傳の倍数性変化はコルヒチンの如き植物ホルモンの刺激による以上發育に比して、直接切斷や癒着によつて生ずる變形細胞の發現機會の多い接木、又は挿木によつて起る現象を現実に捉え、直に実用化した生活態度も好まなければ、又之を巧に駆使して、かくも夥多しい異色珍花を育成した幾多の無名技術者の功績も、極めて高く評價されなければならない。

それにしても栽培技術の向上に貢獻した点は尚更に贊美せずにはいられない。

然しこの挿木術、接木術の發達の分布を見ると、地質土性にも著しい影響があつたかと推定される。

即ち江戸近傍における染井又ハ安行は火山灰土であり、愛知一宮附近はクロボコという火山灰であり、大阪付近の池田、伊丹、堺の黒銚もクロボコ地帯であり、久留米は阿蘇の噴出灰土の堆積であり、島根の大根島は大山からの噴出物が同じく火山灰からなつていた。

新潟縣南浦原郡大崎村は未踏の地であるので、詳にしないが、おそらく之に類した土性でなからうかと思われる程、挿木の土性に依ることは奇とすべく、研究の題目であらう。

又光週性 *Phyperiodism* は *Gannar* の世紀的な發見によつて植物学に飛躍的な進歩をもたらしたけれど、之よりも先一五四年前に、柳丙大(註 三木榮博士説)か、丁若鏞(註 片山隆三説)かの著作、山林經濟上には

此花二叢を窖藏す、正月の晦間出して又一叢を種ゑ、二月の晦間又一叢出すなり、後に出すもの先に開き、数十日に至り將に衰へんとするや、先きに出す者始めて花開き、亦数十日を過ぎ方に衰う。蓋し先に出す者春寒に傷みて能く先に開き致す能はざる也。此に由て前後四十余日の紅を見る。

とあつて、光週性の刺激結果を確実に把握していた。然もルイセンコ *Lysenko* の促春感應を百六十年も前に実用化していたのである。

(註)促春法は *Vernalization* とルイセンコは言っている。此事は又發芽促進法として可成以前から知られて

いた。

この問題は相当面白い問題であるが、今はこの点で深くは入らないことにする。

五 培 養

奇心は文化の発展を助ける。前段で述べたおびたゞしい繚乱の花容は、総て同好数奇者の要求によって育成された。然し之にも尚、満足を覚えなかつたので、未踏の深山幽谷に奇品を求め、海外に秀花を購った。今日リュキュウツゝジとか、トウサツキとか、ゲンカイツゝジ、或はクロフネツゝジの家養されるのはこの爲である。

攻事新書 徐有桀著 一七六六年
一八三四年に

種倭躑躅

花卉甚だ大にして色は石榴に類し跗（註 葉と萼との接着する処）重なり、萼を疊み久しく衰へず。收藏するに暖かく勿く、水を澆ぐに湿する勿れ。

とあつて、日本からツゝジの優秀花が渡海交易された。尤も柿とか大根、或は米等で黒もち、庄屋殿等という種類が渡鮮しているから、敢えて珍しいことではなからうけれども、花木としての交通が新しく登場しているのである。

種畜会通 丁学稼穉箕編 年代不詳

（註 拙著 丁氏博物学格記参照）に

杜 鵑

花鏡に曰ふ。性最も陰を喜で肥を惡む。毎早朝、河水を以て澆ぎ、之を樹陰の下に置けば、則ち葉青翠觀るべし。云々

とあつて、陰樹、陽樹の説が花鏡を通じて入っている。

花鏡は清の西湖の陳吳子の撰で、わが京都でも復刻され、阿部喜任採齊杯の「草木育種」に影響した本であるが、樹種の陰陽説が採用されなかつたようである。その後、明治中期本多博士が採用するまで浮び上らなかつた違見の説で、茲でもわが邦の学者はおくれていた。

平戸躑躅

和漢三才圖繪卷九五 寺島良安著に曰う
平戸は九州の地名。本琉球に出づ。四月花開き、單弁白、最も繁茂し易し、其の大なる者一、二丈に至る。

永来部躑躅

エラブツヅジ、エラブは薩摩の南島也。彼土に出づ。甚だ暖なる故、畿内に移植すると雖も寒を怕れ茂盛し難きが如し。其花赤く大さ、径五、六寸許り、甚だ奇也。

とあつて、好奇心は止まる処をしらない。

アザレヤは元、キリシマツヅジがおらん^{オランダ}に渡り、彼地で改良された。再び本国に戻ってきた。何時頃であつたか、西洋石楠等と行を共にしたのであるうから、明治の末期から昭和の始めであろう。

この植物の移動は又屢々技術の流通も伴つた。前述新潟大崎村の一例を参考^{一八六八年頃}に誌と、次の次第である。

大崎村の培養法に画期的な挿木法の採入れられたのは明治の初年頃で、斉藤久太郎が一旅僧の寒飢えに困窮せるを救つた。僧は深くその慈惠を感じて、辞する時、僊木の法を傳えた。

その術は数種の薬品を赤粘土に混じ、こねて親指大にし、之に梅雨期にその年の新梢僊擇した後、畑地に移植し厚く通常ヨシ實を二重に覆い、秋分に至つて撒いた。

近來は改良され、大低摺鉢形の大植木鉢に、砂或は粘り少なき赤土を入れ、之に僊し翌年春に至り、発根したるものを畑に移植し、細雨の日薄き人糞尿を施す。

この方法は何処も同じ様であるが、時期は寒温の差に従つて、或は八十八夜といひ、梅雨といひ、又、常緑樹では旧葉の落謝のときという。

粘土は有珠粘土、済民砂等が使用される。多孔質で吸着力が強い。

六 雑 録

モチツヅジという名前は、ツヅジの葉に異常肥厚を起す病害から出た名前でないかと思う。餅病は向井光太郎先生によつて究明され、*Japanicum Shurt*と命名され、陽動が戯食するのを屢々見る。

×

×

×

ツジガハナというのは有識故実に於て紅にて染めたのを、つゝじつを畧してツジガハナに言う。と「貞丈雑記」に誌している。

卯月八日に長い竿の先に躑躅の花を結束して立てる風習は、近頃見うけられなくなったが、四、五十年前には農村で見られた風景であった。

佛に供花するもので、それなあらぬか、小児がツゝジの花を食うのを禁忌した。よい風習であった。

× × ×
× × ×

日高民謡には

一の谷では源平つゝじ谷を隔てゝ咲き分ける。

（真妻村里謡 「南紀土俗資料」 森彦太郎著）

というのがあり、虚子の歳時記に□□□□の同工の類似句が録されている。

又、越前踊りとして

（前略）「飛ぶ白鷺に文やれば

文を落して曲もない

十七、八は砂山つゝじ

寝入とすれば揺り起す」（下畧）

（註 つゝじをもつてきてはあるが、意味は全くわからない）

御庭踊

（前畧）「二月は彼岸 櫻の花よ

三月桃の花が咲く

きりしま花がよう見事

四月につゝじの花よ

五月にさつきの花が咲く

六月桔梗刈萱女郎女」（下畧）

「民間聞覚書」柳田国男著に

これのおうちは目出度おうち

父はれんげの花と咲く

母は芍薬姉つゝじ
妹八重菊兄さんは

五月野に咲く百合の花

とあり、朝鮮民謡に

花を唄へる

真赤な真赤な 八重つゝじ

簫詔九成の 舞をまい

帰れぬ恨みの 紅杜鵑^{ベニサツキ}花

蜀を恋ひこひ 身を燃やす

かおり床しい 白百合は

深山の谷に しほらしい

姿なつかし 鳳仙花

お庭の隅で さゞめいた

白い小さな 芹の花

緋杏^{モミ}の畑の 溝に浮く

咲いた盛りの 娘御は

玉の御部屋で 唄ってる

待君

花の三月 花咲く頃に

様は来るそな 帰るそな

つゝじ咲くにも もう間がないに

なぜに姿を見せぬやら

以上囑目の里謡数篇の中にも馥りの高い文学的情操の深浅や、素朴の農俗の間にも韻律の正しいメロデー
ーが漂い、単純に異国情調だとは片付けられない。蔽い冠さる育成の力を茲でもみとめない訳にはゆかぬ。

(註)日高民謡の六月、ききょう、かるかや、おみなへし は季節に合はない。七月ならば立秋以降と

してよからう。

簫韶に成という舞は、舞帝の定めた舞采で、雅愛すべき逸風であり、蜀を恋いくというのは、杜鵑にかけた望帝の故事を指謡してした句である。

七 結 言

以上を以て本稿は一旦擱筆する。たゞ終に爾後の研究の便ために、二、三の文献を記述しておきたい。それは今後に見なければならぬものを含める。

(支那文献) 花經、遵生八歲、瓶史、三才圖繪、花鏡、群芳譜、四書前庫草木典、汜大成詩集、佩

文齋詠物詩選、杜工部詠物詩、此外本稿本所載書。

(朝鮮文記) 山林經濟、攻事新書、風謡集、種畜會通。

(日本文獻) 花壇綱目、地錦集、和名抄、久留米躑躅典誌、花譜、花彙、花木養活傳、節用集、多識篇、庫文庫、故事類苑、草木育種、前田曙山著園芸十二ヶ月、和漢三才圖繪、古名錄等

(附記) 靡文庫に草木雅譜の文中、天旱には河水を以て凌ぐとあるべきを、天旱と語り、更に重語して天登せるは一属悪口。注意を要する。(終)

(一九五一・五月前豫)

切目王子記

平野 一良

切目王子参拜の記

平野 一良

老樹鬱蒼として新緑滴る切目山と書きたいのですが近来荒廃している当社、それに加へて昨年のジェーン台風のために鳥居もなく、以前あつた根回り二丈、高さ五十尺余もあつた松の大木も倒れ、全山吹き荒らされた中に、社殿初め建物が淋しく見える姿真に感慨に堪えない。

而し之が熊野沿道の王子社、殊に歴史上顕著なる熊野王子である。

即ち御幸記に云う切部王子であつて、明治六年^(一八七三年)現在の社名(切目神社)に改称するまでは、通稱を切目の五体王子様と称して尊まれた御宮である。

この昔から五体王子と称するは、御祭神地五代の神で、天照皇大神、天忍穗耳之尊、彦火瓊々杵尊、彦火々出見尊、鸕鷀草葺合尊の五柱の神で、五つの御神像を御祀りされているので此名がある。

又の名を玉那木神社と称することを伝えている。之は熊野速玉神社の記録、即ち、熊野御垂迹縁起に「庚午年三月二十三日紀伊國無漏郡切部山の西の海の北の岸の玉那木の渚の松の木の本渡給」、又、長寛勘文に引いたる縁起に、「此大神当國にては、此地の玉那木の渚と云う所に始めて現はれ給へり、其地那木の木多き川辺なりしかば、玉那木の渚とは名付たるなるべし。さてその神靈を統治に祀り、かつ玉那木を愛でて降りし由縁によりて、其木を神符とする異なるべし。之より遷坐し給へる三山等にも此木多かりしこと推して知るべし」。かかる記録から見ると、初め熊野大神が此地の那木の木を愛でて、此地へ御降りになつて、それから熊野へ御遷りになつた。そして当地へも此御神靈を祀つた。こうした由縁によつて、当社と熊野三山との関係が深く、当社の那木の葉を神符として熊野参詣をしたことになつてゐる。

「保元物語」後鳥羽法皇熊野参詣の條に、法皇熊野大神の御神託により崩御の期を知らされんことを誌し「日頃の御参詣には、天長地久にこと寄せて、切部の王子の椰の葉を、百度千度かざさんと所思し召ししに、今は三つの山の奉幣もこれを限りと御心細く」云々と、又長門平家物語硫黄ヶ島の條に「きりめの王子のなぎの葉

を、稲荷の社の杉の葉に取り重ねて」と見えてある通り、熊野三山の繁盛と共に、熊野沿道の王子社中最も古くから顕れていたのである。

旧記によつて考えれば、人皇第十代崇神天皇の六十七年、即ち紀元六百三十年今から年を経ること一千九百八十一年前、大山津見尊の裔、大山底の齊祀せられしものと伝へている。

当社は往古より上皇、室の御崇敬深く、熊野御幸や遷御の際は悉く当社へ参拝せられた。其の内にも最も顕はれているものは、後鳥羽院熊野御幸に正治二年十二月三日此の御所（之は旧社地に御所屋敷と云うのがある、今は畑となつてゐる。之は旧記によると「仁徳天皇二十八年御所御殿を造営し、其後天皇が熊野御幸遷御の際はいつとも入御せられしことを記せり」又この御所御殿幾度か造営したように記してある）にて歌の御会を催されたること「新古今集」雑の部に「熊野へ詣で侍りついでに切部の宿にて海辺眺望といえることを、をのこどもつかうまつりしに」と見えてゐる。

又、建仁元年御鳥羽院「熊野御幸記」に曰く「参切部王子入宿所寂海少海人平屋也御所前也但國占宛云々少時御幸入御歩晚景又有題即書持参戌時許如例被召入讀上退出暮無極品霸中聞波野径土明

うちもねす とまやに波のよるのこゑたれをと 松の風ならねども

於此宿所一塩垢離かく眺望一非甚両者可興也病氣不快寒風吹枕」とあるのがある。

此時の一座の懷紙十一枚を神殿に納めてあつたのが天正の兵火に消失した。後にその標本を賜つて、今神殿に神宝として納めてゐる。

この切目懷紙について特記するのは、昭和四年東京讀賣新聞社が名宝展覽会を開催して、其出品に就いて解説を同年二月二十七日の同紙上に記事があつた。

日本名宝物語三十六国宝の指定を断つた。後鳥羽帝お慰めの名家集、御旅の徒然が生んだ熊野懷紙、四隣に誇る西本願寺の秘法、と云う表題で

「西本願寺の寺宝として庫裡深く秘められてゐる熊野懷紙をいつか文部省が国宝として保存したいと交渉したことがあつたが、その時西本願寺ではすぐに寺職会を開いたが、喜んで応ずるものと思われて居つたのに、この指定を断つた。それ程この熊野懷紙は西本願寺にとつて何物にも換へがたい秘宝であつた。引續いて西本願寺に納められてゐる。」

暴戾極らない逆臣の為、孤島隱岐へ流謫の悲運にあわせ給うた後鳥羽上皇が、京の御所にましまして、蒼茫と沈みゆく京の街々を眺めさせ給うことが出来た平和のあけくれに居られた頃、後白河上皇が熊野那智神社に後参拜の爲しばく行幸されたように、御信仰篤き御鳥羽帝もこれにならせられたとが二十幾度に及んだ。京

からこゝへ往復するのに百余日、その十幾度目の御幸の時のことであつた。

目もくらむような美しく飾り立てた行列の内には、右近衛大将通親、藤原公経、藤原範光、藤原家隆、藤原雅経、源具経、藤原隆實、藤原家長、藤原秀景などが加わり、それへ歌で名高かつた寂蓮法師も御供をした一行が、かぐわしい冬の陽ざしを背に受けて暫しの間を京をあとに、熊野へ行列を進めた。京と熊野との間に十九ヶ所の宿があつた。一行は日に二つか三つの宿を歩んでは泊りを重ねた。紀州路にさしかゝつた時にはもう十二月の声を聞いた。山谷を朱に染めた紅葉はやうやく梢を離れて行く徑をせばめて、散り積んだ落葉は霜に掩われて冷たかつた。一行のすべての人には大氣を吸いこむ度に、胸に氷柱で撫でられるような刺激するところが等しく感じられた。

その夜の旅の徒然を御慰め申する爲、一座の人々の間には歌会が催された。歌題は寂蓮法師によつて「遠山の紅葉」と「海辺の晩望」の二題がえらばれた。帝も御出ましになつて興ぜられた。熊野懷紙はこの時の懷紙十一枚を蒐めた歌集であつたので、切目懷紙の別名もある。

御製

遠山の落葉……あきの色は谷のこほりにとどめおき 梢むなしきをきのやまもと

海辺の晩望……うら風に波のおくまで雲きえて ゆう三日月のかげでさびしき

右近衛大将 通親

遠山の落葉……きりめ山をちの紅葉ちりはてゝ 尚色のこすあけのたまがき

海辺の晩望……あかねさす潮路はるかに眺むれば 入日をあらう波のいろかな

寂蓮法師

遠山の紅葉……よそに見しふもとの色となりにけりかな ふる山のみねのもみじば

海辺の晩望……ながめやるおきの小じまに雲きえて 波にちかづく三日月のかげ

藤原家長

遠山の紅葉……紅葉ちる山のはちやきやどならば 散りくる色はにはにみてまし

海辺の晩望……ながめやる沖の小島の夕けむり いかなるあまのすまゐなむらむ

帝はしばしば熊野へ御幸あらせられたので、この熊野懷紙の外に瀧尻懷紙、その他数多かつたが、熊野（切目）懷紙の如く完全に保存せられているものは全く見当たらない。

熊野懷紙は時価三十万円以上に評価されている。最初は西本願寺の家老職である下間某が買入れて珍重していたものだが、いつの間にか法主に贈つたものだと言われている。この国宝級の熊野懷紙を京からはるばると

来て我社の名宝展にあらわれることゝなった。」

これが讀賣新聞の一節である。「この懷紙は今は国宝になっている」
このような名宝が当社で出来たのである。

御歌の御会に就いては以上であるとして、ぬかの「平治物語」に、夫の少納言信西入道が猶俗にて、日向守通憲と称せし頃、熊野参詣の途中当社に詣で、相者にあつて寸の首釵にかゝる相せりと云う事見え、「平家物語」には平清盛が是も又熊野詣の途中当社に詣でるとき、六波羅よりの早馬使に由て、藤原信頼、源義経が乱を起せし事を聞いて、熊野参詣を終へずして京師へ引返したりと見え、また平惟盛が熊野へ落行くとき、当社の前にて湯淺宗光に会いたること、治承三年六月二十日平重盛が当社へ参詣せしことは旧記に見えている。

歴史上特に顯れたかの「太平記」に大塔宮護良親王が熊野へ御潜行の途中、当社に於て御通夜せられたことをしるしまつり、御醍醐天皇の元弘元年九月笠置落成して、天皇は隱岐に遷されさせ給ひ。皇子大塔宮は時に御年僅かに二十五才、深く御心を回天の事業に傾けられ、御父帝の御理想を實現せしめんと、肝膽を碎き給うたのである。そうして吉野・高野・熊野等深山幽谷の間を跋涉して、銳意王業復興の氣運を御促進し給うたのである。この「太平記」熊野落の事の一節を繙くも誰か感慨にむせばざる。

この「太平記」の一節は省略するとして、其の要は、親王が般若寺を出でさせ給ひ、山伏の姿にて熊野に落ち給うとき、当社にて御通夜し逆臣を亡ぼし、朝廷再び輝かんことを御身を投げ伏して、一つ心に誠を凝らして祈り給ひ、暫く御目睡みける御夢に、一人の童子現れて、熊野へ落ち給うは御身の上危うければ、是より十津川へ赴かせ給うように告げられけるを御賢ぜられたるを尊く覚え給ひ、未明に御悦びの奉幣を捧げ、之によつて熊野へ行くことを止め、道を東に切目川に沿ひ行く山路の険しきを侵し、日数を経て十津川に入らせ給ひ、こゝに御運を開かせ給ひしことを記せるものである。

この親王の御経歴の地は「紀伊統風土記」に記せる如く、王子河畔より東の方切目川に沿ひ、西野地、宮ノ前、羽六、古井、下津川、脇ノ谷、松原、丹生、崎ノ原、皆瀬川、小原、田ノ垣内、高串、上洞、川又「以上切目莊」と、山間の道路を次第に上流に登り、夫れより柳瀬、安井、東村、丹生川「以上切目莊」と進み、西牟婁郡栗栖川莊兵^{ひょうせい}生村と大和國吉野郡十津川郷にある安堵ヶ峰高嶺を踰へて、十津川の上初湯川に下り、更に玉置山を越えて北山莊に至らせ給う説は、諸書を綜合してさもありしと思う。

親王當社に御参籠に先立ち、本郡内御経路は内の畑槌王子社（今の内原村萩原にありしも、高家皇太神社に合祀している）に御一泊し給ひ、次に塩屋王子社の麓、御所芝（昔は御殿があつた）に御滞留、其際近郷の住民弓倉理太夫が身を以て御警護申し上げ、御嘉賞せられたことは諸書に見えているが、其の時南塩屋柏木氏の祖

先、柏木助兵衛尉秀家も共に御仕へしたことは他に記録がないが、筆者の家に昔から柏木家の系譜を伝えていたので、夫れによつて調べると、其際親王より十本骨の扇子を頂戴して、内五本を弓倉理太夫がとり、要附きの方五本を柏木秀家が頂戴したことを記している。次に切目王子に御参籠されたのである。

親王が当社より切目川に沿いて上らせ給うた御道筋には、里人の口碑に残れるものが沢山ある。親王が当社の靈驗を蒙らせ給ひしより後、正慶二年十二月御初穂二百石を奉納の朱印を給ひしこと旧記に見えているも、之は深く信ぜべきでないと考える。其後親王が逆臣の爲に讒せられ、鎌倉二階堂ヶ谷なる東光寺などの土牢に幽閉せられ、半年にわたる御幽閉の爲、起居不自由にて遂に二十八才と云う、未だ春秋に富ませらるゝ御身を以て、痛ましくも足利直義の毒刃の下、千載の憾を呑んで弑せられ給うたのである。里人之を聞き敬仰し、建武二年十二月小祠を社殿の東太鼓屋敷に造營し奉ったのである。之が今の社地社殿の西、石橋を渡つて拜する大塔神社の始めである。

以上述べ來つた歴史上の事蹟が悉く現社地の東隣、丘上太鼓屋敷の辺の旧社地に於てのことであるが、其後天正十三年三月豊太閤南征し、湯川直春との戦の際、その兵火によつて当社の社殿、神宝等悉く焼失した。

社記によると当社の祝(神主のことは)は、大山國底の末裔が子孫連綿として奉仕していた。龜山城主湯川直春公は武運長久の祈願を当社にて屢々した關係により、常に味方していたものと思う。天正十四年二月上旬秀吉公より湯川直春に和睦を申出、その使者が來たので、直春は千三百余人を召し具し、勇を鼓して二月中旬に大和郡山へ着いた。そして数日滞留せるも秀吉より何らの沙汰もなく、直春不審に思い紀弔日高の切目の祝(其時は大山英長)は予て見方なればと思ひ、遙かに召し使いが來た。六月十九日に祝は社家、祢宜等十一人を召し連れ出立して二十四日郡山へ着いた。そうして直春に對面、直春は遂に秀吉の謀略におちいり、空しく郡山にて落命した。其時当社の社家一同が秀吉と戦つて討死にした。それでこの連綿と奉仕した大山家は絶えたのである。切目八千貫の城主、津村式部之丞は直春の家臣にて、大山英長と共に郡山にて討死にしたが、この津村の舍弟に信庸なる者があつて、当社の神主となり續いて來たのである。このことは今社地の前、道を隔てゝ碑を立て之を顕している。こうして天正の兵火に焼失したが、ただ天照大神の一殿だけが残つてあつたので、それから七年後、文祿元年八月下旬日向國高千穂より一神道者が來て、現在の地を相し、七ヶ月の内に竣工したと伝えている。今社地の前に妙法山厄屋敷と云うのがある。その神道者が住みし所云い伝う。このことは紀元二千二百五十年で、今から三千五百年前のことである。旧社地に於て再建したのは十二回、其間は千六百四十五年、今の社地で再建は三回、今の本殿は文政十一年六月二十七日新初めをなし、九月十二日上棟したもので百二十四年を経ている。旧社地での社殿其他は莊麗なりしことは、かの後鳥羽院御歌会にある右近衛大

將通親の遠山の落葉「尚色のこすあけのたまがき」即ち朱の端垣みて推して知るべしきである。

藩祖徳川南龍公は夙に神祇崇敬の志厚く、其江戸へ参勤に際しては、則ち領内諸社に参詣して御暇を告げるを例とし、そして領内諸社の修造等には常に大に意を致し、就中当社に対しては又屢々自ら参拜せられ。

旧記によると寛文二年三月御参詣あつて、当社往古のことを御尋ねになり、特に御神像を御覧ぜられ、其後御塗替を命じ、御戸帳御鐘の緒、御香爐、繪馬(天人の絵馬)等を御寄進になり、且社殿を補修せしめ、又境内に椰木及楓樹を植えられて(椰木は社殿の西に今も榮えているが楓は枯れた)、その他御寄進された者は、今社殿に納めて神宝としている。又境内殺生を禁断せられた(今その標石の一部が残っている)。又藩祖南龍公が神祇崇敬の志厚かつた爲、又歴代の藩主もまた其の志を受けて敬神の念深く、田辺藩主安藤家又然りであつた。就中太鼓屋敷にあつた大塔社を新に修営して本社の傍に遷された、今の姿がそれである。

又碑を立てゝその事蹟表して常に当社の維持営興に資助せられること多かつた。この碑について考うべき所がある。「紀伊続風土記」には、切部神祠碑は既に天保七年に建立せしものの如く書いてあるが、その碑はまだ建てられてないのである。

その碑に使用する石は、当時氏子が漁民と共に、切目の海中より大網を以て之を縛し、漁船数艘を以て之を引揚げ搬入したと伝える大石二個がある。かくまでしたものが今一つの所で建てられてないことである。

この「続風土記」の編者で撰文せられし仁井田好古先生は加田の人で、筆者の親族、海草郡松江村木梨延太郎(旧紀州藩の家老)は仁井田との血統あつて、現在大阪にいる好古先生より四代の孫、仁井田義熊氏と常に往来せることを知れる筆者は、何か好古の遺墨がないかと木梨を介して調べてもらつた所、和歌浦奠供山碑と望海樓遺趾とを表裏に刻せる板木(楠)の碑石大なるもの、又本郡三尾石室碑と塩屋王子祠とを表祠碑とを表裏にしたる、同形の二個の板木を保存せることが分明せるも、切目王子の方は見当がなかつたのは甚だ遺憾である。

おそらく好古先生もこゝまで用意したものを、建立に至らなかつたのは残念であつたと思う。筆者もなんとかまた考えて見たいと思う。

当社祭礼のことについては、^(一五八五年)天正の兵火までは年々七度の祭礼があつた。就中九月十八日の祭礼には、御神輿三台あつて、本社は一台に、東二社は一台に、西二社は一台に御移しして、御道具の順番は本村(今の西の地)、次に島田、宮ノ前、古屋、羽六の順に幟、警護付きにて渡御したことを旧記に記している。この御道具は天正の兵火に焼失した。

其後は春夏秋の三回とした。^(一七一一年)正徳元年(今から二百四十年前)宮井太次兵衛、宮井太四郎が発起して祭礼を復興するようにした。即ち御神輿を寄進し、其他一通り道具を揃えて、翌正徳二年九月から祭礼を行ったことを

旧記に記している。

茲に疑問な一事がある。「紀伊続風土記」には、当社切目王子は西野地、島田、宮ノ前、古屋、羽六五ヶ村の産生神なり。又島田、古屋の村界なる正八幡社は島田、西野地、宮ノ前、古屋、羽六五ヶ村の産生神なりと書いていることである。「紀伊名所圖会」にも相似たことを記している。

この五ヶ村から二つの産生神がある筈がないと思う。元文二年(一七三七年)（今から二百十五年前）宮井富教の書いた「永代曆」という記録を見ると、切目八幡宮の祭礼は五個所とは、島田（東村）、西ノ地（西村）、宮ノ前、古屋、羽六の五個なり、之に座主と号する上座両家ありて、一方は西村に日岡権守、後に玉置太郎右衛門、一方には東村に真形平四郎、後に宮井万吉郎の両家あつて、この八幡社の祭礼には重きをなしたことを記録している。

この正徳元年(一七三〇年)と元文元年(一七三六年)との間は僅かに二十五年の違いである。此辺の研究を要すると思う。当社毎年九月十八日に相撲をしたとか、手躍り狂言をしたとか伝えている。宮井文右衛門の発起により、かの「名所圖会」にある社殿の前を流れていた川を西に変更したのも、この催しをするために拵げたものらしく、大体此当時既に一地方の祭礼となつていたのかとも考えられる。この点なを研究の余地ありと思う。

兎に角現在は古屋八幡社切目川だけだし、島田中山王子社、西ノ地は当社と各別になつてゐる。風雨霜星移り、物換わり、かの御由緒いと尊き当社も、今や昔日の面影を存するのみ、時代の推移滄桑の変は、遂に其状を伝えることが出来なかつたものだが、この千載の旧蹟を維持したいものである。吾人常に懷旧追慕の念實に禁する能はざるものがあります。謹んで御神慮を拜察するだに畏き極みである。

筆者は去昭和五年(一九三〇年)十二月不圖した事から動機になつて、せめて御由緒の一端でも書いて世に発揚したいと思ひ、尔来幾度となく縣立圖書館に通つたり、あちらこちらと飛び回つて資料の蒐集に相当の日時と資とを費やしたのであるが、色々の事情の爲に二十余年を経過していつた。今年還暦の年を迎え、幸い南紀郷土学会の一會員として、この二十余年間の気持ちの一端を書くことを喜ぶものである。

最後に筆者は当社につき遠大なる希望を提唱したい。夫は現在の社地は鉄道敷設前は一つの区劃をなしてゐたが、社殿背後を貫通せんため、實に莊嚴の感を減殺してゐる旧社地は小高き所であつて、而も広々とした所である。如何ようにも背景を造られると思う。一般の神社の如く石段でも造つて拜される尊き社地となると思う。幸い太鼓屋敷の旧蹟も残つてゐるのだから非常に好都合だと信ずる。こうした構想のもとに進まれる時代の来ることを大に期待して擱筆する。

郷土研究 第九編

瀧本文書

日高地方に於ける社会興奮 日高地方に於ける相互扶助

井上 豊太郎

瀧本文書

瀧本文書とも名づくべくこの四通の古文書わ、最近に、和歌山縣日高郡内原村池田の瀧本好つ氏方の神詞のなかからでてきたもので、いづれも良質大判の和紙に書記されていて全部で四通ある。

一願奉口上覺 宮由來書 苗字譲渡書外一

いづれも瀧本家の祖先のかきのこしたものである。

書中の年代わ昭和二十六年から逆算して

正和元年	昭和二十六年	六百三十九年以前
徳三元年		六百三十二年以前
弘治元年		六百十九年以前
弘治三年		三百九十四年以前
元龜元年		三百八十一年以前
元龜三年		三百八十八年以前
元禄十六年		二百四十八年以前

宮由來書

「井上豊太郎解説」

元徳三元年西正月六日瀧本六郎命終ス

依之元弘元年戌三月宮造納ル

御尺七寸二分 行年七十五歳

同五寸二歩 木像内室造立シ社内へ納ル

其後元龜元年(一五七〇年)七代後瀧本清多左衛門

虚空藏菩薩 御尺壹尺二歩之木造ヲ建立ス

若於宮匠事等有之候時ハ此寫シヲ以

元之通造立致可申者也

子子孫孫ニ至迄爲廓覺書記シ置

○

一、我等先祖瀧本右門之丞征夷大將軍源實朝公之近臣ニ而故ありて諸國旅行する事□年其後紀州日高郡池田

二陣屋構へて住居凡至今迄四百年餘リニ後當ル其後紀州正和元年(一三三一年)瀧本六郎大切なる家譜武興等末□ニ至

リテハ紛失□程恐則堂尾上敷へ埋置事相違之候君我子孫ニ至リ智惠ある者ハ知へしと也

今度其元故ありて名字相諫興事相違無之候然今後ハ瀧本可被乗名者也

弘治三年(一五五七年)戊午

瀧本 三太夫

瀧本 角左衛門殿

○

城 巳午之方

堂野尾上屋敷

忌念所戊亥角

有之

○

願奉口上覺

私祖先瀧本六郎之申仁者同姓右門之亟六代後元徳(一三三〇年)三年卯正月病死仕候元弘(一三三一年)元辰年宮作木像茅社内江納メ氏神
と尊由來等□御座候

其後顛百年餘り後元龜^(一五七〇年)元午年虚空藏菩薩を産生し奉尊勸請申事ニ御座候 私親祈所シ願佛ニ而耄体者藥師如來耄体ハ弘法大師 此三昧之佛を以三太夫佛と申 則弘法大師之御作ニ而御座候

親助兵衛之所持地端江勸請申修堂□付置御座候

然処此度御造供仕度候得共小村之儀故山透切致御造宮仕度御座候何卒御問濟被成下候様直々御願申上候此段宜敷御取被計成下候様乍恐奉願上候 以上

池田村

願主 清三郎

元禄十六年未九月朔日

(裏書)

右表願し通聞届令承知候

九月五日

夏目 金兵衛

堀田 權八

瀧本 六郎殿

一枚起請文

もろこしわが朝のもろもろの智者たちの沙汰し申さるる観念の念にもあらず。また学問をして念の心をさとりて申す念仏にもあらず。たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞとおもひひとりて申すほかには、別の仔細候わず。たゞし三心四修と申すことの候は、決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと、おもいうちにこもり候也。このほかに奥ふかきことを存せば、二尊のあわれみにはづれ、本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人はたとひ一代の法をよくく学問すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じくして、智者の振舞をせずしてただ一向に念佛すべし。爲証以両手印

浄土宗の安心起行此一紙に至極せり。源空が所存この外にまったく別儀を存せず。滅後の邪義をふせが

んがために所存をしるしおわんぬ
建曆二年正月二十三日

源空(在判)

右一枚起請文わ法然上人遷化の二日前、弟子勢硯房源智の乞によって書してあたえたもので、浄土宗の眼目である。これわ徳本上人を研究する場合の主要な資料の一つであるから出しておいた。（井上 豊太郎）

日高地方における社會興奮

日本人の特性として附和雷同と模倣とをあげることができる。

この二つの特性わ、理性性がとぼしく、感情の分量が過剰であることからうまること、自主性の欠如している結果である。一口にいわれる民度、すなわち國民の文化度のひくい結果であるといわれているわ、とりもなをさず人々の理性の欠如であつて、すなわち動物にちかい感情的な行動の都合が比較的に多量であるとうことである。ゆえに日本國民の文化指導わきの方向を理性の涵養におき、理性の發達を促進することを目標とすべきである。

人文科学、社會科学そう云つた部面^⑤の學問を盛大にして國民の判断推理の向上をはからねばならないことである。

私が昭和^{（一九五一年）}二十六年の課題としてみづから三つのテーマをとりあげてみた。

- 一、日高地方における雜信仰の形態 がその一
- 二、日高地方における相互扶助の形態 がその二
- 三、日高地方における社會興奮の形態 がその三

ともに郷土研究とゆう制約のもとに、範圍を日高地方に限定した、またての内容もホンのガイド程度のこと、これから後の人でこの種の資料をもつて、社會学的研究をなさうとする人えの手引艸に当にすぎない。たゞその目標わ必ず將來着目され、研究題目となる案件であるということわ申上げられる。

私わが郷土の新進がこの方面に着眼して、これらの先人未到の境地を開拓さるることをのぞむや勤也である。

郷土研究者がたゞ郷土の「ものしり」でおわつてわつまらない。

さてこれだけの序言をにおいて本題にはいろいろ。

ある一のシヨックが人々に共通する場合に、ある一定の場所に群團する人々が、二、三の人の煽動またわ二、

三の前例によつて、模倣の群團行動が発生する。そこにわはつきりした原因の判断も、目標への合理的な手段への考慮も存するわけでなく、たゞ群衆行動の渦巻が存在するのみであるが、そのような社会人心の興奮が如何にしておこるか、いわば輿論の実践的表現ともいふべき現象を対象として、その状態を解剖しようとするのがこの研究題目であり、ある人わこれを社会緊張といつてをる。その著例としてわ

一、ゑじやないかおどり

二、日露戦争終結の時の日比谷騒動

三、大正年間の米騒動

四、東京震災後の鮮人襲撃恐怖

などをあげることができる。

ゑじやないか踊

明治維新の時の出来事で、當時幕府の威令がおこなわれず、外國船の渡來で徳川幕府の傳統政策である鎖国方針が時代の流れにおされて倒壊一步寸前、社会人心が極度に不安定に置かれた前後、伊勢の皇大神宮のおはらいさんがふるといふ或怪事がおこった。多分たれか人心惑乱策に夜中ひそかにしかるべき家の軒先にさしてまわったものであらう。その家でわ神酒をあげて祝福する。親戚枝舊が祝賀にくる、これに酒肴をだして振舞う。それがいつの間にか群衆的になり、酒によつておどりぬくようになった。おはらいさまのふられた家こそ迷惑、何でもゑじやないかゑじやないかでおどりぬく。

てのつけようがない。かようなダダイズムの行動が白晝公然としばらくわおこなわれた。平素ケチン坊な家などが、この見廻りをうけた。(瀬見善水「ゑじやないかおどりの記」参照)

かような事例について、日高地方でみかくるものをひろつてみる。とおまつりと會式と私人の場合にも見出しうる。

神社のおまつりわ、おまつりさわぎの語のしめすごとくに、まったくその地方の人心の社会興奮を如実にみせている。

他の人からみれば、まことにツマラヌことながら、後生大事にやつてのけないことにわ氣がすまない。なぜそうしなければならぬか、とゆう理屈なければそうしなければならぬとゆう根拠もない。神社のおまつりにおける氏子の人々の興奮の顕著な例である。この社会興奮わ神社の氏子の担知事の多数存在する。詠どその庵合かたひ二上になる。

たゞしこの興奮は特別に日高地方にかぎられたものでわれない。ほど全国的なものであり、日高地方も御多分にもれないというだけのことである。

佛利の會式もまた社会興奮の一場面である。

日高地方でわ道成寺の會式（もと毎年旧三月二十七日、現在四月二十七、八両日）を十日堂（□□八千日、毎年八月九日夜より十日）と由良開山の盆行事燈籠焼とをあぐることができる。

道成寺の春會式は何とゆうこともなしに多数の人出がある。

十日堂も徹宵参詣人があるが、これわ春會式にわ及ばない。

開山の盆行事わ、いまでも旧曆七月十五日深夜におこなわるる燈籠焼わ人出がある。流燈にかわる行事である。

右のほかにも一つの社会興奮とみるべきものに上己の節句、すなわち

桃の節句（現在四月三日にやる）の磯遊濱遊である。

もと中華でわ、この日に登高と称して山にあそんだ。これわ中華にわ平地がおうくて山がとおい、よりて里人この日に山にのぼつたのしんだ。それが我國にきて四面環海の影響をうけて海にあそぶ例となったのであるが、世がかわつて社会興奮の度がくわわつて、酒肴をたづさえて酔保誘引園遊會などをやるようになった。まさに社会興奮の好事例である。

嫁見 およめさんが嫁入りしてくる。其日にその婚家の周圍に蛸集して新嫁の姿や祝言の様子を見る。嫁の方わ衣装みせなどをする。すたりつつある現象であるが、まだいくらかのこつている。

尤もこれも日高地方にかぎられたことでわない。

普請家宅の新築の場合その在所の人に手つだつてもらつて、振舞酒をし祝餅をまく。

餅まき もちをまくとゆう行事わ、これらの社会興奮の場合の一つの特色をなす行事で、何かといえは餅まきをするのである。

やあとこせ 従来群衆によつてうたわるる民謡わ、たいてい「やあとこせ」の伊勢音頭であつた

盆踊（説明省略）

祭喧嘩（全）

日高地方における相互扶助

井上 豊太郎

われわれが社會共同生活体として存在しているかぎり生活共通として隣保の相互扶助なくしてわいきてゆかない。一定の共通な生活を享受している限度において孤獨な生活わゆるされない。他の隣保共通の制約わ、これをうけざるをえない。ちかごろ人權問題としてとりあげられている村八分とゆうごとき相互扶助の拒絶とゆう一つの共同社會制裁わ、社會共同生活を攪乱するものえの制裁として單に人權問題としてのみ取扱をなすべきものでわなく、もつとひろい共同生活体の倫理道德の問題として、その是非が研究さるべき問題であり、社會學上將來の一課題として重要である。

私はいまここで村八分(仲間はずし)を研究しようとするのでわなく、共同生活体の相互扶助とゆう実践の實例をさぐるうとするものである。社會生活共同体のわれわれが、常時隣保間の相互扶助が行われていることが、前提となっているからこそ、村八分などとゆうこともおこなわれているのである(かようなことも正當視せらるる時代がくるであろう)とゆう一例としてあげたまでである。

現在 共同生活体における相互扶助わ村落においてその度合いがふかいが、町内にあつてもなをおこなわれている。

國とか府縣とか市町村とかいった公共團體や、私の法人團體などの社會施設がゆきとどくにしたがって、民間の相互扶助の事項とその度合とが漸減してゆくのである。

現在日高地方におこなわれている相互扶助について列擧してみる。相互扶助の大低一部落を單位としておこなわれるのが普通であるが、一村またわ数村が連合しておこなわれる場合もある。

第一 人の死亡の場合その葬式の準備、万端跡方付けなど、町でも村でもたいいてい隣保の人たちが手傳にゆく。信仰の宗派の如何をとわない。村八分の場合でも葬式の場合にわ會葬する。この習慣わなくならないであろう。葬儀社のような營業者ができてかわらないであろう。

第二 家出人、変死者の場合も全様である。家出人が変死のおそれがあつて歸寐しない、あるいわ変死しているかもしれないような場合に、隣保の人々が手傳つて、その家出人の所在を探索する。変死人の場合わおなじである。

第三 重病人の場合、その隣保の人達があつまつて、その快方を祈るために、産土の神、またわ最寄の神仏に千度參をする事がある。神社や仏事に千度石をたてているのがある。

第四 火事の場合 出火した家、延焼の恐れのある家の家財の避難など手傳にゆく。また山火事の場合など、共同消火に出動する。洪水の場合、海難の場合などもおなじである。

第五 怪我人の出来た場合にも隣保が助けあう。

第六 家普請の場合などもたいてい幾日か手傳にゆくのが普通である。

右のような個人の不事災難の場合でわなくて、共同の利害のために、相互扶助と一定の制約をもっていることがある。

第一 道づくり、溝づくり、池普請など、そうした共通の利害をもっている行事について、各戸均一に労働を奉仕して、道づくりをしたり溝づくりをしたりすることがある。年に一度日か二度といったところ。

第二 神社の造営や祭宿についてもおなじことがいえる。

第三 お寺の場合についてもおなじことがいえる。

また一定の制約をうける場合としてわ、共有山の草刈とか、磯びらきといった事がらについてわ、一定の時期までの採取を制限する。その解禁を口あけといっている。

かようにしてわれわれわ、日常生活々動の上の必要から、一定の相互扶助の場合が存在するのである。この相互扶助のなくなることわ予想しがたい。

(昭和二十八年八月二十八日)

郷土研究 第十四編（昭和廿七年十一月廿九日）

道成寺関係文献 展観 目録

井上 豊太郎

は し が き

司馬溫公の遺訓として「書を積んで之を児孫にのこす。児孫必ず之を読まず。金を積んで之を児孫に遺す。子孫必ず之を守らず。しかず陰徳を冥々の裡に施して子孫長久の計となさんにわ。」という詞がのこされています。司馬溫公は大学者、大達見家、大經倫家であります。その言実に千古の至言であります。陰徳あれば陽報あり、積善の家に餘慶ありであります。陰徳を施して陽報をまつの子孫、長久の計はここで論ぜず、たゞ積貧はまず無縁の積書の遺子孫かならず之をよまずと観念しては、私の私の手にした書物を一冊たりとも、之を子孫に遺すことはしまいと考えています。

研究のために資料を蒐集することには可なり眞剣であり、貧囊を空しくすることをいといませんが、一旦閱讀しおわった資料は、他の研究家のように執着し保存することをせずに、随時に之を江湖の流通にまかせて衣魚の餌としないことにしています。散逸はまぬがれない命口。之を学校に寄贈し、圖書館に寄附した所で、当座は別として、時がたてば大して尊重して保存されないことと知見してみれば、日本の國（従前よりもつまらない國になりさがった）現在に生をうけたのがあわれな運命よと諦観して、何物にも執着をもたずに、たゞ天命をたのしむことであるとさとしてみて、書物というものの終始を考えている私です。

道成寺のことをひと通りまとめておくことがよいこととおもひ、かなり以前から心がけて資料をあつめにかかってみたが、なかなかあつまらないで、いまでは半ばなげかけた形である。

というのは、道成寺の研究は第一が寺院の建立年代とその変遷を研討するところであるが、これはまず傳説研討の範囲をいでない。その資料はほとんど皆無といつてよく、第二に安珍清姫の傳説であるが、この説話の傳説はひと通り研討できるが、これをこの寺の縁起にかきこんだいきさつというものが、千古疑問のままで、これを解明すべき資料はさらに発見されていない。第三にこの清姫説話の梨園進出であるが、この方は多少系統だてて研討しうる可能性がある。けれどもその資料はなかなか容易に入手しがたく、田舎におつてはまずで

きにくいことであるともいえるのである。

ここで私は啓蒙会館落成記念として、南紀郷土学会の会合を啓蒙会館でやつてもらうに際し、從來わづかに集まっている道成寺文献をみていたただく考えのところ、貧に妨げられて意に任せず、且つ夏来微恙のためいまだはたさずにいる次第。よって今回郷土学会例会席上で披露することにした次第である。

これらの文献も前述の通り、やがて私の手許から散逸しさること必定でありますから、只今よく御覧おきくだされたいとおもうものである。

道成寺関係文献一斑（次第不同）

日高 樂天莊 主人 所藏

○	道成寺寫眞帖	一冊	道成寺出版部	大正一五・五・一五
○	道成寺大観	一冊	小野 広海編	昭和一二・四・二〇
○	義太夫鑑	上下	秋山 清	大正六・一二・五
○	文樂今昔譚	一冊	木谷 蓬吟	昭和四・一二・二六
○	道成寺靈靈蹤記	七卷五冊	九峯叟礼洌（南豫古神野郡）	寛延三庚午正・元
○	扶桑鐘銘集	四卷三冊	岡崎 蘆門編	安永七戊戌十月
○	旦生言語備	二冊	天明四・正 版	大正一五・一二 覆刻
○	道成寺岐 ^{ワカレ} の柳・八文字屋其笑・瑞笑			寛永 四未年春
○	道成寺鐘魔記	五卷六冊	（詳）天王寺屋慶子（中村富十郎の似顔絵を巻頭とす）	文政四年辛巳春
○	義太夫調査書	一冊	東都絳山椎夫編	大正二・四・一
○	道成寺開基	一冊	徳島県教育会	明和一四・三・一八
○	祖父を偲び五十年を顧みて一冊		津谷 卯之助	昭和一五・五
○	道成寺黒髪供養	土岐善磨作詞 町田嘉章作曲	藤蔭芳枝舞踊	昭和一〇・六・五
○	日高川入相花王道行思ひの吹雪		不明（横十一行本）	

○	京鹿子娘道成寺	虎ノ舟板	不明(八行本)	豊久 (鐘供養)	
○	長唄小史	一冊	池田孝次郎著	昭和五・一・十五	
○	日高川入相花王	丸本 一冊	歩堂合冊(七行本)	宝暦九羊己卯二月朔日	
○	竹田小出雲近松半ニ北窓復一	一冊	竹本三郎兵衛		
○	日高川入相花王・四段目嫉妬の段	一冊(五行本)	近松門左衛門作(八行本)		
○	用明天皇職人鑑	一冊	日比野友子著	昭和一二・四・一〇	
○	宮子姫髪長縁起	一冊	道成寺納經所	年月不明	
○	道成寺畧縁起	一冊	書き本		
○	道成寺内陣説明口上	一冊	木版本(吉田村)		
○	鐘巻道成寺縁起	一冊	書き本		
○	道成寺由來	一冊	宮田東峰作曲	昭和八・五・三	
○	ハモニカ―楽譜娘道成寺	一冊	道成寺一枚摺	年月不明	
○	安珍清姫畧縁起	一枚	作者不明(往來分)・書本	文化一四・三・吉日	
○	道成寺名所	一冊	山田清作編		
○	古版長唄八種	一冊	道頓堀角座番附	文政頃内茶屋板	
○	傾城入相櫻	一枚	狩谷楠太夫記・(寫)	文化六・八	
○	芳澤あやめ由來記	一冊	宇治紫文齋述	明治二一・九新調	
○	道成寺	一冊	鶴賀繁太夫台本(六行本)(新内浄瑠璃)	年月不明	
○	安珍清姫日高川嫉妬の段	一冊	井上豊太郎抄	大正九・六・二八覆刻	
○	加賀椽宇治嘉太夫正体乱曲揃	一冊	吉田屋版		
○	中山傳信録抄	一冊	筆者不明	年月不明	
○	新版安珍清姫口説(くどき)小一冊	一冊	井上豊太郎編	昭和二〇・六・一	
○	日高川道行思ひの吹雪	一冊			
○	日高川安珍清姫絵巻	一冊			
○	編曲道成寺	一冊			

○	道成寺説話	一冊		
○	佐谷 浄瑠璃ものかたり	一冊	森 訃專編	昭和八・十・二七
○	道成寺之研究次第	一冊	井上豊太郎覚書	昭和二一・九
○	道成寺大門建設年考	一冊	芝口常楠述(日高新報抄)	年月不明
○	傾城道成寺	一冊	沢村屋利兵衛版(長唄稽古本)	年月不明
○	きな 百千鳥道成寺娘(長唄本)		瀬川菊之丞	年月不明
○	京鹿子娘道成寺	一冊	(長唄けいこ本)	年月不明
○	鐘が岨道成寺	一冊	河内屋長七版	年月不明
○	道成寺 道成寺集成(八編)	一冊	鈴木善助編(活版)	明治四〇・一二・二三
○	譜入娘道成寺		山田舜平(杵屋弥三郎曲)長唄けいこ本	大正一三・二・二五
○	實録日高天音山道成寺靈驗記	一冊	里上縁之助	大正一四・一〇・五
○	道成寺芸術の展開	一冊	高野辰之	昭和二・三(史学雑誌)
○	道成寺物語と鐘	一冊	三輪善之助述(史蹟名勝天然記念物五卷二号抄)	昭和五年史
○	道成寺	一冊	校訂観世元滋 謡曲けいこ本	大正九・一〇・一五
○	道成寺		喜多六平太 全	大正一二・一一・五
○	道成寺現在蛇鱗	一冊	浅田一鳥並木宗輔作浄瑠璃丸本	年月不明
○	全日高川の段	一冊	全	
○	道成寺	一冊	松岡一男編 膳写版本厚冊(道成寺解説)	昭和一〇・八
○	元禄世相志	一冊	齋藤隆三著	明治三八・一二・四
○	歌舞伎細見	一冊	飯塚友一郎著	大正一五・一〇・一七
○	日本名宝物語 第二輯		讀賣新聞社編(新道成寺物語賢学草紙)	大正五・五・五
○	近古 温知叢書第七編	一冊	岸上操編 博多 本(屋代弘賢道成寺考)	明治二四・七・一一
○	文芸			
○	演劇通史	一冊	花房義実著	明治二三・八・一三
○	鹿子紋娘道成辞	二冊	山東京山作	文政一一

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
浄瑠璃史	紀伊国名所圖繪後編	古畫備考	道成寺繪卷	道成寺草創繪卷	道成寺集成	歌舞伎年代記	道成寺鐘之図	京都妙満寺蔵	道成寺古図	尾上鐘之図	道成寺煎餅包紙図版	
一冊	六冊	十八冊	二卷	一卷	一冊	一冊	一幅		一幅	一幅	二面	
寺山啓介	(芳沢あやめの像)加納諸平撰	朝岡興禎著	塩路寫眞館寫	繪者不明	松岡一男編	立川焉馬著						
明治二七・一・二		明治三七・六・三〇	大正五・十二・一	年代不明	昭和一〇・八	大正一五・八・二五						

所謂道成寺物について

井上 豊太郎

戯曲の方面における道成寺物は、謡曲・能楽・義太夫（浄瑠璃）・長唄・歌舞伎・劇等多方面にわたって、作曲演舞せられている。この所謂道成寺物の研究については一個人の手では容易にまとめにくいし、その資料をうる便宜もすくない。殊にこれらの道成寺物語はゆるしものとなっていて、之を完全にこなせたら一人前という難物で、表現がむづかしいとされている曲目。

道成寺の研究と云えばしかしこの道成寺物の研究が眼目でなければならぬ。お寺の沿革史も研究としては大事であり、寺傳のいいつつたえである奈良時代の創建であり、宗旨も法相・真言・天台と三替しているとしても、建造物からは時代相を見出しにくいことであり、安珍清姫の傳説にしても如何なる行動を経てこうした破天荒の説話がとりいれられたかは判然しにくい。

ゆえにこの説話の成立も、靴をへだててを痒かくこにしかならない。根本の思想は仏教の女人濟度という点にある。女性には罪障深事でもつてうまれる理性なき情欲がつねに大きい罪をつくっておるといふ点を強調し、之を展開して畜生道のごとき地獄におちるそれを佛力で救済するという佛教の奥 叻をとく方便の説話で、女人または畜生類にまで佛果が及ぶとする考えは佛教の持つ理念の例説に他ならないが、道成寺の縁起に於て、こんだのは、どんな次第でしかるものか土台わからぬ。何人が之を解明しようとしてもおそろく不可能かもしれない。存在しない資料に解説の途はなく想像をたくましくして索強附会の説をくわえてもはじまらない。下手をしては「道成寺靈縦記」のような俗解ともなり、一歩つつこんでも高野辰之博士の説のように「華嚴縁起」を引合いにだすような無理をすることになる。知らざるを知らずとし、わからざるをわからずとして、やむをえないことであると、私は思っている。

所謂道成寺物の音曲歌舞の芸術については、おゝくは元禄時代以降の作にかゝるものと思われ、比較的樂にその沿革をとらえる点はあるけれども、之とても元禄時代の書物文献は今日入手困難のものが多々で、さてとなると茫然手を振りてしまうこともおゝい。況んや専門的研究になれば、いわゆるゆるし物の掟は容易にうかがうことが出来ない部分がなかなかあり、私などのような野蠻人の業余の研討ではまづ物にならない。

日本人の神経行動はいかにも個人的で、けっして綜合的でないゆえに文芸にあつて例をとれば、歌人は俳句をしらず、句人は川柳をしらず、画人書をしらず、書道人画をしらず、個々別々に自己の領分を守っているだけである。ゆえに所謂道成寺ものについても綜合研究、または比較研究というようなことは無駄であり、また

出来ないことである。

所謂道成寺物についてまとまった研究といったものは一向見当たらない。

高野辰之博士（元の音楽学校の教授）の日本歌謡史で、この題材をとりあげているだけである。

その抜粋物的小冊が「道成寺芸術の展開」である。

所謂道成寺物のかたり物としては、謡曲・浄瑠璃・長唄・新内のほか、説教節祭文にまでとりいれられてをり子守歌にもなっておる。たのこれらの流行は紀州近辺は勿論、とくに奥羽方面にのびておる次第である。

また演技としては能楽・歌舞伎・舞踏にとりいれられておる次第である。

謡曲の作品道成寺は道成寺の鐘供養の場え白拍子があらわれて、その鐘をうばわんとする所作をとりあつかっており、之は観世以下どの流派でも奥ゆるしもの一つとなっておる。能楽は勿論この謡曲の所作をやるものであつて、ねらいは人間の心理の変化が動作となつてあらわるんその急激な変動の表現がむづかしいとされているものである。歌舞伎の鐘入娘道成寺的一幕も大同小異で、この筋をとつて舞踏化したものであり、新舞踏もここがねらいである。京鹿子娘道成寺以下様々道成寺も大畧は同様、多少の差をもつて趣向しただけのものである。

道成寺入相ざくらの名のおこつたのも、清姫の名のでてきたのも、浄瑠璃の作からだと云う義太夫のかたり物としてのこるもの現在二種、一つは道成寺入相ざくらであり、一つは道成寺現在蛇鱗である。

道成寺入相花玉は花王と題している。道成寺入相花玉は宝暦の頃竹田小出雲外四人がつくつた浄瑠璃の台本

（二七五）六四年

であり、道成寺現在蛇鱗は並木一鳥・浅田宗輔？らの作であり、入相花玉のやきなをしである。長唄の作は之もいろいろあるが、京鹿子娘道成寺が一番有名であつて、例の名文句「鐘に恨みは数々ござる」にはじまっているのである。長唄というのはことばでかざられた人形みたいなもので、中味がほんのちよつぱり、あとは語るのどまわしの声まわしの味をたのしむといった一種妙な音曲であるが。日本の音曲ものは総てすべて叙事詩でないところに別趣があり、浄瑠璃の口いとこなる処である。劇の道成寺は浄瑠璃のちよば語を媒体材とする人形芝居、または歌舞伎と鐘入の場だけ長唄を媒材として演ずる舞踏（劇）とにわけることができるが、鐘入の場だけが尊重されてしばしば演ぜられ通し狂言として演ぜられた。例ははなはだすくないのである。

道成寺劇の創始は元禄生まれの芳沢あやめであるといわれて、この芳沢あやめが当郡船津村小原長瀧の産といわれる。この筋が天王寺屋中村富十郎の一家といわれ、娘道成寺ものはいわゆるお家芸とされ、当時大阪、京・江戸の三都で評判をとつた。

明治以降では尾上菊五郎あたり芸十八番といわれたものである。

道成寺草創

おぐしの長さが一丈で 勅使が紀州え御下向 (一) きさききのぼった都子姫 ママ幸運児

ぬれていとわれ春雨ぢやとて (二) 観音ぬらしてなるものか 文武天皇御勅願 ソーレ建立だ

お寺ひらこか緋衣か (三) 勅命當塔道成寺 立派にたつのが御本願 ソーレ御寄進だ

髪長姫の髪供養 鐘もうちましよ (四) カールもしましよ 日本娘はソーレなげしまだ

かるい調子でほがらかに (五) 酒ものみましよ おごりましよ 花の道成寺人の波 ソーレお會式だ

●●のみにちよんなに金槌かんかん (六) 日取も木取も木やりもサを尊千手の観世音ソーレ棟あげだ

比叡のお山のその奥で 大黒天がおどるトサ 打出の小槌でうちだした マア福の神

鐘巻道成寺

奥の熊野の八庄司 (一) 真砂の庄司清次の おこぼ娘の

清姫が一目で戀をしったトサ

安珍さまゆえ身をやいた (二)

僧形淨衣きたとても 東男のたくましさ おぼろの

春の戀こころ 一目ですきになったとて 何でわる
かる戀ぢやもん

道業堅固の山伏が (三) 女犯をおかしてなるものか 女
性は地獄の魔のつかい にぐるにしかずこ

おわれてにぐる日高川 (四) 蛇体になってもこの川を
わたらりやならぬとザンブく 人紋うろこにまる

はだか 一目も恥もまっしぐら

(五)

とんとんお寺の道成寺 つり鐘おろして身をかくす
安珍とうとうみつかって 七重にまかれてしめられ
て あかいお舌でなめられた

(六)

観音供養鐘供養 清姫怨霊あらわして 蛇体となつ
て火をはいて かついでうせうとザンブく 戀の
修羅場のもの狂い

(七)

蛇槿がかれてもう方か方で 露の情でまたそだつ

道成寺小唄

(一)

戀の清姫 濱木綿の露よ 操筋 さわりやとけますく

蛇ともなる

(二)

育ち黒潮 紺青にそめて 戀は底なし 日高川瀬のく

蛇ともなる

(三)

遠音の入相 さくらがもゆる いとし安珍にげりや追いますく 寺までも

(五)

蛇塚かげろう 女夫の蝶々 鐘は七巻 とけりや二天のく 夢となる

(六)

娘道成寺 黒髪供養 千手観音 むすぶえにしのく 二世までも

山伏安珍死んでない 悲恋の清姫いきている 戀の
なさけにいきてます

(八)

アブレ安珍にげませぬ あなたのすえ膳たべましょ
う アブレ清姫やきませぬ あなたがイヤならグッ
ドバイ ほかから彼氏をえらびまほ

(九)

講話が出来て平和きてぬくとい春日にいだかれて
わすれぬ戦禍わすれましょ あきらめられぬとあき
らめて 花の道成寺夢を見に

昭和廿七、十一・廿九日

南紀

日高地方の夏の田駿祭事について

片山 隆三 述

(田駿＝田舎)

古代

實存する習俗を描寫するつもりであつたが。只單に描寫した丈では。平淡に過ぎ。且つ遠い祖先からシキタリとして受継いできた其の輪劃や凸凹も段々に容滅して原形が著しく緩畧てれ。各々の民族のもつ特有の味や。文化の相似性や。ウイルシャフトとの繋がりや。生活のエンジョイとしての色彩が表現されないの。少しく解説を加へることにした。

民俗は民族の持つ暦日とウイルシャフトと結合して生活のエンジョイとして生育したから暦を十分明快に説明した上。發生當時の民俗生活の模式を復原しなければ十分と言へない。然し茲では餘裕ある時間を持たないので何も彼も緩畧に取扱つたが。大体の筋の通る程度に必要な文献と説明を用意したつもりであるので諸者諸賢の批正によつて意に滿たぬ点は改修補正する考へで一應草案して用ひる事とした。豫の断りおくしだいである。

一、牛休み

解 丑休みは田植終了後の六月下旬―七月上旬の丑の日に農家も非農家も村中業を休み休養を取る

此日農家では早朝養牛を流につれて行き水浴せしめ畜舎を清潔にして敷草を取り替え麥豆の如きよき飼料の量を増やして常よりも馳走優待する。そうして新麥の糕コウをあたえる。

註 祭馬王の行事の変形と見られる、又新麥の糕は角黍と同じであるし、重午の馬の日が馬耕が重要な北支の田駿行事に登場する如く、水耕が主要農事である日高地方で牛が丑の日に登場するのは類似性と見られやう。

二、暦の字画交雜

案 丑は細芽畧符であるから種子が甲斥して發根し、細狀に生長する狀態に擬したことは明であるが、画暦になると、牛に充つるのは明でない。されど抱朴子に

山中の丑日書生と稱する者牛也

とあるから丑を牛に図したのかもしれない
又曰ふ

山中の未日主人と稱する者は羊也
山中の亥日君人と稱する者は猪也
山中の申日九卿と稱する者は猿也
山中の申日人君と稱する者は猿也
山中の卯日丈人と稱する者は兔也
山中の午日三公と稱する者は馬也
山中の巳日寡人と稱する者は蛇也
又眞誥（語カ）に

寅獸は齒曰く又能く機を見る 一に寅客と云ふ 按に寅は虎振なるが故也

又金桜子に

寅曰山中に虞吏と稱するもの虎也

山中酉日將軍と稱するもの雞也

とあつて十二支の中九迄関連した動物に擬してゐるので抱朴子を画曆発祥の権与としても誤りでないかと思ふ。

巳は説文によれば「巳也四月陽氣巳出ず」とし「陰氣巳て萬物を藏し文彰をなすを見る。故に故に巳を巳となす」と蛇に充ててゐるので抱朴子以前に画曆が行われたかも知れない。

辰を龍に充てたのは明でないが説文には震や三月陽氣動き雷電振「民の農時也。物皆生じてヒに従ふ」とありて乙は□形で物の生ずる家でヒは竝ぶ會意であるので自ら龍形をなしたものであろうか

子を鼠に充てたのは全く釋明する手掛りを得ないが□大象から見ると何等かの類縁がありそうに思へる

以上によつて画曆は抱朴子にその権与を求めはしたが説文以前に十二支に十二神獸を配されてゐたかも知判然しないし子字の如く大象の象寓から類推すると亀甲文迄溯及する事も考へられるので断定を避けたが。少くとも抱朴子期に於て画曆が完成したものと云へはしないか。媳く後の考証を待つ

註 激堽出土乾符曆。漢書律曆志 参照

三、新麥糕

解 新麥の糕は家畜にも与へるが水田畑の神にも典する図の如な形にして水田ならば水口とか叱口。畑ならば感のよいキマリのある處へ挿す

図解 葉付の栗枝一尺二、三寸位にダンゴをナマキの如にクリの葉で包ミ之を小枝の主枝亜枝に藁で結び付けて。其の根元を前述の田畑に挿すのである

稲原 野口 丹生地方で見受くる 内原辺では櫛を用ふる家もある由 数は定りないが大低三個である

註 祭田婆参照

四、新麥飯



朝鮮では丑の日と限定しはてゐないが夏農家の戸毎では初めて取り入れた飯をチンポリハブ（新麥飯）と呼び地神祖先の墓前に或は田神に供典し家族のものも麥収の余穰をエンジョイする風習があるが木に結び付けるやうな事はない祭器を用ひ貧しいものは木葉に盛り石に盛り木の上に供し。終には鳥獸の來り食ふに任せる

註 今村頼氏稀封記念文集新米飯片山隆三稿参照

五、文獻

漢書律曆志に曰ふ 出申を申に於き奮軋を乙に於き明炳を丙に於き大盛を丁に於き傲更を庚に於き悉く新を卒に於き懷任を壬に於き陳癸に於く

淮南子に曰ふ大歳は甲日にあり萬物闕逢し鋒芒出むと欲し擁過未だ通せざる也

連書律曆志に曰ふ 丑日に在りては赤奮^{シタガ}して若ひ奮起して若ふ物奮て陽に順ひ而して起り順はざる無きは其の性なり赤は陽の色たり

月令輯要に用う 馬王は房星なり凡そ營悟の中及び畜養車馬の人家は均しく六月二十三日之を祭る

註 六月二十三日は天體曆では夏至と見てよい

激埴出土曆殘簡唐僖宗乾符四年（八八七年）曆八月の中段に十二相屬突厄法を於き

吉 干生人不宜与午主人云々

とあつて十二支に動物を配してゐる

此殘簡をαジャイルスは食潤干支から乾符四年と考定した

祭田婆 東陽縣志

夏至に凡そ田を治するもの多少を論ぜず 必ず酒聞を具え土穀の神を祭る祭田婆となす。草を束ね標を立て諸を田間に挿し就て之に祭る蓋し麥秋もろこし霽はらに登り稲木方に茂る。義は祈と報とを兼る矣。

角黍 風土記

仲夏の端午は橋初也。俗に重ふた午は月日又午俗重午。五月五日重五。此日夏至と同じ。節の一日先に菰葉を以て黏米をツヽミ（裏ミ）栗棗灰汁を以て煮て熟せしめ節日啖ふ一名糴一日角黍云々

六、餘言

曆が人類に必要となつて来たのは極めて古いと思はれる。恐らく人類が農耕生活を始める前採収生活の末期一定の採取時節のある事實を認め一定期に草萌し熟實に期節のある事を認識したのに初つたものであろう従て易の繫辭曰ふ如く太極有り是兩儀を生ずと言か根元を知つた。

周子の説の如く陽即ち夏至即ち冬至の兩儀が農業原始時代に通行した曆であつたかに考へられる。併し人類の發展は茲に止まらなかつた爲に間もなく兩儀四発を生ずと言ふ事實を知つた即ち春夏秋冬の變化を殖生の實相である。

斯て邵子の曰く如く陰陽交わりて天の四家主で柔剛交わりて地の四家生じ此に於て八卦成る也」に至つて八家を初中半に二分して二十四氣節となり更に陰陽交錯して十二月になり或は三分して七十二候として三百六十を一年の数と考へたるも運行は三百六十五日四分ノ一近似に遠さかるを以て日月離の術の發見と共に四季に各一日の土用を加へ尚一日の餘は梅雨を設け其の四分ノ一は置潤法に依り太極に合せこの農事の確實性を把握するに至つた。

従て詩に曰う如く七月流火八月剝棗九月授衣十月穫稻爲此春酒以介眉封の人生實狀に曆の密接なる諸相を寫すにいたつたものであらう。

註 七月流火 九月授衣 春日載陽 有鳴倉庚（又）四月萎夢 五月鳴蜩 八月其穫 十月膜穫

一之日干口（又）五月斯螽動股 六月莎難振羽 七月在野 等煩はしければ畧す。

斯様に見ると画曆は字曆よりも民間へ早く先行したのではなからうかと考へられる資料でもある。然し之を証據立つる遺跡はない只一つ一綏の望は渡鏡であらうが此稿では觸れぬ

吾國最古の遺跡は正倉院藏天平十八年（七四六年）曆と天平勝實八年（七五六年）曆で共に具註曆で干支が記入され国民生活と緊密なる役割を持つてゐいた事を示してゐる

補遺

又先に例示した乾符曆には十二直の曆註が干支と共に十二掛家と共に現はされてゐる事は曆の實用上の有力なる資料であり民俗学上貴重なる遺跡である

現今は俗に干支を以て無稽の如く解するけれど當時民家への解説として学者は親切であつた

勿論此間に此掛を悪用したものや逆用した政治家や宗教家があり新に浸入したハラモン教に刺激された事は否定出来ないが其の爲に国民生活に倚与した点を忘れてはならない。

此より光^すき吾邦では筆國の時 天降降臨の傳に八呎の鏡があるが八呎が八家を現はしてゐるか十二直に関する神獸を現はしてゐるかによつて降臨の時期竝に邦の文野を究明するに有力な資料と考へる

其は曆も鏡も民俗も共通した神秘と魅力を持つてゐるからである
本稿は一旦茲で擱筆する（癸巳立春の日誌）

易の繫辭曰ふ易に太極あり是は兩儀を生ず兩儀四家八卦を生ず

〃臨家辭に曰臨は元亨利貞八月に至りて凶あり

末寺註して本義ニ陽浸長し以て陰に逼る故に臨は十二月の掛也

堯典に曆は日月星辰を家り以て民に時を授く

淮南子に曰冬至なれば北^レ斗し繩に^{アタ}り中陰氣の極陽氣萌す。曰夏至なれば斗南し繩に中り陽氣の極陰氣萌す

橘類加工考(未定稿)

片山 隆三

昭和三〇年春

一、舌代

柑橘類の耕作は史前に遡ると思われるが未だ證するものがない。

「周官考工記」に曰ふ。橘は准(註揚子江)を踰えて北すれば枳(註からたち)となる。此れ地の氣然る也とある。

恐らく寒冷に弱い柑橘類の接木が其の弱い接穂の部分が枯死して臺木の枳が萌芽する事實を指したものと解される。されば之を以てしても古くからの耕作植物であつたと肯かれる。

従て其の加工料理の法も早く解明されてゐたのには相違ないが今傳はるもの極めて稀である。此の乏しき遺跡を年代順に誌し、其の發展の過程検討の資料の一片として手元にある文献を鈔録する。

尚ほ本稿では年代は總て西暦を用ひた。

二、文獻

歲民要術 卷十

賈思勰撰 五三四年

(註 糝^{サシ}IIダンゴ)

裴淵^{ヒエン}廣州記に曰ふ枸櫞樹は橘に似て實は柚の如く大にして倍長。味は奇酢^{サク} 皮は蜜を以て煮て糝^{サシ}となす。異物誌に曰ふ。枸櫞は橘に似て大。飯筥の如し。皮は香しからず味美ならず以て完治すべし。菖苧若漿(註訓しかねる)

(註完治は洗滌に中る)

歲民要術 卷八

作榆子醬法 榆子仁を治し一斤。橘末之を篩ひ清酒一升醬五升を合し和する事一月之を食すべし

(註 橘末之を篩とあるは明景印本なるも觀象廬本にては澍末とあり。澍末を正しく考へるも姑く橘として掲げる)

食經に曰ふ 冬日は橘蒜齋

夏月魚鮓を作る方 麴一斗塩一升八合精米三升炊ぎて飯を作り酒二合橘皮 薑半合 茱萸二十顆を箸器中に抑へ多少は此を以て率となす。

(註 之を以て見れば、今日言ふ處のママレード、竝にソースの類は、既に六世紀の初期に發達してゐる。其の操作については簡單に誌されてゐるので實踐は困難であるかも知れないが、榆醬の法は榆の多い地方でないと出来難い。恐らく榆に代へて橘皮を用ひたとも考へられる。)

農書 卷九 王勣 元朝 一三三三年

橙は橘樹に似て刺あり葉大にして形橘より円大にして皮は甚だ香厚にて皺す。其の瓢は味酸く食うに堪へず。以て瓢の酸汁を洗ひ去り細切して蜜塩に和し煎す。煎なりて之を食す。亦佳なり。

(註 年代が下るに従て橙も又加工の資料として登場し、其の製法も稍々明らかにさるゝに至った。)

群芳譜 果譜卷首 王家普著

佛手柑 香円(註枸櫞と通ず)を切り片とし滾湯を用ゆ。飲に衝る。(註暫くアタルと訓す)極めて香美なり。第二遍は更に佳なり。

(註 香円は卷三に櫞は俗円に作るとあり。又枸櫞は音巨員とある。今のレモンの使用に類すると解して粗々通じる、

洞庭の春色 立春の日五辛盤を作る。黄柑を以て酒を醸す。之を洞庭の春香と謂ふ。

(註 五辛盤は五臓に達するの氣也。謂は橘芬の辛烈を美稱する也

附録香櫞 一名枸櫞は柑橘の属嶺南閩廣江西皆之れあり。實の大なる者小瓜の如く皮橙の若くして光り澤愛すべく衣笥中に置き旬を経て猶を香し。古、五合糝を作るに用ふ北方頗る之を重ず

(註 五合糝未だ稽へず

本朝食鑑 卷二 野必大著 一六九五年

蜜柑酒 蜜柑紅熟の者を皮核及び顆外の白皮膜を去り、汁をしぼり濾して五盞砂糖半斤を拌均して甕に収蔵し五六日經て成る。主治未だ詳ならず。惟だ胸を開き食を進るのみ。

本朝食鑑 卷四

蜜柑 香菓日本紀 昔草藏王庭古草〃山橘藻塩草

柑子 古宇子と訓ず。古ハ加無子と訓ず

此の解説は集解に出てゐるが畧する

金柑 上畧。近代庖人膾菹の飾と作し果食とするに不足。或は糠塩漬糖造して以て之を藏す。

九年母 宇義未だ詳ならず暫く通俗の稱に随ふのみ

柚

釋名 柚実液多くして酢し故に汁を濾りて醋に代ゆ故に東俗呼で柚醋と號す。由須と訓す

柚未曾

柚一箇を用て青熟に拘はらず蒂上五六を以て切りて蓋子と作し、實中の辨膜を取て盃を作り好酒を用ひ味噌を和し、胡麻、胡桃、薑栗等の物を合して以て柚盃に充して緊く蓋子掩ふて炭火の上に置き徐々に之を煮る。柚皮略々焦るに至るときは味噌湧き出づ此を度となし之を食すれば味が甚だ香味にして膈（註）を開き食を推し胃を健にする也。或は味噌に柚醋を入るゝも佳しとなす。又鳥肉鶏卵に代ふるも亦佳なり。

柚邊志

或は柚壓に作る。其法略略々柚未曾に似たり。然れども柚味噌は酒を用ひて和し或は柚汁少許を加へて研して泥の如くして之を煮る。柚壓は先づ熟柚子を採りて蒂上五六分を以て切りて蓋子を作り實中の辨膜を剃り去り盃子を作り別に味噌の垂汁を用ひて糯粉或は糯を練り餅の如くせしめ胡麻仁、榧子、胡椒、川椒サンシヨウの類を合し以て柚盃に充し緊く蓋子を掩ひ。淡漿中に投じて煮熟取出し枚を木板上に攤ち片木板を以て徐々に之を壓す。日々晒乾して之を收藏す。一法に全柚實を用て蒂を去り洗ひ淨め酒醬の合汁中に投じて之を煮る事兩三時取り出し放て板上に攤ち片木板を用ひて徐々に之を壓する者前法の如し俱に本法僧家多く之を作る。

和漢三才圖繪

寺島良安 一七一二年

柚子の汁を誤て布帛に注げば藍及び茶褐色の物消多て白地と爲。

註 昔は染料多く植物質にて色素の多く。フラボン属、アントチアンなる故枸橼酸によりて分解する事を言へるならん

雞卵百珍

器土堂著 一七八二—一七八八年頃

柚干卵ユベシの仕方

（註 前掲に全じ 畧す）

甘藷百珍

珍古楼著 一七八九年—一七九七年頃

蜜柑餅子いもいも

いも 柚餅子

（註 製法は何れも前掲に類し糝（米の粉）にいもを用ゆるのみの相違のみ 畧す）

珍菓百賞

長谷川某著 一八三〇—四三年

柚餅（千代見餅とも言ふ）

砂糖漬

蜜柑

柚子

佛手柑

金柑

實用料理法

藤本藤陰著

明治中期

柚びしほ

（註 前掲に全じ。畧す）

三、結 言

以上文献を通覧して感ずる事は其の加工の單純な事であるのは柑橘類の組成分が酸含有に高い事に由来してゐるものと考へられ。従つて醗酵に依る加工が低度に止まった上、砂糖の添加味材料の移入が始まらぬ時期は其の点に依る改良發明が及ばなかつた。されば他の果物に雁行し難い障害となつて主として生菓食に止つた。

併し砂糖が侵入するに及んで漬方。質變成に幾分の進歩を見せたが尚ほ葡萄、林檎に及ばないのは青黴の繁殖し易い欠点が禍してゐてゐるものと考へられる。

されど明治末期に至つて澤村眞、高橋禎藏等の学者に依つて新たにマヽレード。ジャム。シャンペン。ソース等の製法に應用さるゝ事を傳えられた以外落柑癭果の酸利用法が農産副業と相待つて加工法の一面向を開いたため稍々前途をに光明を認むるに至つたが未だ満足すべき状態とは考へられない。

工業家の着目すべき点は多々ある。例令ば。リングのシャンペン。楓科のシトロン。胡桃のウ井スキイ等近時に入つてからでも開拓された銘醸は数数ある。之等は凡て時代嗅覺とエンヂニアの感覺に依つて生まれるのである事は前例加工變遷に見る事が出来る。

因に未定稿としたのは中萃の食饌書を見てゐない。僅に遵生八歲。食單の一編に過ぎない上何れも今手元にないのでそれすら引用する事が出来ない。特に重要と思はれるのは本心齋蔬食譜。說孚。鼎友録等を逸してゐるので他日補正する事もあるうと稽えたからで粗笨を恥ずからである。

完
一
九
五
五
・
一
・
三
日
誌

紀 州 棟札の研究

和田 喜久男

一九五五・二

(和歌山県御坊市)

建築に棟札の附随してゐるのは、人に石碑がついてある様に大建築重要な建築には勿論のこと普通でも棟に包み紙があり紙帛がある様なものである。

之は後世に知らしむる目的に出でたものに違いない。然らばそれについて十二分の後世の人がみてわかる様に記述することに第一の条件でなければならぬが、それは人の碑文を書く様なもので、書く人の人物、文章等を尊重して只今の人にでもわかり難い文章と同じように其の目的の達し得ない棟札も多い。勿論いかなる棟札でもあるにこしたことはない。従つてその棟札の所在地・種類・所属・だいしようのけいしき・年月・作者及び関係者・其の目的・経費・出来れば当時の事情など、最も必要であろうと思ふが、之れは非常にむづかしいらしい。以上の目的に出た棟札には、美術的價値を求むるのは無理で只史的資料としての一貫である筈であり、之が非常

に役にたつのであるが、從來の史家は一向に此の棟札などに心を寄せていないのは実に遺憾である。

今日棟札及び金石文等に依つて從來の歴史を書き替へなければならぬのは多々あると思ふ。今棟札についてのまとまつた研究は見ないのである。只神社、考古学の一つとしてあげられてゐる位であつて、宮地直一先生の如きも弘安六年(一一八三)の能登国加志比古神社のは最古であるなんと云はれてゐる位であるのを以ておして知られる。私の知つてゐるのも関田耕筆(伴高溪文化三年刊)^(一八〇六年)に日光大宮の棟札に天慶八年乙巳八月二日(九四五)のあるといふ。今現存するので日光二荒山中宮の永長元年(一〇九六)山城愛宕峰定寺平治元年(一一五九)は古い方である。我紀州では藤白王子の久安四年(一一四八)承久二年(一二二一〇)のは最古のものであるがほしいことには失れて今はない、それから串本本の宮仁安二年八月

(一一六七)東牟婁郡七川村丸山神社元仁元年(一二二四)というのがある筈であるが之わからぬ。丸山神社のは同地の村上重夫といふ人がその寫しを持っているといえど之はあてにならぬ。山家人の自慢の種にすぎなからうか。

棟札は大体全国的に共通で大体



(劔菱形・板長方形)等の木板に墨書き



(駒形)

されたものであるが中には



(横形)のものもある。

(これは那智山滝上の不動堂(今堂なしの)の應仁元年聖護院道與親王の不動尊を浮彫にして之に記した本尊であつて、棟札でもある特異なものである。此処になると稍美術的にも見られるものとなる。

紀州では之れ一つより知らない。又木板でなく銅板のものもあるが、紀州では未だ一枚も見あたらない。棟札を見る場合にその一々についての歴史的価値は勿論であるが、棟札として壺番面白いのはその願文である。願文即ちその目的である。それは千差万別である筈であるが面白いことには、それは相似たようなことであるのは、神仏に対する祈願というものとは大体一致しているからであろうか。其処に異なつた面白いものに左の如きものがある。それについて二三をあげて、今後御注意を願ふと共に御指教をたまはりたく御願ひする。

一、字点一二三四等

(一二二に重ねることもある 南部川須賀社の明徳

の例・例一〇参照)

之は金石文に四を忌みて^二と書すのは通例である。それを美化して斯く記すとのみ思つてゐたが、今斯様に棟札にしようされてあるのを見ると四とは見られない。其処で思ひあたつたのは、高田興清の松屋筆記にこのことが記してある。之は泊如運敝和尚の谷響集に記してあるのを引用し、さうして末や筆記に左の附記がある。

「延宝四年の伊勢暦の一首に」字を記せし

天和四年の伊勢暦に^二Y | Y | 人^一を記せるは^二字点^一

より伊字三点をおもひよせて作り出したりと見ゆ三島暦にYYと題の上下に記したるは笑ふべし」と記してゐる。故にこれも経題に記す一種の護符であつて卅字も同じ様な種類のもので釋代の思想に依つて神社の棟札にまで入り込んで来たものである事がうかがはれる。従つて之については我々凡夫の説明の出来ぬ点である。所謂卅字の様で音字共に釋せざる咒と見ねばならぬか。

一、一切曰皆善之偈(例一四九)

此の句も相當に普及してゐるが之は何を意味するのか我々素人には只經文の偈であらう位しかわからない。谷響集卷四「孔雀經説上卷ノ偈云願二足吉祥四足亦吉祥行路中吉祥回還モ亦吉祥

願。夜中吉祥一切処吉祥勿レ値ニ諸罪惡一「一切曰皆善一切病皆賢ナリ諸佛皆威徳アリ羅漢皆断レ漏以ニ斯誠実言一願ヲニ我常吉祥ナラン一」賢モ亦善ノ義ナリ故賢劫云ニ善劫ト一是也」とあるので孔雀經の偈であつて健康善所を祈る句であることが知られる「迷故三界域」を添えたのは(九)の棟札である。之は禪家の語の様に思はれる。此処には禪宗的の信仰もあつてのことであろう。内原荆木の若宮、いまは高家王子へ合祀して社はないが、永享二年(一四三二)、永祿二年(一五六一)には此の句のみを記している。

一、訶陵頻伽(十二)

聖主天中天陵頻伽声云々とあるのは、縣下では未だ此の長保寺・広幡などより知らないが、日光山のは古くより沢山用ひられている。之れも何にか經文の偈であらうと思はれるが今それは知らないが、此の伽陵頻伽といふ鳥である。最も我々になじんでゐる阿弥陀經に見えてゐる。

「復次舍利弗、彼国常有種々奇妙雜色之鳥白色鵲孔雀鸚鵡伽陵頻伽長命之鳥是諸衆鳥」「晝夜六時出和雜音其音演暢」云々

とあるのを見ると一の鳥の名であるようであり、又和歌浦東照宮の唐門の天井に天人と鳥の画があり、この鳥は伽陵頻伽であると聞いた。又私はまだ見ないが、加太の春日神社の墓股に伽陵頻伽があると聞いてゐる。しからは矢張り

鳥の名であることに間違ひはあるまいと思ふが。世事百談(山崎成美 天保十四年刊)

「源平盛衰記に稱壇は二義より芳く四十里の伊蘭林を翻し頻伽鳥は卵の中にあれど其声諸鳥に勝れたりと見えたり。

翻譯名義集などに訶陵頻伽を妙音と譯したるは義譯にて又訶陵を美妙頻伽を音声と譯する由もあれど、ともに誤りにて正しからず、おもふに唐書に訶陵国より頻伽鳥を貢すること見えたれば訶陵は国名なること明かなり。頻伽は鳥といふことの梵語なり。其の證十誦律に頻伽軍持とあるを南漸寄帰伝に鳥頭瓶と譯してかけるにておもふべし。かゝれば訶陵頻伽は訶陵国に産する鳥といふことなるをその声のうるはしければ音声のかたに譯したりと見えたり。」とある。伽陵国はいづくにあるのか、びんが鳥はどんな鳥かの説明はないので、私は此の項の学者の常として説を立てることを好きなくせであるまいかとも考へるが、あながちにそんなことも考へられないからどちらが正しいか皆さんにうかがいたい。のみならず聖主天中夫の句のどんなところから出てゐるのか、其も御指教たまはりたい。

一・急々如律令(例十二)

長法寺の棟札にはいづれも皆之を記してゐる。

塵添塏囊鈔 卷八(塏囊鈔七卷文安三年刊僧行

譽是れに天文元年(一五三二年)釋氏某比丘が增補二百一項をして二十卷として斯く名づけたもの)

「屋因ナラン諸外典ノ府ニ急々如律令ト書ハ何。私曰或云律ハ可レ行ニ定置一也令ハ法ニ依テ沙汰ヲ至ス也、大器逞成テ急ト説レ之領文故改是ハ誠ニ石レ得ニ其意一道ノ人ニ可尋哉但或説曰喻ヘハ一切ノ惡鬼邪神ハ皆邪道ヲ行スル也、是ヲ教ヘ誠メテ急々如律令可皈ニ正道一云也、律令トハ法度也ト云々然ルニ又事文類聚曰ク律令トハ雷辺のや捷鬼也ト云々然ハ事文類聚ノ意ハ一切ノ惡事凶事蹤跡ヲ不留事彼ノ律令鬼ノ如二疾去一速疾ニ退ケト意坎」とあり、谷響集 卷一

「是巫者之咒語也、演密ニ云ク且如此方言音一亦有二顚言レ亦有咒語一如二急々如律令之語一咒スレバ火レ燒咒レ瘡令停□作二咒用一不レ向顚言一 亦事文類聚云符祝之類未句ニ急々如律令ト云者人以爲如二飲レ酒之律令速ニ去テ不レ得レ滯也、一説漢朝毎二行下之書一 皆云二律令一言當シテニ亦如二律令一故符祝ニ有ニ如律令之言一 律令是雷辺捷鬼ナリ此鬼善ク走り與レ雷相疾速ナリ故云如此鬼之疾走一也」とあるので釋氏から出たのではないが矢張り咒言である。

一、異体文字として寅を刁とすること例(八)(十)

古文に異体文字を用ふことは詠むものをして判難ならしめるのみで益のないことと思ふが、金石文には好んで之を用ふる風があるのは、

金や石に彫りつけるのに劃たも省略するといふ点から發したことであらうと推測する。とりわけその多いのは干支であつて、内にも寅の「刁」 「刁」癸の「」などは著しい例である。それかと云つて癸を昭陽(セウヨウ)・寅を攝提格(セツライカク)というような殊更にむつかしい文字を用ひられてもゐる。斯うした難文字は不立文字を提唱する禪徒の間に多いことで、禪利にはどちら向いても難語迷字でうめ込んでゐるのと同じ意であらう。其の寅字を刀に用ひられてゐる。其の割合を見ると全国現存古鐘四五〇内三三〇例(私の確實にわかつてゐるもの)

寅年内寅字刁字

下野国金石	三三〇	一五	七	八
大分	二八八	一四	九	五
紀州	四八七	二三	九	一四
山城	三七〇	一五	九	六
山城	五二〇	一二	一〇	二

これで大体全国の分布はわかつかうと思う。其の使用はいつの時代はじまるかといふことは、扶桑略記の跋に十月十四日甲刁日とある由。私の史蹟集覧には跋文は書いていないので不明であるが、略記は寛治八年(一〇九四年)が終筆であるから、その頃と見て(西暦一〇九四年)である。それから

比井の経塚經の跋文にある保元三年戊戌 十月は(一一五八)、下野都留郡円満寺鉄佛建保六年

(二二一八)、三河蒲郡町大塚寺鐘寛喜二年(一二三〇)という具合に可成古くから用ひられてゐるが、時代と共に順々と増加して来て、室町期には一番多いようである。我紀州の例を見ると、保元の法華經八卷のうち七卷は干支がはつきりあり、内一卷だけが刁字を用ひてあり、他の六卷は寅字である。其の他棟札(八)(三)那智発掘經筒享祿三天塘今月日西牟婁郡二川村温川春日神社棟札享祿参口刁霜月吉日、和歌山万精院慶長十九年刁三月三日の五口を数ふるのである。この刁字は何故に寅に宛てられたかといふことは、

楓軒偶記(小宮山昌秀 文化四年刊)

「寅ヲ刁ト書事ハ刁(ドラ)ト云字ヲ假用ヒシナラント富田長洲先生曾テ云ヘリ。春海隨筆ニハ賁ノ略ナリトアリ」と見えてゐる。賁イン、セジシ脊肉を寅に宛て用いたというのである。又

世事百談(山崎成美 天保十三年刊)

「十二支の寅を刁に作ること安齋の記に寅の字の代りに日本の俗刁を用ふること、刁は火熨斗の如く器なり。軍中にて湯をわかし食物を煮る物なり。これをドラの如く打鳴にも用ゐる。ドラと云ふ心にて寅のかはりに用ふるなるべしと云説ありといえり。刁斗をドラの如く打鳴らす由は漢書李廣伝ル不撃二刁斗一晝炊二飲食一夜

撃待行ヌ名曰二刁一と見えたり。」此の如きわまりくどい解釋をしなければならぬ程に寛治・保元あたりの人は考えてゐたことであろうかどうかといふことは、今日の我々の了見からして考へられる。

此の干支の刁字については史学雑誌六ノ一と九ノ七に河内罷氏と中根彪の二人が書いてゐる由であるが、私はまだ之を見得ない。御存じの方は御指教をたまはりたくお願い申します。

一、棟札と梵字 例八・四

此の一字又は三字等の一尊の種子を記してゐるのは即ち神社での習合を示すので、其の神の本地佛、佛の種子を示してゐることは明らかなことであるが八・四の如きは左様な簡單なものではなく、八は曼荼羅であり、四は真言である。といふことは棟札に記されてゐる梵字としては、実に全国でも其の例は稀といふよりは、恐らくあるまいと云つてよいであろうと、私は思つてゐる。

四の如きは其の下の方を見ると、真言であるといふこと及び其の効能を示してゐるので何に真言といふのか、私の如き川勝氏の梵字講座位では勿論解決し得ないのである。又八の如きは大体両界曼荼羅であらうかな位に考へてゐるのは、外圍の四佛は金剛界であり、中の二尊は胎藏界の大日如来と開敷華であるから、そうは思

つてゐるが外圍四偶の四佛は充分にわからないのであるが、珍しいことは事実である。目下尋ね合ひしているので、わかり次第御知らせすることを約束して置きます。

一、其の他の例として(五)(六)(三)

(五) 古いのと同社の創立を考ふべきものであるうと此処にあげた次第であり

(三)(六) のは棟札として最もつくされてゐる例であらうと思はれる。

(三) の平家三位忠正は盛大明神などとあるは面白い例である。

准如蓮敝

京都智積院の住僧 顯密の積学で其の著二百余卷 元禄六年九月十日寂八十才。谷

響集卷二 經ノ外題以字

客間古人經籤題ノ上ニ書ニ以字一義如何 答 訓

庭事苑出二三説一議ニ定ス是非ヲ一云ク以字不成

其説有レ三 一ハ謂是嘔啊ノ二字ナリ二謂是音

字不レ譯三謂是レ梵書ノ心ノ字ナリ竝ニ指ス二題

上以字ヲ一 嘔啊者清涼疎主ノ云フ經首立ニ如

是一謂異ニ外道一故外道ノ經首ニハ皆立ニ嘔啊一

或云ニ阿優一以爲吉ナリ 阿之言ハ無ナリ優カ

之言有ナリ萬法雖多不出有無一此則断常ノ之計

ナリ今即如眞如是ハ節 妙有ナリ 对ニ破邪宗ヲ一

以彰ニ中道一一代時教不レ出ニ如是二字一高僧

傳傳ニ有譯經ノ新意ノ六例一 一ハ譯レ字譯レ

音例ノ内ニ 一ハ譯レ字不譯レ譯音謂ク阿羅尼

ナリ 二ハ譯スレ音不レ譯レ字謂佛胸ノ前卍字也

三ハ音字俱譯ス謂經律論ナリ 四ハ音字俱不レ

譯謂經題ノ以字ナリト 所謂經首ノ如聞ハ即不

在經外ノ籤題之上ニ所レ謂音字俱ニ不ルハレ譯未

タレ詳ル起ルヤ自リニ於誰一考ルニ二其二説一似

タリニ乎無キニ一レ楷 楷ルコト或ル者ハ妄指爲ニ

梵書ノ心ノ字一梵本ニ且ツ無モレ此説一尤謬

ルナラン 愚嘗ヲ過ニ興國ノ之傳法院ニ一竊ニ取テ

ニ西竺ノ貝葉ノ眞書ヲ一考ルニレ之ヲ其未譯ノ之

書ハ經ノ題スラ尚ヲ且ツ未タレ立テ何ソ有ンニ以

字之立文一 自リレ古習ヒ謬テ妄ニ爲スナラン

ニ其説一先聖ノ法門不レ在レ斯ニ焉 或問ク經首

ノ 形自リカレ何ニ而得タル □當時傭ノ書ノ

者運ブレ筆ヲ以テ覆ニ經題ヲ一固無レ疑矣

然宗匠假ラレ此ヲ以テ按スニ未学ヲ一豈知

識擬議センヤ哉今按ニ前 三説義皆

不ルレ成セ之中ニ謂ヘルハニ梵書ノ心ノ字者

甚似レ昧キニ二千梵書一梵書安ン有ヤニ心字一哉」

志賀王子神社

(一)

長一尺五寸二分 巾二寸五分 厚四分



一切日皆善一切宿皆賢諸佛皆成德

永祿六年三月十日

羅漢皆行滿以此誠実言

願主□□□□□□

時ノ宮坊主 其ノ時ノ番匠

若宮殿就御造営

本願人

勢春

眞書記

四彦右エ門

井十八二郎エ門

藤原次郎左エ門宗次

藤原十郎次郎宗久

藤原宗平衛

宗

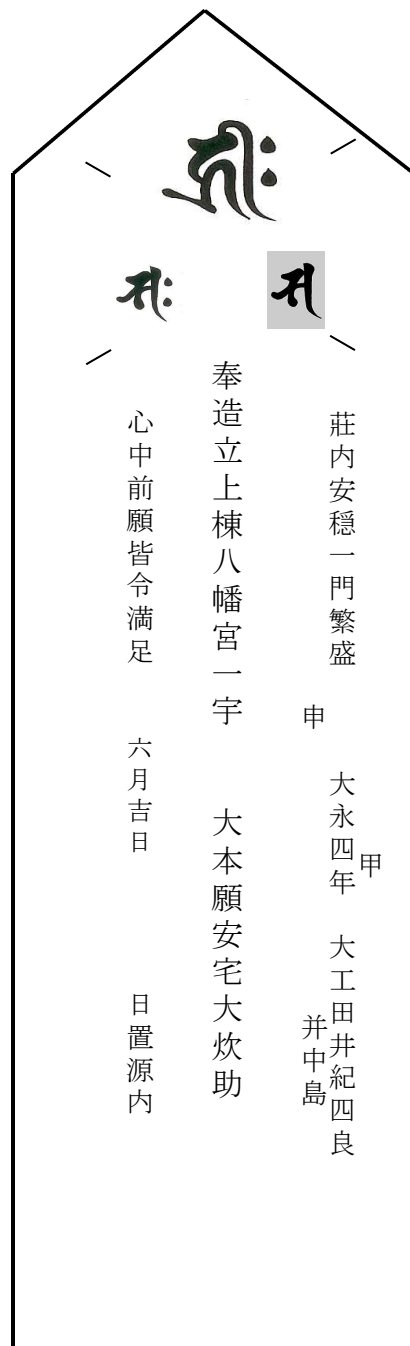
忠

西別當

(裏)

日置町安宅八幡神社
(二)

(同地上村兵吉氏報)



(裏)

東牟婁郡

色川村 色川神宮

(三) 劔先形 札 長一尺二寸三分 上部幅三寸五分

(久保義尚氏報)

大日本国紀弼無漏群熊野山邑河七村於別而者大野村
修造建立砌錢米入道者二百貫文焉 西ノ峯住持珠龍院

奉

上棟奉所鎮守勸請

御伊勢

天照大神宮熊野三山大靈權現

專祈前処安泰富貴万福天長地久御願円満諸旦那本命元辰星斗

平家三位忠正是盛大明神諸大権現大明神

天文十一 壬午霜月吉日

木下見形殿盛

吉有

□□

何事是

□意見也

時大工

孫五郎鍛冶大工左エ門次良

御宮タ

m

志九

時札成

合一貫五百文

木下見形

殿

神子

殿

大野竹原左衛門宗嗣一貫文

御宮□□どうい□□

米一斗二升

(裏)

有田郡 廣八幡宮 安永四年（重要文化財）（同社務所報）
(四)

奉

造榮紀伊国在田郡廣八幡宮寶一字

並庄内番匠中

聖衆天中

大壇那大梵天王

干時安永乙未歲六月廿三日新始

大工

棟梁伊沼六工門 藤原吉久

迦陵頻聲

同五丙申文月十二日棟上遷宮八月九日

仕手川合彌三郎 藤原武次

哀愍衆生故
我等今敬礼

大願主帝釋天王

松本百本料從国主御寄附
其他庄内並郡中勸化

社僧

權大僧都法印明王院改信

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

𑖀

刀兵不能害水火不焚漂

羅漢皆斷漏以斯誠實言源我常吉祥

一切日皆善一切宿皆賢諸佛皆威德

若末法世人 長誦此眞言

普詰世話人 湯川藤之右衛門直敝

其他氏下役人中委名前制札記

(裏)

廣八幡宮

(五)

(依 旧社旧記録)

應永廿年癸巳

紀伊国在田郡東廣庄八幡宮
若宮
武内二社
造營

二月下旬始之

(表)

(裏)

時奉行

二位公殿

五郎

助弘

僧宗長

番匠大工

時御政所

大宮殿

沙弥道宮

本殿の此の時の棟札は失はれて既にない。此札は
続風土記が広八幡宮が前田(津木村)の八幡宮より遷
したといふ時のものであらねばならぬ。此の札で斯
く考へられるや、梅本覚書が自己の所有地(今の広
八幡宮の境域)を以ってした故に覚言^詳として祀る
とある。此の時の大願主であるから一筆願主覚言と

あるべき筈であるまいか。

安^(二七二一八一年)

永の記録に「覚言^詳拜殿ノ北脇二在、是

は八幡宮之境内地主たるよし。覚言は梅本氏にして
中野村の住人也。宝徳^(二四四九五四一年)・享徳之比の人
也。地主を祭る事甚不審、追而可考」とあるのは大いに考べき必
要があるのではなからうか。

蓮專寺旧記に「正嘉三年八月有田広八幡宮焼失とある」、又天神^神は今の八幡宮の側にありしを此下に争論あり、山本に遷しのは應永十八年である。此の時に八幡宮がなければ、之を他へ移さす様なことはすまい。

此の棟札は末社のもので本社のものでないが、奉行政所よりも大願主は末社でもより重要な人物でなければならぬ。それを記さないのは又不審である。(故に広八幡宮の社史の上に於いて続風土記の記述は考へ直さねばならぬといふことである意)

広八幡宮

(六)

永禄拾貳年己巳八月十二日始

子甚次郎十二才

時建立^神務池永宏介四十九才

南

紀^子在田郡東廣庄八幡宮御上□両大工

奉加貳拾石大夫御快傳法印五十才

北

同霜月二日午前棟上御祝言上遷宮根来寺蓮花谷大介院内

サカイ

番匠童子

仕手人数新兵衛奈良屋源^工門新左^工門与四郎孫八与六善郎新次郎

亀

方

假名

檜皮大工南都之住人藤原朝臣家次宿所河内善根寺 頭三郎

假名

檜皮大工攝津国四天王寺之住人藤原朝臣宗廣 源右衛門

方

小工 番匠童事 太楠

仕手人数善左^工門又左^工門影左^工門孫太郎源六郎源四郎源三郎

廿四才

(同裏)

御調作領四拾貫大工請取

熊野檜皮百駄荷数貳百世荷槓八十荷田那邊ヨリ出也

湯川殿ヨリ兩大工ト依致仰付如此候但村在所ハ不定置事候在田日高

時奉行 泷僧藥師院實秀廿五才 惣奉行世順世五才 宮仕助太夫

裏山檜皮五十束分ハ皆濱湊崎山藤次郎廿五才兩度以辛勞出之

二郡勸進本願 泷僧弁才天院 永禄拾貳年己巳十月三日同實榮

實榮

廣八幡宮

(七)

紀伊国在田郡東廣庄八幡宮武内一 泷造栄

畠山殿久反 泷務觀性

良心十穀 公文春国

番匠

藤原臣右兵衛助
大工
文龜貳年壬戌十一月上旬
宗久
筆者供僧珎秀

造宮。藤原朝。臣脱力
慶長・天文・安永・札二斯夕記入

有田郡鳥屋城村小川 白岩丹生神社（同社務所報）
(八)

紀伊国在田郡岩垣莊白岩大明神願主刁千代丸

別當快泉
奉行瑞光

大工右衛門 藤原宗次
明應五年丙辰三月十六日

白岩造営之事自天王寺工 詔廿人明應五年正月廿三日下着翌日廿四日作事之三衣瑞垣鳥居閏二月
廿三日悉造営訖別當江尻越中息中快泉春秋 五十 歲棟上同月三月十六日申子午時 六

棟札筆者畠山阿波入道伴雲軒

此棟札原札は虫食い甚だしく文字不明なるも、幸に明和七年^(一七七〇年)其の原形のまゝ写しあり、今も原札を保存しあり。刁千代は寅千代・上部曼荼羅は明らかでないが、私の想定によつて斯く宗した。内部金剛界四佛内に胎藏界大日開敷華の二佛を以てした金胎両部曼荼羅か。

海草郡大崎町黒田八幡神

昭和十九年九月指定

(重要文化財) 本殿

三間 流造 檜皮葺 符棟札一枚
棟札 二尺七寸五分 幅四寸五分 右端少し切れたり

(九)

南無 妙法 蓮華 經

一切曰皆善 一切宿皆賢

羅漢皆行滿 諸佛皆威德

丸山村 大工 小路四郎
黒田村

佛此成実言 願我皆吉祥 永祿戊戌六月吉日本願三村一所司等敬白

迷故三界城 悟故十方空
本来無東西 何所有東西

丁村大工 保田三郎太郎
小工 三郎太夫

(裏)

ボロ一字金輪

阿弥陀三尊

釘始 六月十一日 假殿御立 六月 七日

外遷宮六月 九日 柱立 六月廿七日

上南部 須賀神

(+)

造栄

南部御庄祇園御靈宮二

明徳 一二年 癸酉才

十一月廿一日

太郎丸定宗 目藤原宗貞

領主愛洲兵部大輔源能俊 両公文

阿闍梨 善祐 権少僧都慶祐

出羽国

勸進僧東福寺門葉長貞上座

栗田口住覆大工 正近 貞永 三郎 太夫

(癸ミツノト)

名所図会所載

榮字図会は營の誤りと見ているらしいが、広八幡の天文・慶長・明應あたりのものに殆んど書しあり、広ばかりでなく、時々用いられている。造りさかえるの意であらう。

高城村 天寶神社

(十一)

(宮司 佐々木初太郎氏報)



ふて

十輪寺

本願神代總右エ門年六十二

ひらの甚介□□榮兵へ

拾貳月 敬

瀧六介高□



奉造立天寶大明神紀

日高郡南刀河高之内 于時 永祿四年

未

師 摩利天

たふ□□吉田

大公七郎左エ門

ひい本□□□

同大公六右エ門

同□方□□同百將方より上井川き太夫

十六日 白

アー ン ク 胎 大 日
マ エ | タ ラ ー ク 虚 空 蔵

神代―神主代？
御百將は御百姓？

各村の代表者を記した者
南ア河高―南部河？

此の村名に今日の大字市井川・土居は見えぬので考えると、当時この二村で上井川と称したものであるまいか。土居は即ち龍神氏、鳶巢山に居城して下屋敷ありしより土居の名出来たと云えば、この頃は土居はなかったようである。慶長の検地の折ですら今の高城・清川両村を南部川村というので、高千二拾石五斗九升四合としてある。いささかこの棟札の記述からみると認識が不足しているようである。

海草郡下津町浜中 長保寺

(十二)

(瑞樹 英海氏報)

御奉行

内藤七郎右卫門尉藤原利忠
原田権六 藤原乗春

聖主天中天 紀州大守從二位行権大納言源朝臣頼宣

迦陵頻伽聲

卍

奉再營釋迦堂一字国家安全所

御大工

中村新平 平久光
中村藤七 平宗広

哀愍衆生者

我等今敬礼

御導師和歌雲蓋院権僧正大和尚位憲

寛文七丁未
十一月吉日

(裏)

々如律令

橘類加工史考(補遺)

片山 隆三

昭和三〇年春

前月例會で述べた「柑橘加工史考」に引用した、野必大著「本朝食鑑」に引用している「藻塩草」は月村齋の著であろうと質疑された和田喜久男氏に答えていたが、爲念に國會図書館の田川司書官に調べて取頂いた處、「藻塩草」には異本とか類本がないようである。只同名の書冊はあるけれども、一は上原熊次郎の蝦夷の方言集であり、他は横濱で発行した書冊で、何れも元禄以後の著作であるので、野必大の引用書でない事明らかである。

右の事情であるから、左に田川司書官の調査全文を掲げて大方の参考に資する。

藻塩草 佐原入郎先生の増訂国書解題には

○藻塩草 二十卷 僧宗碩

事物を、天象・時節・地儀・山類・水類・居所・国世界・草部・木部・鳥類・獸類・魚類・氣形・人倫並異名・人事雜物並調度・衣類・食物・言詞等の二十綱に分ちて類筆し、各目はいろは順に排してせつめいしたるものなり。寛文九年己酉(二三二九)二十卷十冊に版行す。

◎宗碩の傳は「勅撰名所和歌抄」の下にあり

尚之と同名或は類似のものに次の如き記事があります。

藻塩草 一卷 上原熊次郎

蝦夷の方言を書き集めたるものなり。天地・人物・支體・世事・口鼻・耳目・器財・鳥獸・草木・品目・助辞・熟語等の十一條に分類して各方言を列挙せり。末に切口上・問答語・及び和歌・浄瑠璃等を蝦夷語に譯せしものを挙げたり。寛政四年壬午(二四五二)の自跋、文化元年甲子(二四六四)白虹齋といふものの序等あり。小冊子に刊行す。

◎上原熊次郎は通辞たり、此書は支配役阿部長三郎といふものと合著したるものなり。

もしほふくろ(藻塩袋) 五卷 菊岡沾涼

古来初夏の俳諧を抄集して詳・註釈を加へたるものなり。自序等もあれど年月を記さず。

◎菊岡沾涼の傳は「江戸砂子」の下に出たり。

以上は増訂国書解題の記事です。此の中、文庫にあるのは菊池沾涼の藻塩袋、江戸寛保三刊五卷五冊のみです。尚文庫本にもしほくさ浄珠院嵐子 天保七年刊一冊があります。

釈宗碩(月村齋)の藻塩草は

本刊

寛文九年刊 二〇卷 一〇冊 〔上野図書館(二部カ三部) 静嘉堂文庫〕

寛永刊 二〇卷 一〇冊 〔 欠本更に一部〕

古活字板(刊年不詳) 二〇卷 一〇冊 (尊経閣文庫(一部)・内閣文庫(三部))

和歌藻しほ草 月村齋宗碩、室松岩雄校訂、明治四四年刊菊判 一冊

寫本には

天文十一・十二年寫 二〇卷 九冊 (尊経閣文庫)

年次不詳 二〇卷 一〇冊 ()

〃 二〇卷 二〇冊 (内閣文庫)

〃 三冊 (大阪府立図書館)

又同名の異書には

藻塩草 高橋正澄著 寫二冊 成良良讓(文)

細川花紅著(明治三七)・藤堂新七郎撰(天保七)等があります。文庫に藏本がないので未だ見てお

りませんが、一応は辞書の部にでも入れるべきものかと思ひます。尚静嘉堂・内閣皆和歌の部に

入れてありますから歌書として取扱つて来たものと云へます。又事実そうなのでありましよう。

日本文学大辞典には辞書の條に室町時代の「藻塩草」の詞の部は歌語の辞書と云ふべきであり

とのみ出て居ります。他に何の説明もありません(尤も之は昭和八年第一版で改訂版は未見)。

次に「作者が変わつて内容も変わった類本があるか」「元禄前期に世に行はれた種類」について

は、刊本として前期のものが知られるのみで、詳細のことはわかりません。類書の如きものとし

ては、

匠材集 連歌詞の辞書

和歌色葉集

僧上覚撰

・順徳院の八雲御抄

歌林撰（松永貞徳）

・呉竹集

（寛文十三年）

・和歌八重垣

（有賀長伯元禄十三刊）

・和訓栞（谷川士情）

・雅言集覚（石川雅望）等が挙げられるのではあります

いか。

地盤の變動

― 日高郡に於ける地盤隆起に関する一考察 ―

野田 三郎

目

次

一、総論

(Ⅰ) 紀伊半島の地勢上の位置

(イ) 南穹山系外帯であること
(ロ) 南穹外帯の特質

(Ⅱ) 紀伊半島の特質

(イ) 地質構造
(ロ) 地形

(Ⅲ) 日高郡の自然界

(イ) 地貌
(ロ) 地質
(ハ) 地形

二、日高郡に於ける地盤隆起の一考察

(Ⅰ) 紀西沿岸の地盤の變動

(Ⅱ) 本郡に於ける地盤變動の證

(イ) 海蝕

(ロ) 甌穴

三、結語

一、総論

(I)

(イ)

紀伊半島の地勢上の位置

南弯山系の外帯であること

アジアの東、太平洋沿岸には列島が弧状をなして連なっている。北の千島弧、南の琉球弧の中央に九州・四国・本州・北海道を主とする本州弧がある。これらを東亜の綵列島と称している。

本州弧の地勢をみると、太平洋側の隆起帯（北海道西部山地・奥羽・飛彈・中国・筑紫の諸山脈）とが並行しているのは是を内帯と外帯とに区別する。

九州・四国・近畿に並行構造をもつ内外両帯の山系は飛彈・赤石に來つて漸次北轉し高度を増すに拘らず、その東側では日本海側では姫川の谷・青木湖・木崎湖・松本平・諏訪平・釜無川・甲府盆地・富士川を連ねる低帯があり、これを隔てて妙高・黒姫・八カ嶽・富士の諸火山の列との間を截断している。

更にその東に直江津・荒川・千曲川・酒匂川から相模湾に通ずる一線があつてナウマンが所謂 *fossa magna* と呼んだ大構造線がある。換言すると能登・佐渡の中間である能佐海溝から相模・駿河両湾の駿豆海溝に續く、巾五、六〇キロ・長さ二五〇キロの大地溝帯であつて、第三紀時代にはおそらく海底に没していたと思われる。

(ロ)

る。この海峡は第三紀層に埋められ、その上に噴出した富士山脈の諸火山によつて充たされ伊豆半島も生成した。

これより北上すると内外帯の両山系はその面目を一新するので、この地溝帯を界にして本州弧を南弯及び北弯に区分する。この所謂、糸魚川・静岡構造線を以て北日本（東北日本）と南日本（南西日本）とに区分することは地形的にも地帯構造上からも正しのである。（第一図）

南弯外帯の特質

南弯の内外二帯

は元來獨立したものであったが、中生代末内帯は外方に移動し、之に伴つて外帯が隆起したために密着したもので、構造上、外帯は南シナの支那山系に、内帯は北支那の崑崙山系に属する。従つて両者の地勢・地質・構造は著しく異なり、内帯は一般に地塊性で多くは火成岩より成り、多数の活・休火山をもつて對して外帯は



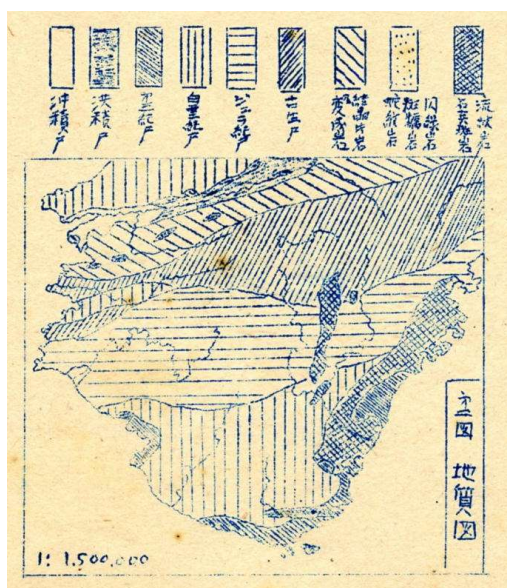
①複雑な褶曲山系で主として水成岩より成り、平行構造が著しく、全く近代の火山を欠いている。

この複雑な褶曲に伴う隆起の後、一旦烈し

く削剥し去られて波状の順平原面となり、第二の隆起で今日の大勢を形成したものである。即ち外帯の山地は凡て侵蝕地域である。

②この準平原面は中央線乃至臼杵・八代線附近を除く外は余り断層構造を伴わず、一部は後に沈降している。

③地質構造は三波川の結晶片岩、御荷鉾系の輝岩、角閃岩類 秩父系の砂岩、粘板岩 石灰岩類 三疊紀及び侏羅紀及び白堊紀の砂石、粘板岩、石灰岩等種々の成層岩から成り、帯のように東西に長くのびて結晶片岩、輝岩角閃岩類 古生層 中生層の順に北から南へ平行に縞状構造をもって配列している。(第二図)



(II)

紀伊半島の特質

前節に述べた特質はその殆どが紀伊半島の特質に当てはまる。半島と称すべきは紀ノ川・橿田川を結ぶ所謂中央線の通過線以南である。

(1) 地質構造

西に四国九州、東に赤石山脈の層序と符合して整然たる構造を有する。

南穹山系の最も基底をなす結晶片岩系は紀伊半島では飯盛山脈(含銅鉍)をつくり、紀ノ川縦谷の南岸に沿うて走り、名倉の対岸附近に及ぶが、比較的狭小な地域を占めるにすぎぬ。

これより南へ古生層・中生層・第三紀層が順次現われ、石英班岩、閃緑岩・石英粗面岩等の新旧の火成岩が之を貫いている。

④僅かの異例は紀伊半島では大峰附近の石英班石と南部の石英粗面岩である。

⑤南岸内帯の移動により一帯に大きな傾斜地塊の性質を有し、一部には推し覆せ構造(四国山脈)や、北側から南に向って古い層が若い地層の上に迂り上がった所もある。(由良の二疊紀石灰岩層)

⑥一般に地形学的断層構造をみることでできない。

⑦南穹山系の島弧に対して直角の方向を有する断層線は甚だ少数である。

⑧断層網の発達も甚だ不良である。

(ロ)

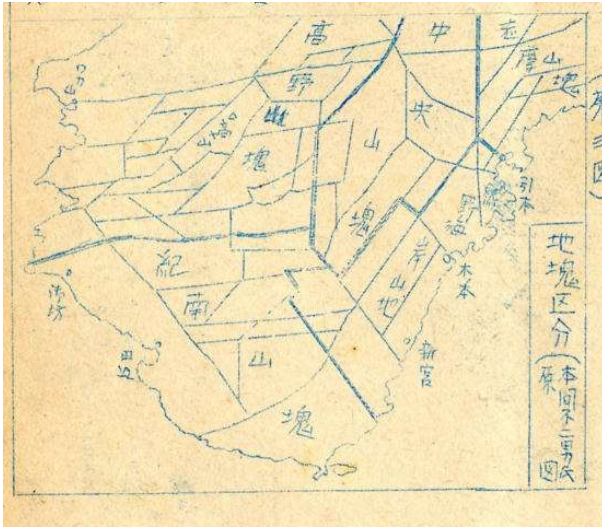
地形

紀ノ川大断層の外には顕著な断層は見られない。十津川・北山川・熊野川には壯大な横谷があるが、紀ノ川・有田川・日高川等は縦谷河川である。これらのために半島の山地は整然たる連嶺をなさず、中央部では却って數ヶの高山脈が半島の構造軸に直行して南北の方向に走っている。

半島南部では果無山（中生層）・大塔峯（第三紀層）を中心として、四方に放射する侵蝕谷によって數條の放射状に配列する山脈に分たれる（第三図）。

半島

全体が一大隆起塊で準平原の遺物と見られる。夷面を所々の山頂に存する。熊の川・日高川



(Ⅲ)

(イ) 日高郡の自然界

地貌

有田川・紀ノ川等何れも簷入曲流をなしている。海岸附近は沈降（リアス式）と隆起（海蝕洞）両形式を併存する。

郡内の山地を大覷すると何れも丸みをおびたおだやかな姿をしている。山形は元来、侵蝕と風化の割合で様々に変わるし、又それらの力に対する岩石の性質にも関係をもつ。

山が低くなり侵蝕力が幾分衰えてくると風化の方がずっと優勢になり、岩石の分解で出来た土の層が厚くなり、みね（山頂・山嶺）はおだやかなドーム形に、おね（山稜・峯をつなぐ山の背）の形も丸みを増しはじめ、つるね（山脚・山嘴：谷底に回って降りるスパーク）は丸く太った形でゆるやかに延びるものである。

このような従順山形は、壯年期の山形が鋸歯状をなすのに対して中年期の山形と称すべきであらう。

(ロ)

地質

郡内の地質は南穹外帯の特徴である縞状構造を示す一部に属するために比較的單純である。郡内の殆どはジュラ系（中生層）より成り、ほゞ日ノ岬を点に東西に引いた線以北は日高川統上部砂岩及び頁岩が広く分布し、所々に赤色及

び灰色の硅板岩を帶狀に狭く東西方向にはさんでいる。

塩屋村附近を点とするほど東—西線印南統砂岩及び頁岩が同じく帶狀に延びて、前記日高統上部との間に下部頁岩をはさんでいる。

印南統以南は古第三系砂岩頁岩及び蛮岩に移行し、由良湾より水越峠に細く鳥巢統砂岩及び頁岩を挟んで、以北に二疊紀砂岩及び粘板岩を載せ、特に白崎附近では紡錘虫を含む石灰岩層を露しているのは奇である。

即ち前に述べた如く外帯は内帯の衝動で緊圧されて地層は逆轉し、二疊紀石灰岩層が中生層の上に推し上がって覆瓦構造を示すに至ったものである。

(ハ)

地形

半島の沿岸を通覧すると、隆起と沈降の両形式が複雑に入り混じっている。隆起の中に沈降も認められ短い入り江を作っている。

和歌ノ浦から日ノ岬に至る間は、紀伊水道の陥落で紀伊山地と四国山地とが切断された部分に当たるので、著しい沈降形式を示し、溺れ谷が出来たり（和歌浦湾・下津湾・湯浅湾・由良湾）大小の島々が分離されて沿岸に碁布している。

従って海蝕崖の著しいものなく、沈降が最近に至るまで継続していることがわかる。

日ノ岬以南は急に隆起海岸の形式を示し、木

ノ本まで及ぶが、この隆起の間に沈降も行われ段丘の一部分は田辺で消滅している。

以上の諸点からみて半島の地盤運動は次の如き変遷を経来つたものと考えられる。即ち

古生代に本州弧内帯の側圧によって褶曲性構造をもつ第一次隆起があり、その後三疊紀まで静穏な状態が續いて半島内陸は準平原化された。

この時代に、第一次山地の構造に支配せられて、日高川の如き河川の曲流蛇行の流路は定まった。

ジュラ紀より白堊紀の間に海浸を見、後に現われる狭い海岸平野が建設された。

中生代末から第二次の激しい大隆起運動を起し、南部では數十米上昇したと考えられる。この隆起は地塊運動であつて、南へ緩斜する傾動地塊運動である。こうして今日ある半島の原形が出来上がった。

隆起に伴つて回春性侵蝕が進み、地貌は満壯年期に達する。先に位置を決定された日高川等の流路は着々と下刻作用を續けこゝに峻山幽谷を形成し、河川は蛇行しながら峽流を生じた。

(Anecedent River)

その後も小沈降あり、洪積世以降も小規模の隆起沈降は相續いて行われたと見られる。

郡内の山地を一望すると、なでつけ形の從順地形と共に著しく注目せられるのは、平頂な峯

の多數存在することである。

高地が侵蝕の結果、殆ど隆起がなくなり、平原に近くなつたものを準平原というが、かゝる平裏面は概ね半島の軸心、大台ヶ原方面より本郡海岸地方へ傾いた直線を以て連ねることが出来るようである。（この研究の詳細は後日発表の予定）

大台ヶ原はその名にも察せられる如く、紀伊山地内部の高原性波状面の遺物とみられるのであつて、高野山堂塔のある平坦面亦然りである。

日高川や有田川などの複雑な蛇行谷は準平原時代にその面上に彫刻せられた蛇行性曲流が、そのまゝ嵌み入せられたのである。

日高川流域に発達せる河岸段丘は、日高平野について本郡における重要な農産地帯である。下流野口村附近では三段の明瞭な段丘が認められ、上流の支流丹生ノ川に於いても生活の半ばを段丘に依存している。（現在認められるものの外に、相当高所にその存在を疑わせるものがある。詳細は後日にゆづる）

日高川河口の土砂堆積と沿岸洲の発達との関係は、半島沿岸の諸河川に相通ずるところのものであるが、日高河口におけるそれは規模の大きさと、変位のはげしさに於いて有数と考える。

（この詳細は別途発表の予定）

（I）

紀西沿岸の地盤の変動

二、日高郡に於ける地盤隆起の一考察

前章に述べた如く、半島沿岸を通覧して最も顕著に見られることは、沈降と隆起の両形式が併存することである。

半島の中核より南端串本に至る線を軸心として東西にリング運動をくり返したりとも思えるが確証を得ない。

高所にある準平原面が隆起した原因は紀ノ川―櫛田川以北では断層運動が主であり、以南の半島部では、撓曲運動が主であるとみるならば、曾って準平原状態から撓曲運動で隆起し、その後、開析をうけて今日に至つたものといえる。

併し海岸平野の存在する部分と、然らざる陟岸とが交錯せる点より考えれば大地塊運動以後、長い平靜な時期をもつて、この間侵蝕が進み開析せられたものでなく、間歇的に何回も隆起が行われていなければならぬ。そのためには山麓階の存在を断定しなければならぬが、未だ確報をきかない。

地質構造の示す縞状構造よりして、東西に互る數列の軸に沿うて褶曲を営みつつあるとするならば、北方よりする内弯の側圧乃至は南方海底部の重力変化を考慮しなければならぬ。

以上の重大な問題の解明は暫く今後の研究に

俟つとして、以下現に沿岸各地で危惧されてある地盤の変動について述べる。

沿岸各地に侵入した海潮、相対的に地盤の沈降と見られる量は第四図の如くである。器械を用いない測量であるため信用度はおちるが本郡沿岸では大体八〇九〇と知られる。

地盤の変動を調査する一方法として潮位の昇降を考へることが出来る。日平均潮位を一ヶ年平均すると、気象潮や海水要素による水嵩変化は略相殺されて大体の平均潮位を知ることが出来る。

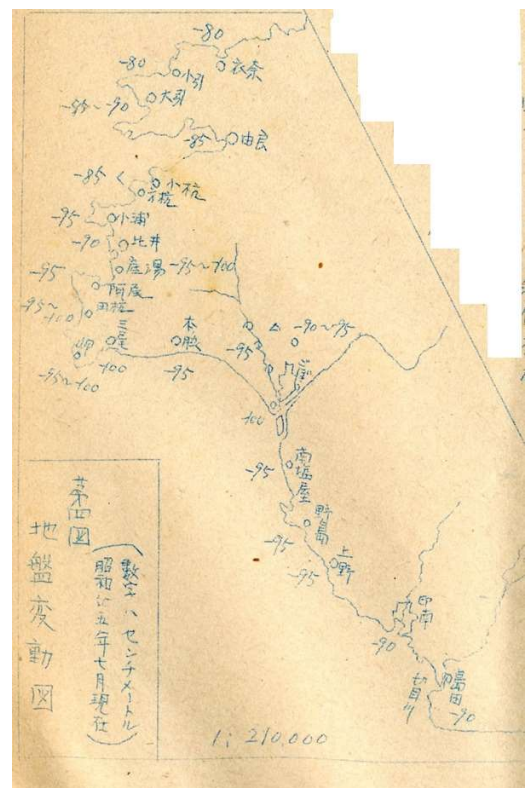
下津港及び浦神に於ける昭和十四年より廿四年に至る年平均潮位は第一表第五図の通りである。第五図には下津に於ける計測値の知れる限りを表現した。(註一)その値は第二表の通りである。

(第一表)

昭和	下津	浦神	比較差
14	167	168	-1
15	161	168	-7
16	169	169	0
17	167	167	0
22	178	146	+32
23	189	161	+27
24	193	158	+35

即ち下津における潮位変化を相対的に陸地隆起量に換えてみると、漸次隆起を続けてより沈降に遷移して三年後に大地震が起つてたことになる。

浦神は記録を欠くため同じ変化のありしや否やは判然しないが、下津に比較して大地震後三



(第二表)

昭和	下津に於ける年平均潮位
2	169.3
3	171.9
4	169.3
5	170.1
6	170.1
7	169.1
8	171.3
9	169.3
10	170.1
11	169.9
12	168.4
13	165.5
14	169.1
15	160.9
16	167.2
17	166.9
18	158.1
19	163.4
20	2
21	164.1
22	177.5
23	187.3
24	172.6

(気圧の影響を加減したもの)
至る所に五三

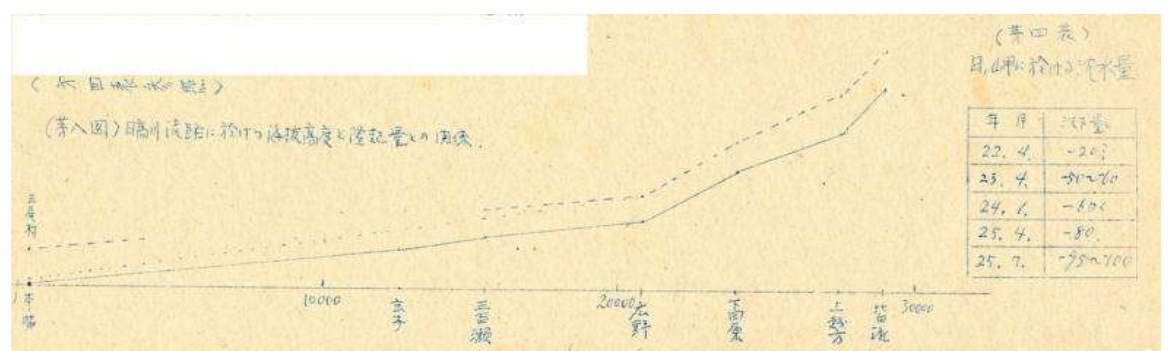
二糶の差(増隆起量)を示した。この差は廿三年―二七糶、廿四年―三五糶と開いたまゝになっているが、これは今後の変化に注目する必要がある。

佐々博士の説に従すれば、(註2)大地震前は、半島の中頃以南は南下りに年々傾動を続け(串本では安政地震より昭和廿一年地震に至る間に五三糶)地震後にはね上がっている。(串本で五糶)ことは室戸岬の尖端と共に、安政・宝永・慶長

の何れにも見られる。

南部附近は割合地表に近い所まで重い物質が盛り上がっている所でも、し重力が極く僅かつつの地下の構造異変で年と共に変化するとしたら、例えば今度の南海大地震の震源で地下深いところのsima層が年々數メートルづつ上の軽いsial層と入れ変わっていったとしたら、紀伊半島中部以南の南下りの傾動は、地殻の曲りは全然なくても海水面の変動だけで説明出来る。

南端地震やこ



の附近の深層地震の発震機構から想像して、この附近地下深い所の地層を東南方からどんくおしつけてくるような力が働きつづけているようである。これらのことから半島南部では益々重力が大きくなるような方向へ地殻内の変動が進行しているようである。

熊谷教授の重力測定によると(註三)新宮では三五年前(大正四・松山基範博士)より一〇〇ミリガール大きくなり、和歌山では逆に三八年前(明治四五・長岡半太郎博士)より約一〇ミリガール小さくなっている。これを正しいとすれば地下の重い物質は東南方と、和歌山辺の地下その他からも多少づつ震源に集まったと考えられる。

佐々博士は更に、大地震前の変動は北方から南方へだらりと傾斜して、どこともはつきりした地殻の折曲りらしいものが見えないのは、或は地殻上層には何らの曲り変動はなく、唯地殻深層の変動による海水面の昇降によって、海水面に比較して北方は隆起し南方は地盤が沈下したかも知れない。或は地殻の曲り変動と海水面の昇降の両者寄合わせかもしれない。かく考えると地殻上層が震源で下層の斜の盛上りのために破壊して大地震となり、その結果紀伊半島南端の地殻上層が折れ曲がってはね上がったものだろう。重力変化は急激に起こるものでないから、大地震時の変動には重力そのものの变化

(II)

本郡における地盤隆起の證

は恐らく關係なし、と述べられた。
以上の所論によつて分かる通り、今日は大地震と大地震との間の平靜期——南部では徐々の沈下時期——に入つたわけである。がそうでない地域もある。
日高沿岸では未だ沈下回復の兆候はないのみならず、所によつては反つて増加の傾向の部分もある。たしかなことは、大地震後のように著しい沈下ではなくなつて、稍小康を保っていることである。近く第二次調査を進める予定である。

水準測量の報告によれば、「紀伊半島大きな二つの線を軸として運動している。その一つは中央構造線であり、他の一つは紀伊半島南部で串本の北にある」と結論していること佐々博士の所論と同軌である。

史上に南嶺大地震による地盤の変動を尋ねると、昭和廿一年（一九四六）・安政元年（一八五四）・宝永四年（一七〇七）・慶長九年（一六〇四）：烈震記録は天武朝に遡りうる。

地盤の変動を災害の面のみより見んとする時は調査精級を要し、然も実証甚だ困難なるは周知の所であるが、尚且つわれわれは不測の災害に当面せねばならない。

地盤の変動の起こりは地球の誕生と共にある

に拘わらず、われわれは浜の眞砂につく苔の一葉のなびきにも似た小変動におびえている。かゝる地変のもたらす災害を極力防ぐためには迂遠に似るが、遠く地質時代に戻つて知りうる範圍の證據固めをしてかゝらねばならない。

その立論のためには地質時代、人類史時代を通じて地形学的に立証しうるものは數多くある。それらの探査研究は後日にゆづつて、ここにはわれわれの近づきうる限りの地質的から眺め直して、有史前の原形を掴みだしてみたいと思う。

比較的穏やかな時代であつた中生代は、著しい海侵を以て終わつたが、新生代に入ると急に海退をはじめた。世界的に大造山運動が盛んとなり、大褶曲山脈ができたり、火山は活潑に活動を開始した。半島の大地塊運はこの時に起こされたものと考えられる。

爾後侵蝕は著るしく進んで、今日見られる地形変化の原形を作つたが、半島に於ける地盤の運動はしばしばくり返され、洪積世以後にも隆起・沈降は相続いた。

幾度くり返されたかは知るよしもないが、その最後の隆起が、続いて起る沖積世の沈降よりも大であつたために、この隆起は前に侵蝕された痕跡を停めることが出来た。

これを地質的最近代の、本郡地盤の原形とする。

地表に働きかけた彫刻の跡はいくつか見られ

(イ)

海蝕

るが、その一つを半島通有の海蝕の跡と、本郡に著しい甌穴 (pot hole) とを採上げてみた。

(a) 和田村元之脇

日高川川口から松原・和田の長汀を西すると、字元之脇で砂浜は俄然岩石海岸に変貌する。望洋樓の眞下に隆起した海蝕台には、既に波蝕を被り得ない水面上に露出した大甌穴が數ヶある。海水基準面上 一・五〇〜一・六〇米。内大なるもの二つは第三表の通りである。

では波浪の侵入口を破壊しながら、その下部は尚水面下にあつて下刻作用を続けている。

このような現在進行中のものでは S・L 下二・九〇米に及び二ヶの甌穴が正に連結せんとしているものもある。(第六図)

最も形の整つた美しいもの

のは、長径一・三〇米、短径一・〇〇米、深さ二・二〇米である。現在水平に大洞窟を建設中のものは轟々と岩塊を震わせているが、危険で近よれない。

(b) 三尾村の海蝕洞

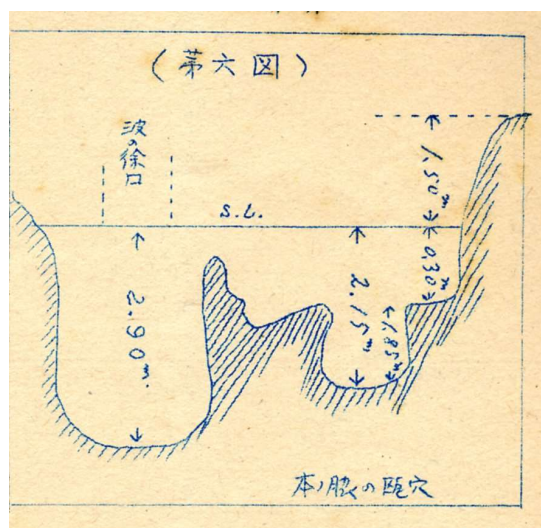
通称久米穴は洞口底部まで、基準面上六・

第三表 (cm)			
	長径	短径	深さ
a	100	50	100
b	450	430	180



第七図

一五米、洞口は巾八・〇米高さ一〇米をこえ、奥行三・四米に及ぶ。洞内天井の波の反撃作用の跡は勝浦や木ノ本附近のものには及ばないが郡内第一のものである(第七図)



之に隣接して岬端を貫通するものあり「通風洞」と仮称した。これは基準面上に二段の構造を有し、上部の旧期海蝕洞と下部の新期のものと間に狭い海蝕台をもっている。上部のものは海蝕台まで四・八〇米、下部のものは三・五〇米に及び、現在尚深さと奥行を増しつつある。こゝでは隆起の間に、一旦休止期があつたことがうかづえる。

(c) 比井崎村津久野

津久野浦の西端、兜崎には刻んだ穿孔虫の蝕痕に介在して甌穴を発見する。こゝにも小面積の海蝕台があるが、通風洞と大差なきものと認めた。

(v) 甌穴 Pot Pole

日高川沿岸に見られる甌穴の調査は、その上端部までを平水時の河床面より計測した。従つて小さい數字は問題としない方が正しい。日高川は河口より川中村広野に至る二六軒間には露岩極めて少く、甌穴は見られない。

(a) 川中村広野(H・五〇米)

隆起部では小形のもの多く、高は四〜五米に及ぶ。整形せるものでは長径二七^セ、短径一八^セ、深さ一三^セ、現在進行形のものの中で大なるもの長径三・三五米、深さ一・四〇米がある。

(b) 川上村下田原(H・八五米)

河床の基岩より突兀として群立する岩石の面上に多数彫刻されてある。この地域は日高川の水を螳螂峠(二三四米)を貫いて高津尾側に落としているために、平素は極く微量の水を通すに過ぎない。

こゝでの甌穴の高さ五・五一米、最大のものは長径一・五〇米、深さ一・五五米を穿ち、下田原部落の段丘面上の耕地が大増水時に浸されることがあつても、河中の露岩は浸るこ

とはない。

(c) 川上村上越方(H・一一五米)

甌穴の位置は六・〇六^ミ〜六・六八^ミの間にあり、最も美しい物は直径五九^ミ、短径三八・五^ミ、深さ二四・五^ミ。

この河中の一岩塊を地人「丸島」と呼び、附近の河原を含めて「勘定河原」とぶ。古くより流筏夫ら、この丸島に上がつて彼らの賃金分けの勘定するを例としたによると。丸島の甌穴はこゝに降り立った天狗の足跡と傳える。その所用の程は未だ聞かず。

(d) 川上村川原河(H・一二〇米)

川上橋の下流約一軒に互左岸寄りに無数に群在する大甌穴群である。甚だ美観を呈し、古来「牡丹岩」と愛称している。河床面上二・六〇^ミ、大なるものは長径一・三五^ミ。短径〇・七〇^ミ、深さ一・八七^ミ、最も整形せるもの径三六^ミ、深さ七七^ミで見事な彫刻である。

牡丹岩より下流では高さ四^ミ〜六・九二^ミに分布する。この□^印□^刷□^切□^れ川景観の最優美なものであろう。

(e) 川上村皆瀬(H・一四〇米)

川上橋上流より千五百^ミの地点に現在進行形のものに已に隆起せるものがある。水面下のものは径二^ミに近く、深さ一・五六^ミ、更に大なりと望見されるものもあるが、急端中

にあつて近づき難い。

隆起部のものは河床面上五・二八^釐、長径一・九〇^釐、短径一・六〇^釐、深さ一・五六^釐。比較的深く彫刻したものでは径各々十八^釐、深さ四八^釐でその内面の摩滅の跡の滑らかさは到底人工の及び得ない自然の妙趣である。

尚、この地域では谷壁に穿った横穴を二ヶ所発見した。高さ三・七九^釐の箇所径各々二五^釐及び三四^釐、深さは各々一三・五^釐及び一五^釐であつて、完成への途上、隆起のため彫刻が停止せられたものである。

三、結 語

以上、西は三尾村の海蝕洞より東微東の皆瀬に至る甌穴の隆起せるものを計測した結果を綜合してみると

(一) 一地点に於ける隆起量の差は概ね一^釐前後で、各計測地点に於ける一般に最高と認められるものを連ねてみると第八図の如くなる。各地点の海拔高度に対して右の隆起度を点線で示すと、両地間の直線距離二九^{km}に互つて隆起量は概ね平均していると見られる。

(二) 仮に広野より上流皆瀬までを別個に取上げてみると、広野・下田原・上越方・皆瀬

の平均隆起量は六・二九^釐である。

(三) 最上流部を六・二九^釐とし、下田原五・五一^釐、広野四・〇五^釐と並べてみると上流部が大で、下流部へ漸次減量していることがみられる。

(四) 元ノ脇の一・五〇^釐を広野に連結すると、この直線距離一八^{km}に甌穴の存在を見なかつたが、大体順次西へ減量すると思われる。但しこの場合、久米穴の生成時期は自ら別となる。

(五) 上流部における過去の降水量や、谷形によつる流速の変化をそのまゝ地質年代的なものに連結して考えることは妥当でないと言を埃たぬが、上流部と下流部とで現代での下刻作用の進度に若干相違ありと見るが、たとえ常時不冠水河床面を採りたりとは言へ、計測の微細な數量は誤りなきを期したい。

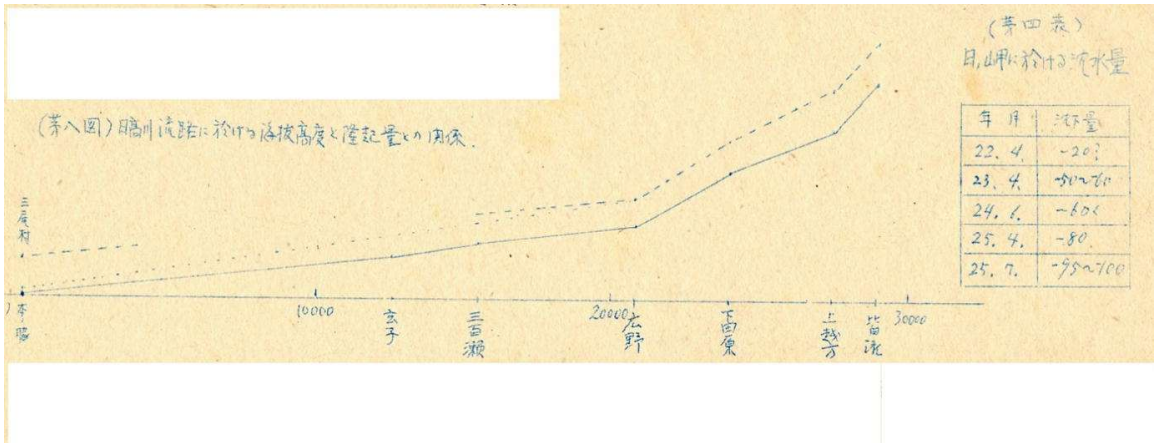
(六) 南嶺大地震後、沿岸の海潮侵入の状況は第四図の如くであるが、日ノ岬端では尚沈下が続いていると見られるので、本調査の計測値はプラスせねばならぬ。(第四表参照)

(七) 略々同紀層中に日高川の流れをもつ本郡地方での、傾動を穿知する一の示唆になりはしないか。

(八) 併せて半島南部の撓曲部の追求や、山地

(九)

位全いも生関氷れ係上前る討細い変る問ミみッ傾は有盤部
変域太知ず係塊とやと線。を密て化題今うク動郡無変で
化の平れるかと極、のの赤要なはに潮で後るをブ内、動の
の水洋なからの地こ関北道す検尚つ位あのか掘口の或の地



註一 和歌山測候所
渡辺正之氏 和歌山縣下の地殻變動について

註二 防災研究所
佐々憲三氏 和歌山縣地盤變動調査報告書

註三 前掲書

問題、冷水塊の潜流南下の問題や黒潮そのものの流体変化など相関連して研究しなければならぬ問題は多い。

(昭和廿五年十一月十五日記)

日高和歌史要

潮音舎 井上 豊太郎

一、 今われわれが日高短歌会を結成して歌道に
しんでおり、之の会員は六十名もあつて、な
かなかさかんであるが、むかしの人々のなかで
どんな人たちがどんな歌をよんでいたかを見る
のも一興であろうと忙中の時間をさいて五月が
かりで日高歌人の歌をあつめて列傳体に編成し
てみた。

一、 大体いまわれわれの手にあつてゐる資料は二
百年この方のものが多くそれ以前のは、容
易にみつからないものと煎じつめれば三十五年
この方となり、それも資料の入手が困難であり、
何十年かこころがけてあつめた資料の貧困勿忙
中の編輯何分こころにまかせない。

一、 ここに掲出する歌人の歌は、もちろん現在の
歌とことなり、古今集以来の古い形式の歌であ
り、現在のわかい人にも読破に肩がこり興味の
すくないものかもしれないが、歌などは本来傳
統的なものである故に古きをたづねて新を知る
と云うことが必要。しばらく心をひそめて古典

の味にひたつてもらいたい。

一、 むかしの人で歌のよんだ人の傾向は、まづ神
官・僧侶と地方の旧家・大庄屋などするような
上層階級の人たちにかぎられていたようである
が、中心になる指導者があると、そこにおのづ
から文華がさいている。

一、 日高の近代和歌を概見すると、明治維新前後
が隆盛で、これは本居宣長・本居大平の影響が
いちじるしい。加納諸平と云う天才歌人の出現
も大影響をおよぼしている。

一、 御坊を中心として瀬見善水、南部を中心とし
て熊代重里この二人を中心として多くの人が歌
をよんでいることはおもしろい。瀬見善水は父
の瀬見善隣が本居大平の門人で、善水はそのな
がれをくんでおり大平門の加納諸平のち伊達千
広にまんで数多の門人中両人の歌風を如実につ
たえているのは、善水をもつて第一人者とする
ともらして溢美の言ではない。この善水のなが
れは小池眞景死亡を最後として終止符がうたれ

たことになる。

一、また熊代繁里は、はじめの師山内繁里が本居門人であり繁里はまた本居内遠に国学をうけ歌は諸平にも指導を受けた筈なるもその性格上歌は内遠流のよい性格をあらわしておる。南部の人や田辺の人が沢山歌人として歌史にかゝげらるるのは、繁里の指導によるとおもわれこりは、三栖の宇井可道の死をもつてその終止符とする。

一、歌のすがたは善水の傑出した才気喚発をのぞき他は古今集を一步でてなく格別とりたてて

(昭和二十二年七月三十一日)

教専寺西海

由良阿戸教専寺西海は明和三年七月十一日遷化しているから、今から百七十何年か昔の人であるが、和歌を林松庵俊榮にまなびこれをよくした。「遺葉湊草」二巻がある。

暮れかかるふもとの里の夕日影峯は千色にてらすもみじ

こぎいづる舟をほのかに秋風の吹井の浦にはるる朝霧

往生寺西阿上人

財部の往生寺を中興した住持で行僧徳本上人得度の御僧歌を澄月および梅月堂にうけた本筋の歌人で大圓大徳とよばれた。天明六年四月八日遷仕。遺稿は傳わらないか、短冊にわづかに左の一首が残りある。

早春霞

花はまだ梢にこもるよしの山霞や春と匂ひそむらん

徳本上人

念佛行者徳本上人は有名な行僧であり、浄土宗管長福田行誠上人が勅になぞなえて編修した「徳本行者傳」三巻は有名。志賀村の人であり文政元年十月六日遷化。「道歌集言葉の末」一卷印行されている。

あざあざとかきうかべたる吉水のふかき心をくみてこそ知れ(一枚起請文)
世の中のみなうきことを夢にしてその日くらしの身こそやすけれ

光明寺窓卧

三尾光明寺の住持。歌を尾崎雅嘉にまなんだ。尾崎雅嘉は有名な国学者で「雅言葉覧」の著がある。文政九年(一八二六年)に七十一歳で歿してゐる。

音高く波のひゞきのきえつつ月すみのぼる比井の御崎に

風もやみ雲しみだれて山水の脇にいく度時雨ふるらん

塩路有嗣

通称園藏、本居大平の門人として篤学のきこえありし人である。文政十二年八月十九日歿。その歌大平偏八十、「浦の玉集」にいつる。長歌白崎の歌は有名である。

老いされば野辺の若草もえいでぬ我家のさくらいつかさくらむ

音にのみきゝてしのびし山菅の三穂の岩屋を今日みつるかも

塩路有年

塩路有年は塩路嚴穂の父自庵なるべしとは、養孫塩路藤雄氏の言。また歌をよくした。

こころある人にみ見せばや庭もせの道成寺の花のさかりを

塩路有隣

塩路有隣は藤井の人で医を業としたが、元来国学の家筋とてつとに文学の志ふかく、居豊かに学び詩歌とものにたしなみ、八重の潮路一卷の著がある。昭和五年九月十日歿。(一九三〇年)歌は岡月次集にでてゐる。

春風にちらさじとてや伏見山花もな里の霞こむらん

春ふかく櫻の宮の影とめて花にうかるる舟あそびかな

小竹昌豊・昌芳・昌睦・昌信

いづれも小竹八幡宮の神官で歌をよくした。その歴代は拙著小竹八幡神社誌を参照されたい。

敷島の大和錦のめでたさをわが大神のみめぐみとしれ(昌豊)

六十路すき神につかえてのこりなくもとの高天間に今日は帰らむ(昌芳)

小竹宮神の恵のあらはれて萬代のかけていはふこの声(昌睦)

あなたうと君が代ふりて今の世に日高にませる大人ぞ名高し(昌信)

瀬見善隣

天保十三年十二月十七日歿。

後こんといひしに松の心さへ結ばられつつ老やしぬらん

瀬見善水 朝風を心してけふ若竹の巻葉にむせぶ露やみだれむ

江川の人で明治維新前は大庄屋、維新後は民政局参事や神奈川縣權大属などをした人である。歌を加納諸平・伊達千広にうけもつとよく、その衣鉢をつたえている一人である。明治廿五年（一八九二年）一月十三日歿。

跡とえば血になく鳥の声おちて大城はかたものこざりけり

栗田山こえかぬるまでに夕日影のまさほににほふ丹つつじの花

美香の舎津や女

美香のやは瀬見善水の舎号でつや女はその室、小池徳太郎家の人といわるる。春詠草は二巻あり収載の歌百八首。柿園・椋園（加納諸平・伊達千広）のながれをくむ、才氣ばしった詠いぶりであり、この二巻は明治七年（一八七四年）二月と五月の日付がある。

春ふかく緑に染むる柳の糸のみだれみだれて燕とぶなり

今日もまたあるく朝戸の春風につれてきこゆるうぐいすのこゑ

瀬見元武

瀬見善水の長男で通称儀一郎、神童のほまれたかく詩歌・文章ならびに巧みだったが、文久二年（一八六二年）八月父にさきだつて死亡した。その詠、三熊野集にでている。彌生月次記一卷がある。

大井川ちりうく花の水上を月にたづねて夕あるきせん

眞袖にはありともしらぬふゆ風にもろくちりゆく花あふちかな

瀬見知義

瀬見家の分家の人かといわるる。明治の初めごろの人、歌は伊達千広の龍神旅宿兼題にでている。

山住は友こそなかれ小夜ふけてねられぬものはさをしかのこゑ

山の端の月にうかれてさを鹿のつまこふ声もさやかなりけり

小池矩平

善水の弟で藤井の小池家をつぎし人。句人で佳有と号している。短歌もつくらないではなく、伊達千広の龍神旅宿兼題のなかにでている。

明治六年七月二十一日歿

ふきおくる峯の夜嵐身にしみてあはれもふかきさを鹿の声

なかなか鹿のおとづれなかりせはながき旅ねの夜をいかにせん

瀬見善時（しづんど）

善水の弟・靜人、詩篆刻をよくした。明治二十一年九月二十日死亡。探奇小稿二冊・全拾遺一冊・三山の葉一冊の著があり、いづれも上梓されてゐる。三山の葉が短歌集であり、伊達千広の龍神旅宿兼題に歌がみえている。

きけばまたわれもむかしのうきことをおもひぞいづるさを鹿の声

夜やさむき月やかなしきたえかねて外山の鹿のたえずなくらむ

瀬見善礼

瀬見善水の弟三人あり、靜人（善時）は歌もつくったが詩が本領、矩平は句人であつた。ひとり善礼伊達千広にまなびこれをよくした。詠は石田惟恒三熊野集・伊達千広夕日岡月次集にみえている。歿年未詳。

くれないの錦のとばり春ふかく桃さく谷にすむ人やだれ

うちわたす山も狹霧にかきくれて秋の心のやる方ぞなき

中村純功

善水の甥にあたる。（伊達千広龍神出湯日記）富安の人。其の生歿年をつまひらかにしない。歌は龍神旅宿兼題にでている。

夜をさむみかれゆく峯の木がくれにほそりはてたるさを鹿のこゑ

時雨ふり空はくもれどわが宿は軒の紅葉のてらぬ日そなき

瀬見善經

瀬見善水の嗣雄三郎か、さだかならず。伊達千広の竜神旅宿兼題に歌五六首いづ。

さよふけて野とも山ともわかたねど空にさやけきを鹿の声

紅葉ばはこがれつくして山里の軒のあらしもいろにふくなり

朝陽舎の歌人

瀬見善水に教をうけた人々の歌を一括収載する。晩年善水が朝陽舎をもうけて歌を指導した。これに参加して指導を受けた人々には、御坊町の小川清尋・小川為二郎・小竹田道真・田端春清・菌義成・菌直道・善妙寺室木下常枝・玉井梶子・豊田豊延・川村徳藏・塩路敬義・下津義質・小池眞果らがある。

とふ人の雲かくれにし春なればいとどかすめる月の影かな

言の葉の匂とどめて櫻花はかなくちりし春ぞかなしき

諸人よあはれとおもえ秋の夜の露よりもろくきゆる生命を

小川清尋

小川為三郎

菌義成

春の香もとりがなく音もこの春は忍ふこころのたねとなりనికి

蘭 直道

あはれ世の車かえしの櫻花風にひかれて人はゆくなり

木下常枝

くもりなき天つみ空に声たてて千代よびかはす田鶴の一声

玉井梶女

言の葉の花をしたひて鶯もむかしの音をばしのびてやなく

豊田豊延

心なく花もみすていそぐらむ山の霞のかすかなる世に

川村徳藏

朝日かげのどかににほふ大空にたちまう鶴も千代よばうおり

塩路敬義

鶯のきなきてあそぶかげもなし雪にうもるる梅の花笠

下津義質

塩路和種

藤井の人で通称半太夫、歿年をあきらかにしない。明治初年ごろの人とおもわれる。歌は加納諸平・瀬見善水・伊達千広または本居家に学ばれたものとおもわれる、詠、伊達千広の龍神旅宿兼題・三熊野集などにでている。

三月末っ方亀山にのぼりて

日高川きし田の鈴菜うつろひぬあがたの春はふけにけらしも

さを鹿のこえうらぶれて山畑のかぐの木の実はいろづきにけり

西言知

(一八四八・五四年)

嘉永ごろ天田の大庄屋などしたことのある人で多分塩屋の人、今傳記を審にしない。歌は諸平あたりに学びしものとおもわれ通称左内、三熊野集などにでている。歌は諸平あたりに

うれしさはかきりもしらず久方の雲井よりたつ春をまちえて

青柳のはなだのいとや朧夜の月毛の駒の手綱なるらん

田端年蔭

田井田端家九代の当主、文久二年七月四日歿。本居大平について学び歌をよくした。のちまた千種有功郷にも学んだ。歌は三熊野集などにでている。のちまた千種有功郷

よのなかをへだつる庵のうつき垣ねたしや人もまれにこそとへ

木末より羽袖かへしておちくるは蝶にはあらじふれるもみじか

田端春清

年蔭の男、明治三十九年十二月八日歿。歌は父にうけてよくし左のごとき遺詠がある。

月が瀬の梅やちりけんみ吉野の花の木間にうぐひすのなく

龍田義陳よしのぶ 藤浪にかゝりし松の下かげはゆかりすゝしく夏なかりけり

川中村の人、学を本居家にうけて歌をよくした。歌は清渚集にでている。慶應四年八月十五日歿。(一八六八年)

龍田林啓

龍田林啓は龍田義陳の後であろう。(一八七八年) 明治二十一年二月歿。歌は伊達千広の夕日岡月次集にでている。はたゝかみなるとを雲の名残にて日高の里は雨はれにけり

川瀬廣蔭

御坊町東町川瀬九助(当代)氏の祖父にあたる人で、その人は伊達千広の龍神旅宿兼題(一八六七)・夕日岡月次集(明治四年)などに収載されている。

夕ぐれに越えし尾上の鹿の音をやどる麓のねざめにぞきく(この歌千広巻中の秀逸と評す)
ほのぼのとあくる尾上は朝霧の八重たつ川の洲さきなりけり

久保田有恒

小松原中黒の人、伊達千広・近藤芳樹について和歌国文をおさめた。大阪毎日新聞編輯顧問たりしことがある。明治四十五年四月四日歿。歌は夕日岡月次集にでている。

蝴蝶とぶ園の牡丹の花かげに手飼の虎のねぶりよげるなる
時鳥生田の森に声すなり七めぐりして山やいでけむ

古久保實行

上山路村殿原の人、富士の家と号する歌を熊代繁里・瀬見善水らにうけて、これをよくする。明治三十六年五月二十七日歿。

若葉つむ人のゆききのかげみえて野澤の水は春めきにけり
打なびく柳瀬の里の河風にかげもみだれてちるもみじかな

藤田眞龍上人

衣奈、西教寺の僧、(一九二七年) 昭和二年三月四日示寂。眞龍和上語録がある。歌の師承不明、道歌に近くしてまた道歌をはなれている。

清風に琴はしらべを通はせつみのりの月はかよいですむ
花といえは櫻であれど花さきてひさしき花は菌の梅の花

林出高生(精一)

林出高生は小松原の人、歌を本居豊穎にうけてこれをよくした。歿年未詳。

見わたせば深山の梅やさきぬらん千代をかざしにかほる春風(岡本梅園還暦賀)

小池眞景

七十路の齡稀とも人は言えど稀にも杖はつかずありける(父竹翁古希賀)

本名徳太郎、藤井の人。歌学を瀬見善水にうけ、また本居豊穎にうけて、和歌をよくす。和歌のほか俳句また漢詩・漢文をもよくす。晩年土生八幡宮神官をなす。昭和十八年二月七日歿。

水有春

梅の花ちりてなかるるかわみずにひれふる魚も春をしるらむ
かずならぬ老の命を千早ふる神にさゝけてつかえまつらむ

山内繁樹

南部の人で歴代大庄屋をつとめた家柄、学は本居大平にうけた。熊代繁里などの先輩であり、家集歌常磐集三卷あり上梓されている。弘化三年七月十四日歿

木がくれて里こそ見へね朝煙一むらなびくおちの松原

おととひもきのふもさやかに山の峽よりいづる月影

山内繁徳

南部山内繁樹の息、国学・和歌を本居内遠をとし、また熊代繁里を友とした。明治十二年二月十一日歿。歌は清渚集・三熊野集などにでている。

舟きほひはまちとるらし南部の海霞の網をもるつちの音

時鳥月にうかれてたづねいる山々くらき夏木立かな

熊代繁里

熊代繁里は近代の南部の国学者・歌人として有名である。国学を山内繁樹・本居内遠にうけ、また歌は加納諸平に指導をうけた。家集・櫻蔭集数巻がある。また撰集に清渚集二巻がある。明治九年六月五日歿

たちつづく杉のみどりの中にたえて一すじおつる滝の白糸

霧しめるわか葉の中の夕月夜おぼめくかげのなつかしきかな

熊代須賀女

熊代繁里の恋女房となりし人で、歌は夫繁里のおしえをうけた女流歌人と云える。作品は清渚集等にでて

いる。

根芹つむいささ小川にかけみえて野丘はしろく梅さきにけり
朝はるたかほらけおきゆく舟の帆のみえてけぶる潮路に冬はきにけり

池田春尚

池田春尚は通称圓兵衛、熊代繁里家の下男奉公をした人。文才あり歌を繁里（一八八〇年）及び本居内遠に学び、当時の南部歌人中での上手であり、瓢の家集（歌集）一卷があり、歌は清渚集等にでいる。明治十三年（一八八〇年）六月十一日歿。

つく鐘の一声ごとにしらみけりをはつせ山の花のよこ雲
いと竹の声おもしろき花園に羽袖かえしてまふ蝴蝶かな

法傳寺慈碩上人

法傳寺改宗後十三代の目の住持で明治維新のころの人、その傳をつまびらかにしない。歌一首清渚集にでている。

春すぎてきなくも袖のわかみどりうらなつかしき鳥の音色や

志摩伊豆彦

志摩伊豆彦は南部において寺子屋をした師匠、嘉永（一八四八、六七年頃）から明治維新ころの人であり、その歌は清渚集などにでている。

うらうらとあそべる糸にひかれきて三輪の山辺の花をみるかな
白糸とさきみだれたる菊のうえにたれ朝霧の玉はきぬけん

岡崎松樹

南部の人、本居内遠に学んだ。その歌は鰻玉・鴨川・三熊野・清渚・打聽鶯蛙各集にでている。明治十四年（一八八一年）九月三日歿した。

山かたの大城にをればなく鹿も声をよせる夕嵐かな
山人のかえる袂にうちしめり眞柴におもる秋の夕霧

山崎繁平

南部の人、歌を熊代繁里にまなびてその詠清渚集などにでている。明治末年七月十六日歿。（一九一二年）

あられふり鹿島の神のみささずばこの里人はのこらざらまし
このゆふべ鮎子つるらし里の子か河の辺さらずかゆきかつゆく

糸川重年

南部の人で歌は熊代繁里に学んだ、その詠清渚集にのる。

朝雲に田鶴のなく音ぞかすむなちとせの春やまもりきぬらん

沖つ島霞にうかぶ春の日は蜚の伏屋もとうべかりけり

玉井寛尚

(一八四八—五四年頃)

嘉永ごろの人で南部の人、歌は熊代繁里門とおもわれるもいまその閱歴をとまびかにしない。詠は三熊野集・清渚集にている。

ほととぎすおもわぬ夜半のはつ声は夢こちしてねられざりけり

梅の花なほ冬こもる谷の戸のおくゆかしくもうぐひすのなく

大野忠快

嘉永から維新ごろにかけての人、今生歿年をあきらかにしない。南部か上南部の人であり、熊代繁里に歌を学んだかとおもわれ、その詠清渚集・三熊野集(西田惟恒撰)にでている。

ふるさとにいそぎやすらんゆく雁のあかつきかけてたゝぬ日もなし

鯨とるくまのの浦のあら浪もののどかになぎて春たちにつけり

芝秀恭

(一八八〇年)

芝秀恭は南部の人、明治十三年六月十四日歿。歌を熊代繁里にうけ、その詠清渚集にでている。

うぐひすのこゑにうかれてつみにこしわか菜は籠にもたまらざりけり

山たかくあかりたるよのこちして花みる春はたのしくもあるか

芝正恭

(まさはやす)

南部の人、秀恭子歌は鳥山啓にうく、詠草二巻がある。(一九一七年) 大正六年十二月四日歿。

かめに花さすがに大人の慕はれて過ぎしむかしのおもはゆるかな(広圓斎延慕)

秋の田の瑞穂の数のかぎりなくゆたけく経ませ萬千秋も(田に寄する祝、裏川里平四十初度)

鈴木泰平

(一八六三年)

南部の医師、文久三年十月歿。歌は清渚・三熊野集にいづる。

くまがしの枝さしかはす谷川に夕まどいしてくひななくなり

国栖がふく笛のしらべになびくなりうてなのたけの春の初風

堅田種知

(たねとも)

南部鹿島神社神官、国学および歌の師承の石田漁門・池永壽散・志摩伊豆彦・熊代繁里らにうけている。

その詠数千首、清渚集にも入る。(一九一〇年) 明治四十三年五月十八日歿。

ほととぎすまちわびてぬる夢路にも卯の花山をたどる夜半かな

惜めども甲斐もあらしになごりなし梢の紅葉さそわれてゆく(秋不留)

堅田眞種

堅田眞種は小一郎といい堅田種知の子で鹿嶋神社神官、歌を父にうけてよくした。

裏川里平

月夜よし夜よし今宵はほととぎす待ちあかしてもあればきかまし(待時鳥)

南部町の人、性飘逸・歌文をこのみ稻の花集一卷がある。(一九二五年) 大正十四年九月二日死亡。

もしきやふるきむかしの海士乙女世にいざないし御佛やこれ(道成寺本尊)

色ふかき花に心のうばわれて只見るばかりものは言はれず(花下言志)

以上六十五人、歌数百四首

嘉永津浪記所揚

宮本高広・森正之・山本松蔭・大江邦富・邦里・今井南遊・熊代蒼生雄・谷佐知・浜本作平・岡崎美枝子

・那須悦子・松本勝野子

久保田朗月・林出竹翁・小早川九輔・糸川清澄・中村弘隆・岡崎美樹・浜本清・古久保資敬・古久保明徳

・古久保善言哉・熊代有親・田中宇兵衛・佐々木如水・西川沾水・裏川杉野女(梅花盛所掲)・武田秀眞・寒川

信生夫などの歌もあるが資料を得かねかねたので省略した。

附記

(一九五五年) 昭和三十年五月この稿本を南紀郷土学会の事業としてハンプレットに謄写してもらったことにした。まことに粗末なものであるが、昭和廿八年七月十八日の大洪水に辛うじて流失滅損を免れた稿本の一つとして、郷土諸兄参考に資するためである。

昭和三十年五月三日

御坊市

菌の廃居にて

井上 豊太郎

記

昭和貳拾貳年七月参拾壹日 稿

昭和参拾年五月

發行

魚名「ゴリ」の研究

和田喜久男

卷十九

和名抄 鮠

崔禹錫食經云

鮠 音夷和名 性伏沈在石間者也
伊師市之

本草和名

□¹ 音異之反性
伏沈在石間

新撰字鏡ニ

「鮠□¹

同勅反□□ニ反
蓐也老也佐女」

佐女トアル

小柳漢和辞典

□¹ なし・鮠タイ・フグ河豚

「鮠 背老人ノ背はフグのようにしみがしようじるから」

源氏物語

常夏の巻

うつば物語

「西川よりたてまつる鮠、近き川のいしぶしのものの御前にて調じて参らす。」
国譲の巻

「鮠一籠 鮠 いしぶし 小鮠 いれさせ苞苴など副えさせて」

箋註和名抄

(鮠……)

嶧山君曰伊之夫之福州府志石状魚是也愚按伊之布之今俗又呼ニ吳利ニ又呼ニ吳利ニ又敦賀呼ニ
杜父魚ニ爲ニ伊之毘之ニ或呼ニ之毘須蓋伊之之之轉譌要レ之石状杜父不ニ甚遠ニ故其名錯互也本草和名云和名知
々加布利今本本草和名衍作ニ知々加々布利ニ今依ニ伊呂波字類抄所ニ引(性伏沈在石間者也)伊勢本鮠作□¹

*1: 魚偏に追

下同興ニ本草和名及河海抄引レ此按閩中開錯疏抱石出ニ於山溪ニ背偃而腹平大如ニ拇指ニ常貼ニ于石上ニ土人取以爲レ腊又云石伏伏ニ于溪下ニ崔氏所レ言鮠蓋是類也

(腊・ホジシ……乾肉、ひもの)

註 本草和名(古典全集本)

「[□]」 音翼之反性 又有 鱖 与恭反相 細魚 莫鮠反相似而

伏沅在不間 似有黒点 類着劒鉤

鱖 性伏沅吹沙鼻長七八寸 和名 知々加々布利」
余林反出崔禹

本草和名 右の如くにおいて、布利は其の四種のうちいづれに宛つべき和名であるか明かでないのみならず、古本には知々加布里とあるとあれば今の本の加字一字は誤寫であるかも知れないのであり、其のうちの鱖に和名抄は和名知々知布里なしてのる。此の鮠と鱖とは似て非なるもので、此の頃からあいまいであつたらしい様に今日でも尚あいまいであるようであれば序に

和名抄 卷十九

「鱖 崔禹錫食經云 鱖 音容和名 似鮠 魚而有黒点者也」
知々加布里

箋 註和名抄

「鱖 音容 知々加布里 云杜父魚生ニ溪間下ニ背有レ刺大頭闊口長二三寸色黒斑如ニ吹砂ニ而短也 崔氏所レ言鱖蓋是

今俗呼ニ加自加ニ 京俗呼ニ伊之毛知ニ 近江彦根謂ニ之知々无古ニ石部驛曰ニ如无古ニ或曰ニ登知无古ニ 阿波曰ニ知々古字ニ一種相似而抄背黒色腹脂色無鱗者與ニ杜父之淡黄黒色有ニ黒斑細隣ニ異京俗呼ニ不具利久良比ニ 近江石謂ニ之知々无夫利ニ又謂ニ登知无夫利ニ是知知不利之轉譌也 江戸俗呼ニ太菩波世ニ者亦是類也又按史記司馬相如伝鰐鰼鰼 集解郭璞曰鱖似ニ鰼而黒是陳藏器季時珍等書所レ載鱖魚即與ニ崔氏所レ挙不レ同蓋同名異物耳 本草和名在ニ鱖條ニ無ニ別有ニ和名ニ(似ニ鱖魚ニ而有黒點)本草和名引く同文略」

夫木和歌鈔 鰐

源 仲正

「誰かさは網の目みせてすくふべきふちにしづめる石ふしのみを」

とありて石ふしにあつるに鰐をもつてしている。鰐はイシモチで□□□□□□□□

和名抄 「鰐 伊之毛知 其頭中有石 亦名 石首魚也」

とあり、更にこの辞書にも石モチ 石首魚 とあれば夫木撰者の誤というよりも石ふし魚を知らなかったので石首を充てたものと解される。石首魚・鰻・伊之毛知は今、ニベと云えば通用が早い。

尺素往来(二条兼良・応永^(三九四一四二八年)頃) (阿倍川往来とあつたが)

「魚類者 氷魚 白魚 石臥 鯉魚(ヒンコ) 並雜魚(ザコ)等」

包下聞書

「一、越州^{ナマス}鱸といふはかちかかと云魚を背越にして焼からしをちらし上に盛也

一、越中汁といふはかちかといふ魚を竹の子白瓜など入調也 夏の汁の賞翫也 冬も奉る事有略してはへをする事も有」

と見えてかぢかが鰻に見え初めたがゴリはまだ見えぬ。

藻塩草

鰻 夫木抄引 仲生の歌をあげて

「ちかきかはのいしぶしと^{源氏に}いへり いなみ河によめり」

夫木抄と同様に誤をくり返してゐる。

易林節用(塵揅璣囊鈔 卷三 魚一喉の條に鰻イシモチとある)

「鰻 ゴリ」

寡聞にしてゴリといふ言葉及び文字は慶長^(一五九六・一六一四年)の比の易林節用より他には知らない。按ずるに古く和名伊師布之であつたのがいつの頃からかゴリといふ名を興へるようになって、易林節用の頃には既に鰻の字を宛てるようになったのであらうと思うが、矢張り当時の学者達の間には和名抄を見てゴリは伊師布之のことだから鰻の字を用いたものであるのではないかと思われる。(小柳・漢和辞典などになし)

難波江 卷四ノ下 蛙の條に源眞楫の河蝦考を引いて

「かじかはいにしへにきこへず古くは石伏といへる魚のことなるべし 和名抄鰻(伊師布之) 此もの石の間に伏てうべも石伏といふべきものなり かじかといふ名は此魚無鱗にして皮黒く斑文ありて皮の縮みたるようにみゆる物なれば皮臙(カハカシカミ)といふなるべし

かしかは連歌師宗長の九九の記といふものに

石ぶしかじかよの声きこゆれば

せきいるる庭の山水ころごと石ぶしかじか雨すさむなり

といふ是なり。いしぶしかじかとはまぎらはしきいひざまねれど、今の世にかはづをかじかといひ又かじかかへるといふ類にて石ぶしとかじかともいへるならん」

此れは尚石ふしちちかぶりとを混同してゐる様であり宗長はまだごりといふ名を用いてゐないことも知られる。

其の他古事記・書紀には人名に魚名を持つてしたのか多いから、ゴリもありさうに思つて調べて見たが、ニベ爾缶・オコゼ鱧・コシ尾興・アカエ赤兄・コノシロ鰯魚・カゾ鹿父・サバ鯖麻呂・フナメ鰯魚女・コフナ子鰯・シビ鮪・クヂラ鯨等はあるが、ゴリも石伏もカジカもチチカブリも見えぬ。まだこの頃は人の注意を引かなかつた存在であつたのであらうか。

和漢三才圖会

「黄鰈魚ゴリ・かしか・俗云吾里・一名加之加

黄鰈魚 黄鰈 鰈

本網

黄鰈魚無鱗魚也身尾似小鮎腹下黄鰈骨正黄背上青黄腮下有二三横骨二両鬚有レ胃群遊作レ声如ニ鰈性最難 魚之有力能飛躍者也其騰春夏近レ上秋冬近レ下亦是一異也肉曰平利ニ小便ニ消ニ水腫ニ多食發瘡疹微毒反ニ時芥ニ害レ人

餌 按和名抄載崔氏食經云 和名加 良加古 似レ鰈而鰈著鉤者也今加州浅野川多有レ之其声如ニ吾里吾里ニ夏秋人群集握レ

掬レ水畔ニ吾里ニ則魚多入ニ掌中又奥州鳥海山麓川多有ニ此魚ニ皆一目也伝云鎌倉ノ景政洗眼川也其他処々谷川有レ之賀越人賞レ之作鮓多食

此れはキギで今云ふアイカケのことであつて
和名抄に

「網魚 崔禹錫食經云 鰈 莫往反與罔同 加良加古 似鰈魚而鰈著鉤者也」

とあり古くは、カラカゴと云い漢名黄鰈魚で今ゴリと同じやうにキギとかアイカケとかと呼ばれてゐる。又同書に石状に宛つるに

「王斑魚 高魚俗云石伏和名抄鰈 鰈夫木集甲之非也 本網石斑魚生ニ南方浚間水石ノ処ニ長数寸白鱗

黒斑浮漑水面聞人声即劃然深入其長者尺余斑如虎文性姪春月蛇醫交乳故其子有^{とかけつるむ}毒

按石斑魚狀似^リ彈塗魚^セ而頭大尾紐有^レ鬚有^レ磬髻有^レ細鱗如^レ點其背斑文淺黒色腹白大者三四寸常伏石間故稀^ニ石狀^ニ又背腹其黒者呼名淡義坊主

夫木 誰か扱あみのめ見せてすくかつき渚に沈める石ふしの身を 仲正

とあり、之れも石伏に非ず和名抄に云ふチチカブリ鱸なるべきか

序に云ふ

續風土記「泥魚^{トシボ} 寧波府志 和名鈔 知々加布里又鱸の字を用ふるは非なり 俗にカジカ同名多し」

和漢三才図会

「渡父魚 杜父魚 黄[□]公 船釘魚 休念魚

とんぼ とんこ 読^ニ止牟保^一俗云^ニ止牟古^一

本網渡父魚魚生^ニ溪間中^一長二三寸狀如^ニ吹砂魚^一而短其尾岐也。大頭[□]口其色黄黒有^レ班背上有^ニ髻刺^一鰓^レ人又見^レ人則以^レ啄挿^ニ入泥中^一如^ニ船釘^一也 按渡父魚処々皆有如^ニ上説^一

此れは和名抄チチカブリ 杜父魚 かじかと云はれるものなるべきか。

玉かつま

「物語書などにいしぶしといふ魚は今の世にごりといふ物なるべし。此ごり鴨川・桂川などに多く有つて常に石の石の下にかくれるもの物にて石の下を尋ねてとるところ也。石ぶし云ふ名にかなへり」とあつて宣長翁のげにまことに眞正の石ぶしで、ごりを叙してゐる。はつきりと云つてゐるのは易林節用以来である。

水族志

「ゴリ一名イシブシ石伏魚。 大和本草曰

腹下にマルキヒレアリ、其ヒレノ平ナル所アリテ石ニ付ク是眞ノコリ也、臑(アブラ)多シ爲美味ヨシ形ハ杜父魚ニ同小ナリ背ノ文黒白マジル」

湖魚考曰

「イシブシ清水ノ流ノ石間ニアリ大サ六七分ノ物少シ狀大海ノカナガシラノ如ク色薄黒クヒレアリ水上ニ浮游セズタダ水底ノ石ニトドマリテ有也「カマツカ」ノ如シ夏ノ氣多ク有テ春冬ハ少シ取ニ流ノ下ニ簀ヲ張テ上ヨリ足ニテ石ヲフミサグリテユクニ簀ニトドマルヲアゲテ得ルナリ、按ニゴリハ淡水産

古名録

ニシテ流下ノ水底石間ニアリ大者寸許背黒色腹白色或帶淡藍色無鱗也」

「伊師布之 形状大和本草曰ゴリ腹下ニマルキヒレアリ、其ヒレノ平ナル所アリテ石ニ付ク是真ノゴリナリ但背ノ文黒白マシレリ又名イシブシ、加茂川ニ多シ 往年賀州鋤村ニ至ル頃ハ六月土用也上人名物ナリトテゴリ汁以醬油爲久 菊酒ヲ出セリ、其ゴリ一寸許ウロコナク滑カナリ、頭小指ノ頭ヨリ小ク尾ニ

ハ窄シ色黒ク腹微シ藍ヲ帶腹ニマロキ鰭アリ味美也」

とあることに依つてゴリの性格を最もよく示してゐるものもうかがはれる。その尤もの特長は腹下にあ丸き鰭でそれが吸盤になつてゐて石に吸ひつく都合のよいことになつてゐることである。其の體も大体は一寸位であつて何寸にもならないようである。

関秘録

「杜父魚は伏念魚ともウシヌスビト鰻とも書なり いかりとも牛盗人とも俗にいふ 越前国の産也 山川に有て冬

あられの降るときあられに腹をうたせて流るゝを拾ふこと也 形容は江豚にまがふて七九寸の長成るも有尤多くはなし 是を取へ献ず 則彼毒魚の河豚又海豚此鰻鰻に似たる故鰻と書誤るものなり 鰻は本草にも石決明とてあわびのことなり然れども誤り来れること久し 又鰻とも云て全くあふらはせにまがふものにて長一寸と九分と限る これも石川にすむ魚なり 京都にては加茂川の鰻汁て秋甚だ賞翫す 嵐雪が杜撰集に

味噌摺に涼しき鰻のをよぎ哉

とあるは嵐雪は佗国の者なれば急きて夏もてなしたるものなるや

ころころと小石流るゝ山川は夜は明にけりかしか鳴なり

是は杜父魚は冬鰻は秋石澗にて啼くもの分明なり」

とあるのは杜父魚と鰻との別を明に記してゐると思ふと鰻は秋石間に啼くとあるは又混同したものであつて、ゴリは決して杜父魚、カシカのように啼くものではない。

扱てゴリについて一わたり見たから混同されているカジカ杜父魚（カクブツ）について

水族志

「カシカ 大和本草曰杜父魚形河魴ニ似テ色黒ク長サ五六寸アリ「ハゼ」ニモ似タリ此魚ヲ河鹿ト云説アリ夜ナク故ニ名ツク 本草啓蒙曰「ハゼ」ニ似テ肥大ナリ大頭 鱚 ロニシテ扁ク細鱗アリ色淡黄黒ニ

シテ黒斑アリ肝二毒アリ食フベカラズ ソノ卵ハ石上ニ粘着シ形麥粒ノ如ク多ク並ビテ色赤シ如スルニ随ツテ漸ク黒クナル コノ魚且タニ鳴ク其声獨リテ蛙ノ如シ 湖魚考曰カシカ常ニワキ出ル清水ノ川岸谷川ナドノ岩間空間ニアリ形「チムコ」ノ如ク少シ大キシ頭大キクロモマタ大キシ色薄黒ク腹少シ薄白シ大サ三四寸五寸許ノ物モマヽアリ味ヨシサデニテ岩間ウロナド追出シスクヒ取也

山堂

山堂肆考曰杜父魚一名吐哺魚似ニ吹沙ニ而大黒皮細鱗如粟無鬣俗呼ニ薄魚一。

按杜父魚ハ蝦虎魚ニ類シテ頭扁濶口極メテ大ニメ蟾蜍ノ頭ノ如シ類ニ曲れる刺アリ身大ニ濶扁腰ヨリ尾上ニ至テ「ハゼ」ノ肥大ナルニ似タリ全身黒色黄ヲ帶細黒斑アリ尾上ヨリ腰ニ至リ横ニ黒斑三條アリテ無鱗ナリ尾鬣ニ黒斑アリテ微紅ヲ帶眼裏淡黄色瞳黒色身大サ六七寸横濶三寸許

(イ) フグワカヒ 一名ウロロコ 大和本草 本草、チチンコ 湖魚。
筑前 啓蒙 考

本草啓蒙曰杜父魚ノ一種相似テ小ク背ハ黒色腹ハ油色ニシテ鱗ナキモノヲ「フグリクラヒ」ト云 湖魚考曰「チチムコ石ブシ」ニ同シテ清水ニアリ状「ナマヅ」ノチイサクシタラン如クニシテ口大キク大ナル物ハ二三寸余リアリ色薄黒ク鱗ニ黒点アリ常ニ水底石上ニアリテ虫及ビ小魚ヲ取食フ故ニ釣ニモマヽカヽル也。

(ロ) カクブツ一名カコブツ 越前 阿ラン魚 山海名 物類称呼曰「カクブツ」ト云物ハ北海ニテ雪霰ノ降ルトキ福井 産図会

腹ヲ上ニナシテ水上ニ浮ブ魚也。山海名産図会曰越前霰魚、此ノ国ノ外ニナシトゾ霰ノ降ル時腹ヲ上ニシテ流ルト云、一名カクブツ声アリ考ルニ杜父魚ノ種類也、按ニ「カクブツ」ハ越前福井川ノ名産也。形状ハゼニ似テ肥大ニシテ其身極テ大ニメ五六寸廻リ頭モ大ニシテ「イカリ魚」ノ如ク扁ナラズ「ハゼ」ノ頭ノ如ク大也刺ナシ其色淡黄色褐色腹白色尾鰭ニハゼノ如シ、其肉厚シ味ハハゼニ似タリ

とあつて、カジカとフグリクライと杜父魚とは同類で別魚であることを、翠山翁は説かれてゐる。所謂杜父魚カクブツは霰魚と云つて越前福井川の名産であるといふ、夫れが本草啓蒙には毒あり食ふべからずとあると見ゆる。関秘録には之を城主へも献するとあるが毒ある魚を献して手討に合ふべきである。其の様に色々と説のあるもので

嬉遊笑覧

「大和本草 杜父魚の條に京都の方言にだんぎ坊主といふ魚あり、杜父魚に似て其形背高く是亦杜父魚の類なり。

本草啓蒙、杜父魚京にて石まち、彦根にてどほ、仙台にてかじか、勢州にてだんきほう、江戸にて土鱸魚（タホハゼ）といふ物あり、小野蘭山晩年の説にこの石もちと云ふ魚は尾圓し、杜父魚は本草に其尾岐とあるにかなはず、寧波府志に出たる泥魚これなりといへり」とある今本草啓蒙も大和本草も見すしてゴリ・カヂカを云ふのは実におはづかしい話ながら見てゐないから御尋ねする呼び出しにする解である。

斯様にゴリとカヂカ杜父魚（カクブツ）は同類異魚である様ながら今日尚之れを混同してゐる。最も近い所で俳句家の歳時記であるが、其の前に一寸前にもふれた淡義坊主といふのは、和漢三才図会には石斑魚・石伏和名抄鰻に又呼もあること前に引用の通りである。

安布良加須

「水の中にも知者は有けり よの魚に教化をするや淡義坊」

洛陽集に

「淡義坊氷の天井張られけり 春澄」

とあり、人倫訓蒙圖彙に淡義坊売あり其の註に曰

「こまかなるぎこを桶に入になひあるきだんぎぼうといふなり。是を都の幼少なる子供もとめ水鉢又は泉水に放ちなくさみとする也」

と見えるのは、今日の金魚のようである。本草啓蒙には杜父魚の俗名で勢州でいふとあり、大和本草に杜父魚の條に京師の方言にだんぎ坊主といふ魚なりと、嬉遊照覽に「按するに京にてだんぎ坊といふは凡僧經論をみずに咄すを放すといふ秀句にて淡義坊といふとぞ」と云つてゐる。

物類呼称にはダンキバウ京・メダカの方言としてあるのは人倫・訓蒙圖彙の云ふ所と一致してゐるように思はれる。

俳諧の歳時記と云へ滑稽雑談集、^{（二七三年）}正徳三年序文あるといふのは俳諧歳時記の種本ともいふべきものであるうと南方翁か云はれてゐるが、遺憾ながらまだ見る機に接していないかばかりか、私の手許にある貧弱な歳時記で見ると、

増山の刊に、秋の部に「かじか さび鮎」とある。

俳諧歳時記葉草 十二月の條 かの部

「かくぶつ杜父魚・山海名産図会・越前の霰魚に此国の外なしとて杜父魚に充るに誤也とぞ霰のふる時

腹を上にして流るゝといふ一名たかくいつといふ声は杜父魚の種類也杜父といひて誤にもあらざるか
続猿蓑 かくぶつや腹をならしてふる霰 拙候」

同 四月 この部

「鰮・和名抄 鰮 和名伊師布之 崔禹錫食經鰮魚性伏沈して石間に在もの也。遊覽志石首魚毎年四月海洋より来る数里を綿直して其の声雷の如し海人竹筒を以て水底を探り其声を聞之網を下し流を截りこれを取る也」

同書 秋 かの部

「かし 鰮 俳諧歳時記云正字は黄鰮魚父魚の属なり水底にありて鳴魚なり、故に其の魚をあやまりてかじかと称す。諸国にあり伊豫・越前・越後・山城などに多し、その地によりて名もかわり形も声も大同小異也、石伏コリ・石クラヒ・石モチ又川オコゼ伏見・クチナハドシヨ伊よ・マル嵯峨・ムコ近江アラレ魚越前この外にも猶あり近ころ山海名産図会てふ書に委しく論じたればこゝに畧す。青藍云蕉門の先哲のよめるかしかは蛙にあらず、

猿蓑 あやまりてききうおさゆる鰮かな 嵐葉」

新撰歳時記 明治四十三年刊 今井柏浦撰

夏 鰮ゴリ・石伏イシブシ・石首魚・川魚の名・形ハゼに似て長三四寸・色淡黄色にして黒斑あり・水にありて鳴くといふ。

秋 鰮カシカ・鰮ゴリ・黄鰮魚淡水に産す、形沙魚に似て頭大きく口広く鱗細し背は黄ばみたる淡青黒にて腹は黄白なり、水中にありて鳴くといふ。

石おこすひとをやうとむ鰮鳴く 白雄

尚二冊ばかりあつた筈だが、今見当たらず、新しい処は引用に及ぶまいので止めて置く。

小柳漢和辞典

「鰮シコ・ドヂヤウ鰮に同じ・イナダふりの幼期の名・カジカ溪流に棲む小魚・かじか・ごり・杜父魚」

難波江 蛙條

「孝云杜父魚は本草綱目卷四十四にみえたり、溪澗小魚ともありて魚なればなき声あるべきにあらず、されば俗にかじかの名ありて源姿自から別物なれば楽庵しかいへるなり、かじかに虫と魚の二種ありて相関渉せぬものと心得べし。但いづれも俗称なり、小谷氏物品識名にかじか杜父魚あてたる是今の称谓

なり。森養眞云杜父魚は説文鮐といふ魚也といへり本草綱目には杜父魚とは別條にしたれど鮐魚（即鯊魚）と相 ならべてのせたり、ふるくは同じくて後々に種類をこまかにわかつて二條にしたるものならん」

今各地の方言を一わたり記して置くことも無駄であるまいから、水族志に記すところを見ると、

△ゴリにはイシブシの他に別名はなさそうであつて一般に通用の名称である。

イシブシは別名といふのではなくて、古名といふ解である。

△加志加魚 本朝 一名川オコゼ大和本草伏見・石モチ同京・チンコ同近江・トンボ同筑前・道満^{ドウマン}同西近江食鑑

・ムツ物類称呼近江・イシブミ同上・チチコ同上・ネンマン同筑前・ゴス同出雲・スナホリ同伊賀・カジイ同駿河沼津・ゴロモチ本草啓蒙伏見・ウタウタヒ同淀・子マル同嵯峨・ウス^{ウシ}ヌスビト同播州・スデソコ同上・トチンコ同・チチンコ同彦根・子ンカボ同駒井村・ボンノコ同・ムコ同・トホ同備前・ドウボウ同上・トンボウ同筑前・トボウス同上備前作州・アブラハゼ同予州西條・クチナハドンコ同上・イシビシ同敦賀・イシビス同上・テンジョ同上・クロテンジャウ同上・グス同上越中・トンゴロ同越前・ドンクウ同上・トンコ同上・ドンコウ同伊セ龜山・ドゴズゴ同上・ダンギボウ同桑名・ドンゴウ同筑前・ドンコウ同防州。コッポ同上・ホンシキシヤ同上・サムライ同上・ゴンバ同上出雲・カハギス同上加州・チ^ツコウ同上阿州・ゴモ同上薩州・ゴモゾウ同上・ベト同佐州・ベドチ同上・アカゴウ同上土州・アナコウ同上・アナハゼ同上日州・キハチ同上・シマハゼ同上・イカリイヲ同上・タカノ羽紀州伊都郡渋田村

△フグリクラヒ 一名ウロロコ 大和本草筑前・ヲロロコ本草啓蒙・ドンツコ同上予州・ゴロツボ同上勢州山田・ドロボハゼ同上桑名・クロボウズ同上龜山・クロンボ同上・タボハゼ同上江戸・エツタ江州石部・ドチンカブリ同上・アフラ魚同上江州山田・チチンカブリ同上石部・ヤマドンコツ同上防州・チチンコ湖魚考・ドロボウ同上・ガンブツ同上・ウシヌス人同上・ムカクブツ 一名カコブツ越前福井・アラン魚山海名産図会等である。

斐太後風土記

「いづれの川にも産するが、高原川、白川等に特に多く鱚 チチカブ チチコ 鱚^{ササ}ゴリ ゴリンコ」とあつて此の地方の称呼であるといふ。余義ながら阿麻古といふのは特にあまご谷のみに住するとある特殊の魚であるらしいが其の形状は記していない。

他に地誌を丹念に調べると相当変わった面白いことはあるであろうと思うが今とてもそれが出来かねる。わが紀州においても、もとよりゴリもカジカもその適正の溪流に住していることは確かであるが、ことは続風土記に

「石伏魚 福州府志 和名抄 伊師布之 又引禹錫食經 鯢の字を用ふるはたしかならず 若山ゴリ」とあり、近人は谷徳太郎氏の井上氏への書簡に、紀ノ川田井ノ瀬橋上流数町の農村、此処にゴリが住んでいるといふことである。どうも此の地ではゴリの住む清流とはいささか縁遠いのではないかと思はるゝが其の魚の形状を書していないからゴリとせざるを得ない。いづれにしろゴリといふ名のあることでも魚の存在が知られる。(私は三十年もつと以前、龍神式屋で御馳走になったのは、大変な自慢であつて大御馳走のようであつたが、たしかゴリときいたと思うが今記憶から余り遠のいて何とも云えぬが、山間部で一応縁のある方は尋ねて頂きたいとお願いする。)

紀州魚譜

ゴリをチチブ(クボハゼ)に宛てて左の如くある。

「チチブ(クボハゼ)」

方言トボクロ(紀ノ川筋) クロコ(本宮) コロビシヤ(那賀郡山間部) ドマグロ(田辺付近)

トチコ(藤並) チチコ(富田川・すさみ・和深) イワスイチチコ(栗栖川) カワハゼ(橋本)

クロハゼ(古座川筋) ハゼクロ(御船) 小なみをゴリ(紀ノ川筋・高野山・湯浅付近) ……………

以上は何れもこれに近いものの総称である。

体は稍細長く肥大し頭部は少しく縦扁する。体は暗黒色で腹面は稍淡く胸鰭の基部に白條を有する外著しい斑文がない。体長二三寸内湾や河流に多い」

とあることに依つて見ると其のゴリではなさそうである。ゴリは内湾や河流には住まない筈で、山間も特に清流の所であり体も寸に九分と云はれている。

斯うした特に希少の魚であるために眞の物を眞に呼ばず、偽の物を眞に呼び、眞を偽に呼ぶこともあり得ることもある、特に注意すべきであるまいか。或は紀州で云ふゴリは魚譜の所謂之に近いものの称であるのか、然らば学名のはおこがましい言葉ではあるまいか。

紀州魚譜

「カシカ 河虎 杜父魚

方言 アイカケ(田辺・御坊・御船) アイカイ(那賀) アイカケチチコ(栗栖川) ゲツバ(藤並)

カブ(御船) タカノハ(橋本) サンヤス(和歌山・高野山・那賀) チチカブ(新宮奥) シヨロ

イ(明神) ボツカイ(富田川筋・古座川筋) フグ(高野山)

体は稍細長く側扁し頭は幅広く僅かに縦扁する、前鰓蓋にはその上後縁に鉤條の一刺を有する。背鰭は二基より成り皮膚は平滑。背部は黄褐色で下面は白く背面に不規則なる五條の黒色横帯あり、すべての鰭は黄色を帯び数多の斑紋を有する。体長四寸内外、溪流の岩石の間に棲息するが、余はかつて之を内湾で得たことがある。焼乾して煮るか田楽として食する。秋脂肪多く頗る美食である。和歌山付近では之を安産の薬といひ、古座川筋では産後の乳汁の出ぬに効あるといっている。」

此の魚については水族志に「キギ 黄鰯魚 ギウギウ 紀州若山 アイカケ 物類称呼北国 アイカイ 紀州伊都郡志」

とあるもので、カシカ 杜父魚、とは別魚であることを記してゐる。

又、紀州魚 キギをゲギキ 禿黄魚

ナマズ科 ギギ又はギンギ(岩出・橋本・高野山・湯浅)

キウキウ(和歌山湯浅) ケバチ(湯浅)

として水族志も異魚になしてゐる。紀州の魚名は斯様に異つた名を用いられてゐるものか皆さんに御尋ねしたい。

言林ニ

ゴリ 鰺 よしのぼりの方言

葦登 棘 きよ 亜目鰲科の淡水魚
つき

体いやゝ長く後部側扁頭は無鱗で幅広く頬の筋は発達し左右の腹鰭は合して吸盤を作る。作長八糎位、生きてゐる時は美麗な斑紋がある。美味。

とあるのは、ほんとのゴリであろうと思ふが、ノボリとは古来一言も見ない名である。又川かじかとして

カシカ 鰺 杜父魚 となして別にあげてある。

紀州魚譜

「ヨシノボリ 葦登

体は稍細長く殆ど筒形で頭部は縦扁する胸鰭は大きく、その基部に白條を有する。体は暗褐色で体側に十個ばかりの暗色横紋を有するが、また明かでないものを有する。第二背鰭には白色の縁取がある。体長二三寸河流に饒産する」

とあるも、相似たやふであるが、ゴリと云ふ、チチブとは同科であるか別魚としてゐる。

大言海

「いしぶし 杜父魚 石伏ノ義、常に水底、沙土ニ居リテ浮游セズ、福州府志ニ石伏魚トアル是ナリト云フ淡水魚、今かしかと云フ。

かはかじか 川鰍 川鰍 川魚の名、形はぜに似テ三四寸許肥大ナリ、頭大キク口闊クシテ扁の鱗細かし、色淡黄黒ニシテ黒斑アリ、清流の石間ニ居ル腹ニ圓キ鰭アリ、石ニスヒツキ水上ニ浮バズ、一名コリ・イシブシ・杜父魚」

とあつて稍混同している様で、ゴリを記してかんかとしてゐるやうである。左様にこじんを頓着なに記し來ったのであろうか。

南方全集 七ノ三〇五頁「ドンコの類魚方言に関する隣内君の疑問に答ふ」

といふ文中、宇井氏の魚譜を讃辞して「宇井君著書をよく調べて、その標品を参看し諸魚の形態をよく明らめた上、方言調査に取かゝられん事を隣内君にお勧めする」といはれゐる実に尤もなことであるが、此のゴリについての、紀州魚譜の説は相違のないものであるうか、私は今皆さんにお尋ねしたいのが本願である。其処で私のせまい見聞を正直記したのである。

附言する

南方翁は同記で「水族志に筑前福岡でドンコ又はほゞコヤシ、紀州でアナハゼなどあるは、宇井氏説に田辺でマラスヒ海近い水底石穴に居り、常に頭のみ出すから、アナハゼ形が彼物に似て毎日穴に吸ひ込まれおる様だからマラスヒといふと、諸者諸君は俺もそんな奴に吸はれたいと云ふこと受合いだ」といふようなことを書いてゐるが、水族志はボボコヤシなどはないが南方翁の洒落である宇井氏の魚譜にはまさしくスラスヒ(田辺)とアナハゼの條に記してある。

要する一匹の魚が其の地くで各名を付しているので全く解し難い。素人にはその形態も充分に得心しないので更のことである。さりとて学名などいふものも亦さらにむつかしくするものでもありはすまいか。

ゴリの文字について

和名抄
本草和名
易林節用
関秘録
言林
鱖
鱖
□（魚偏に追）
鱖